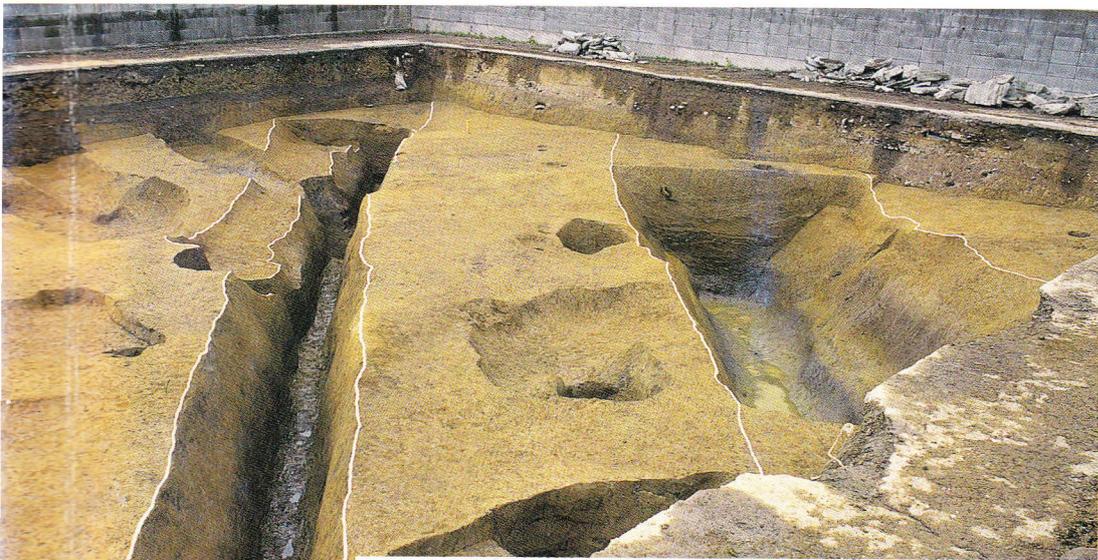


和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報 8

—平成12年度(2000年度)・13年度(2001年度)—



太田・黒田遺跡 第45次調査



史跡和歌山城 第25次調査

2004

和歌山市教育委員会
財団法人 和歌山市文化体育振興事業団

序 文

本書は、当財団が平成12年度（2000年度）及び13年度（2001年度）の2年間にわたって和歌山市内の遺跡発掘調査の概要をまとめたものです。

調査の結果、主な遺構として、太田・黒田遺跡では弥生時代前期の環濠2条や中期の土器棺墓群、西庄遺跡では古墳時代の掘立柱建物や炉堤をもつ製塩炉、旧中筋家住宅（国指定重要文化財）では、近代以降の石組溝や石列などを検出し、遺跡の様相を明らかにすることができました。

以上、当財団の調査による新たな学術調査成果は、郷土の歴史を語る上でなくてはならない重要な視点を与えることになりました。本書が私たちの郷土に関する歴史知識を豊かにすることを願ってやみません。

本書出版に際して、発掘調査にあたって多大の御協力をいただいた地元の皆様及び本書編集にあたり種々の御教示を賜りました先生方に厚く御礼申し上げます。

平成16年（2004年）3月31日

財団法人 和歌山市文化体育振興事業団

理事長 宇治田 克夫

例 言

1. 本書は、平成12年度（2000年度）・13年度（2001年度）に実施した和歌山市内における埋蔵文化財発掘調査事業の概要を掲載するものである。
2. 本書に掲載の調査については、既に報告書を刊行したものもある。未完のものについては報告書が刊行された際に、その報告をもって正式報告とする。
3. 本書の執筆については、執筆分担の文責を文末に記載し、編集は北野隆亮が行った。
4. 埋蔵文化財発掘調査及び本年報作成は、以下の事務局組織で行った。

【事務局組織（埋蔵文化財関係）】

埋蔵文化財発掘調査

【平成12年度（2000年度）】

和歌山市教育委員会

教育長 山口喜一郎
文化財室長 榎本直樹
文化財班長 小原保誠
学芸員 益田雅司

財団法人和歌山市文化体育振興事業団

理事長 喜多誠一
総務室長 藤田光彦
主 事（埋蔵文化財事務担当） 西山佳宏（～平成12年7月）
主 事（　　　　　　　　　　　） 山口美二（平成12年8月～）
学芸員（埋蔵文化財発掘調査担当） 北野隆亮
学芸員（　　　　　　　　　　　） 井馬好英
学芸員（　　　　　　　　　　　） 奥村 薫
学芸員（　　　　　　　　　　　） 高橋方紀
学芸員（　　　　　　　　　　　） 藤藪勝則
学芸員（　　　　　　　　　　　） 川口修実

【平成13年度（2001年度）】

和歌山市教育委員会

教育長 山口喜一郎
文化財室長 榎本直樹
文化財班長 田中郁次
学芸員 益田雅司

財団法人和歌山市文化体育振興事業団

理事長 喜多誠一
総務室長 高野真次郎
総務室班長 久保雅英
主 事（埋蔵文化財事務担当） 山口美二
学芸員（埋蔵文化財発掘調査担当） 北野隆亮
学芸員（　　　　　　　　　　　） 井馬好英
学芸員（　　　　　　　　　　　） 奥村 薫
学芸員（　　　　　　　　　　　） 高橋方紀
学芸員（　　　　　　　　　　　） 藤藪勝則
学芸員（　　　　　　　　　　　） 川口修実

年報作成

【平成 15 年度（2003 年度）】

財団法人和歌山市文化体育振興事業団

理事長	宇治田克夫
事務局長	土岐 朗
総務課長	久保雅英
総務課班長	小栗孝昭
事務主任（埋蔵文化財事務担当）	山口美二
学芸員（埋蔵文化財発掘調査担当）	北野隆亮
学芸員（　　　　　　）	井馬好英
学芸員（　　　　　　）	奥村 薫
学芸員（　　　　　　）	高橋方紀
学芸員（　　　　　　）	藤藪勝則
学芸員（　　　　　　）	川口修実

本文目次

I. はじめに

- 1. 平成12年度（2000年度）の調査 1
- 2. 平成13年度（2001年度）の調査 2

II. 埋蔵文化財の発掘調査概要

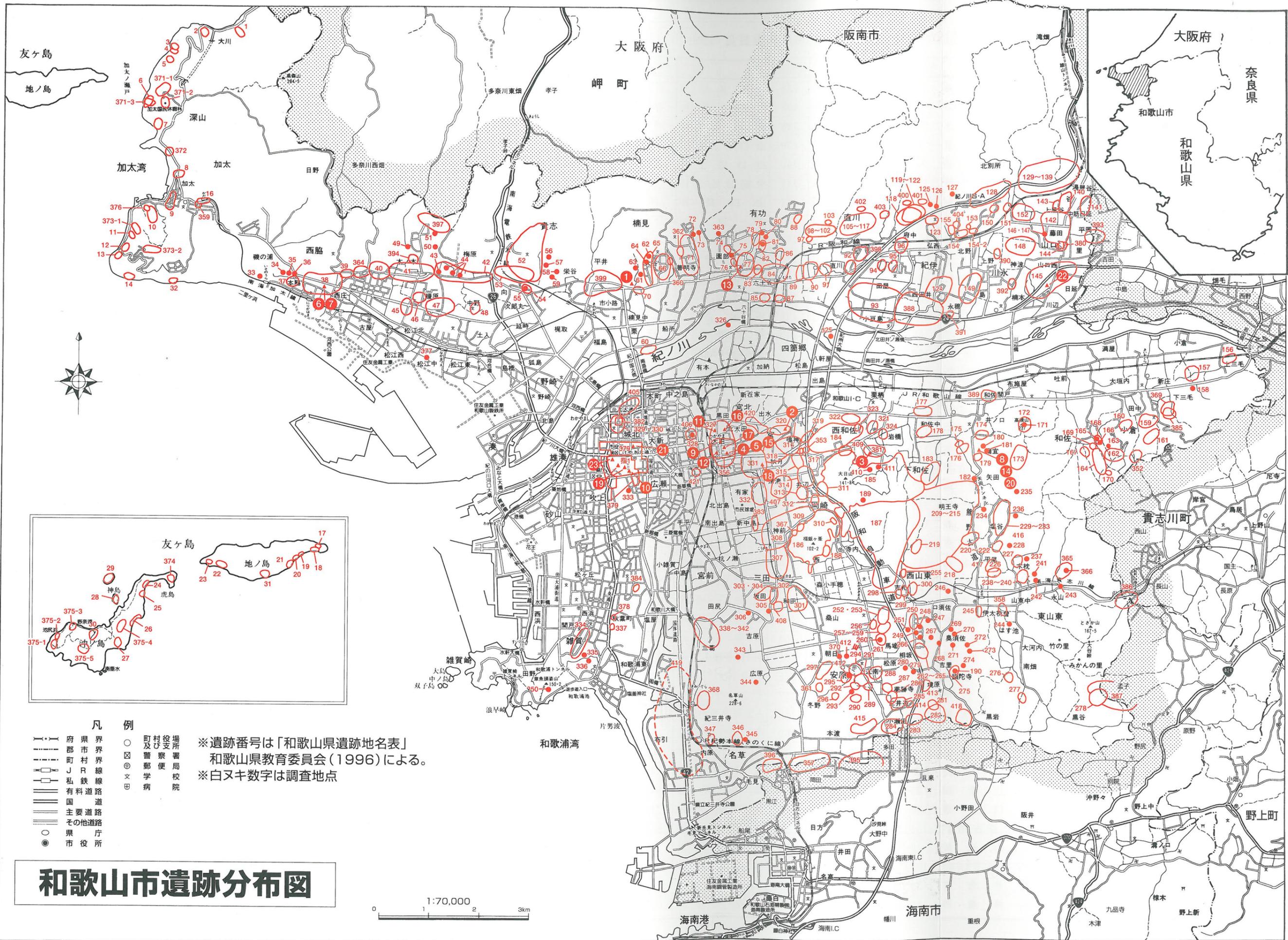
【平成12年度（2000年度）】

- 1. 楠見遺跡発掘調査 4
- 2. 鳴神VI遺跡第5次調査 6
- 3. 岩橋II遺跡発掘調査 8
- 4. 太田・黒田遺跡第45次調査 10
- 5. 太田・黒田遺跡第46次調査 14
- 6. 西庄遺跡第2次調査 18
- 7. 西庄遺跡第3次調査 22
- 8. 旧中筋家住宅発掘調査 30
- 9. 太田・黒田遺跡第47次調査 32
- 10. 史跡和歌山城第23次調査 36

【平成13年度（2001年度）】

- 11. 太田・黒田遺跡第48次調査 38
- 12. 太田・黒田遺跡第49次調査 40
- 13. 有功遺跡第3次調査 42
- 14. 旧中筋家住宅第2次調査 44
- 15. 太田・黒田遺跡第50次調査 46
- 16. 太田・黒田遺跡第51次調査 50
- 17. 太田・黒田遺跡第52次調査 56
- 18. 秋月遺跡第9次調査 60
- 19. 史跡和歌山城第25・26次調査 64
- 20. 旧中筋家住宅第3次調査 68
- 21. 和歌山城跡第8次調査 72
- 22. 川辺遺跡発掘調査 76
- 23. 史跡和歌山城第24次調査 80

- III. 普及啓発活動 82



和歌山市遺跡分布図

- 凡例**
- +— 府界
 - 市界
 - 郡界
 - 町界
 - J 国鉄線
 - 私鉄線
 - 有料道路
 - 国道
 - 主要道路
 - その他道路
 - 県庁
 - 市役所
 - 町役所
 - 支所
 - 警察署
 - 郵便局
 - 学校
 - 病院

※遺跡番号は「和歌山県遺跡地名表」
和歌山県教育委員会(1996)による。
※白又キ数字は調査地点

1:70,000
0 1 2 3km

この地図の作成にあたっては、国土院院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を使用したものである。(承認番号 平15近使、第52号)
無断転載・複製を禁じます。(中和印刷紙器株式会社) 2004.3

和歌山市遺跡地名表(「和歌山県遺跡地名表」和歌山県教育委員会<1996年>より作成。)

遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称
1	報恩講寺遺跡	46	木本小学校Ⅱ遺跡	93	田屋遺跡	136	山口8号墳	179	和佐寺跡	252	千石山5号墳	296	大池遺跡	341	三田3号墳	382	本願寺跡
2	大川四方遺跡	47	榎原遺跡	94	府中Ⅱ遺跡	137	山口9号墳	180	禰宜1号墳	253	千石山古墳群	297	赤津古墳群	342	三田4号墳	383	神前Ⅱ遺跡
3	藻江遺跡	48	中野遺跡	95	府中Ⅲ遺跡	138	山口10号墳	181	禰宜2号墳	254	菖蒲谷遺跡	298	吉礼貝塚	343	吉原古墳	384	高松焼窯跡
4	しょうぶ谷遺跡	49	城山古墳	96	府中遺跡	139	山口11号墳	182	和坂古墳	255	吉礼Ⅲ遺跡	299	西吉礼遺跡	344	広原古墳	385	奥山田古墳群
5	水谷遺跡	50	権現山1号墳	97	北山Ⅰ遺跡	140	山口廃寺跡	183	和佐古墳群	256	千石山遺跡	300	東吉礼遺跡	345	内原古墳	386	大池遺跡
6	男良の谷遺跡	51	権現山2号墳	98	北山1号墳	141	中筋日延遺跡	184	花山古墳群	257	井戸1号墳	301	和田遺跡	346	内原遺跡	387	大旗山城跡
7	深山遺跡	52	高芝遺跡	99	北山2号墳	142	山口遺跡	185	岩橋千塚古墳群	258	井戸2号墳	302	和田岩坪遺跡	347	名草貝塚	388	西田井遺跡
8	大谷川遺跡	53	高芝古墳群	100	北山3号墳	143	谷遺跡	186	井辺前山古墳群	259	井戸3号墳	303-304	和田古墳群	350	高津子山古墳	389	井ノ口遺跡
9	加太遺跡	54	栄谷貝塚	101	北山4号墳	144	里遺跡	187	寺内古墳群	260	馬場古墳	305	竈山神社古墳	352	金谷廃寺跡	390	神波遺跡
10	加太南遺跡	55	貴志古墳	102	北山5号墳	145	川辺遺跡	188	森小手穂遺跡	261	馬場遺跡	306	坂田地蔵山古墳	353	興徳寺跡	391	永穂遺跡
11	平の谷遺跡	56	川原崎遺跡	103	北山Ⅱ遺跡	146	藤田古墳	189	寺内ナイフ形石器出土地	262	東池1号墳	307	神前遺跡	356	太田城跡	392	楠本遺跡
12	田倉崎Ⅰ遺跡	57	川原崎1号墳	104	北山6号墳	147	裕古墳	190	頭陀寺ナイフ形石器出土地	263	東池2号墳	308	井辺遺跡	357	山崎山古墳群	393	吉田遺跡
13	田倉崎Ⅱ遺跡	58	川原崎2号墳	105	直川八幡山1号墳	148	藤田遺跡	209-215	山東古墳群	264	東池3号墳	309	岡崎縄文遺跡	358	山東中遺跡	394	城山遺跡
14	船出遺跡	59	川原崎3号墳	106	直川八幡山2号墳	149	宇田森遺跡	218	若林古墳群	265	東池4号墳	310	森小手穂埴輪窯跡	359	加太Ⅱ遺跡	395	岡村遺跡
16	加太駅北方遺跡	60	国有本遺跡	107	直川八幡山3号墳	150	上野廃寺跡(紀伊薬師寺跡)	219	吉礼砂羅谷窯跡	266	吉里銅鐸出土地	311	大日山Ⅰ遺跡	360	雨が谷遺跡	396	室山古墳群
17	藻崎北浜遺跡	61	大谷古墳	108	直川八幡山4号墳	151	上野遺跡	220	平尾1号墳	267	小山古墳	312	井辺Ⅰ遺跡	361	冬野遺跡	397	木ノ本Ⅳ遺跡
18	藻崎南浜遺跡	62	晒山古墳群	108-2	直川八幡山14号墳	152	上黒谷遺跡	221	平尾2号墳	268	奥須佐窯跡	313	井辺Ⅱ遺跡	362	鳴滝遺跡	398	府中Ⅳ遺跡
19	藻崎西方遺跡	63	慶円寺裏山古墳	109	直川八幡山5号墳	153	北野窯跡	222	平尾3号墳	269	円満寺古墳	314	鳴神Ⅱ遺跡	363	園部円山古墳	399	平井遺跡
20	神前東浜遺跡	64	晒山11号古墳	110	直川八幡山6号墳	154	北野遺跡	226	楠古墳群	270	峯古墳	315	鳴神Ⅲ遺跡	364	西庄Ⅱ遺跡	400	深谷池北遺跡
21	神崎西浜遺跡	65	晒山12号古墳	111	直川八幡山7号墳	154-2	北野Ⅱ遺跡	227	足守神社古墳群	271	西光寺窯跡	316	鳴神Ⅳ遺跡	365	永山遺跡	401	名草池北遺跡
22	屋敷浜遺跡	66	雨が谷古墳群	112	直川八幡山8号墳	155	若宮池遺跡	228	赤山古墳	272	吉里1号窯跡	317	鳴神Ⅴ遺跡	366	永山古墳	402	湯谷池西遺跡
23	おそ越の鼻遺跡	70	楠見遺跡	113	直川八幡山9号墳	156	上三毛遺跡	229	塩谷1号墳	273	吉里2号窯跡	318	音浦遺跡	367	井辺Ⅲ遺跡	403	平野池南遺跡
24	一色谷遺跡	71	鳴滝古墳群	114	直川八幡山10号墳	157	下三毛遺跡	230	塩谷2号墳	274	頭陀寺古墳	319	鳴神Ⅵ遺跡	368	紀三井寺遺跡	404	北野池北遺跡
25	柏の浜遺跡	72	奥出古墳	115	直川八幡山11号墳	158	小山古墳	231	塩谷3号墳	275	頭陀寺遺跡	320	岩橋遺跡	369	奥山田遺跡	405	山吹丁遺跡
26	深蛇池遺跡	73	有功経塚	116	直川八幡山12号墳	159	寺山古墳群	232	塩谷4号墳	276	大將軍窯跡	321	栗栖Ⅰ遺跡	370	朝日石槍出土地	406	友田町遺跡
27	垂水遺跡	74	園部Ⅰ遺跡	117	直川八幡山13号墳	160	東国山古墳群	233	塩谷5号墳	277	有ノ木窯跡	322	栗栖Ⅱ遺跡	371	深山要塞跡	407	津秦Ⅱ遺跡
28	神島遺跡	75	園部古墳	118	八王寺山古墳群	161	宮山古墳群	234	新出古墳	278	宝光寺跡	323	高橋神社遺跡	371-1	深山第1砲台跡	408	和田Ⅱ遺跡
29	沖の島北方海底遺跡	76	園部Ⅱ遺跡	119	橋谷Ⅰ遺跡	162	小倉古墳群	235	明王寺経塚	279	松原1号墳	324	紀ノ川銅鐸出土地	371-2	深山第2砲台跡	409	岩橋Ⅲ遺跡
30	野奈浦遺跡	77	有功遺跡	120	橋谷Ⅱ遺跡	163	小倉9号墳	236	矢田古墳	280	松原2号墳	325	有本銅鐸出土地	371-3	男良砲台跡	410	前山B226号墳
31	ハイブの浦遺跡	78	池田遺跡	121	橋谷Ⅲ遺跡	164	明楽古墳群	237	北池古墳	281	滝ヶ峯古墳群	326	太田・黒田遺跡	372	加太砲台跡	411	前山B227号墳
32	浜遺跡	79	有功古墳	122	橋谷銅鐸出土地	165	小倉神社1号墳	238	殿山1号墳	282	滝ヶ峯遺跡	327	吉田窯跡	373	田倉崎砲台跡	412	城ノ前1号墳
33	磯ノ浦1号墳	80	大同寺墳墓	123	弘西遺跡	166	小倉神社2号墳	239	殿山2号墳	283	薬勝寺南山古墳群	328	鷲ノ森遺跡	374	虎島砲台跡	413	境原遺跡
34	磯ノ浦2号墳	81	大同寺古墳	124	北田井遺跡	167	モント古墳群	240	殿山3号墳	284	仁井辺遺跡	329	鷲ノ森窯跡	375	友ヶ島要塞跡	414	薬勝寺Ⅱ遺跡
35	磯ノ浦3号墳	82	大同寺遺跡	125	別所1号墳	168	小倉神社境内遺跡	241	土井山古墳	285	薬勝寺跡	330	秋月遺跡	375-1	友ヶ島第1砲台跡	415	本渡遺跡
36	磯ノ浦4号墳	83	法然寺遺跡	126	別所2号墳	169	金谷遺跡	242	丸山古墳	286	薬勝寺遺跡	331	津秦遺跡	375-2	友ヶ島第2砲台跡	416	明王寺遺跡
37	磯脇遺跡	84	六十谷遺跡	127	別所3号墳	170	奥池遺跡	243	高岡古墳	287	松原Ⅰ遺跡	332	岡の里古墳	375-3	友ヶ島第3砲台跡	417	平尾遺跡
38	西庄遺跡	85	和田遺跡	128	上野古墳群	171	高積山遺跡	244	桜山古墳	288	松原Ⅱ遺跡	333	関戸遺跡	375-4	友ヶ島第4砲台跡	418	滝ヶ峯Ⅱ遺跡
39	平ノ下遺跡	86	西辻遺跡	129	山口1号墳	172	葉徳寺跡	245	伊太祈曾神社古墳群	289	薬師谷遺跡	334	関戸古墳	375-5	友ヶ島第5砲台跡	419	紀三井寺塩田跡
40	木ノ本Ⅰ遺跡	87	川口遺跡	130	山口2号墳	173	城ヶ峯城跡	246	チシヨ古墳	290	江南遺跡	335	天神山古墳	376	行者堂東遺跡	420	太田城水攻め堤跡
41	木ノ本Ⅱ遺跡	88	六十谷古墳群	131	山口3号墳	174	禰宜Ⅰ遺跡	247	城ヶ森1号墳	291	曾垣田遺跡	336	秋葉山貝塚	377	松江経塚	421	木広町遺跡
42	木ノ本Ⅲ遺跡	89	直川遺跡	132	山口4号墳	175	禰宜Ⅱ遺跡	248	城ヶ森2号墳	292	曾垣田Ⅱ遺跡	337	アンドの鼻古墳	378	和歌山城跡	指1	史跡和歌山城
43	木ノ本経塚	90	直川廃寺跡(明光寺跡)	133	山口5号墳	176	禰宜貝塚	249	城ヶ森3号墳	293	曾垣田古墳	338	三田1号墳	380	山口御殿跡		
44	釜山古墳群	91	高井遺跡	134	山口6号墳	177	河南中学校北方遺跡	250	城ヶ森遺跡	294	城ノ前Ⅱ遺跡	339	三田2号墳	381	岩橋Ⅱ遺跡		
45	木本小学校Ⅰ遺跡	92	鳥井遺跡	135	山口7号墳	178	和佐中遺跡	251	相坂古墳	295	城ノ前Ⅰ遺跡	340					

I. はじめに

1. 平成12年度（2000年度）の調査

和歌山市における平成12年度（2000年度）の本財団の発掘調査受託事業は10件である。

調査に至った原因としては、事務所ビル建設などの民間受託が3件に対して市道拡幅などの公共的な調査が7件を数え、比率的には3年連続で公共的な調査が主体を占めたことになる。公共的な調査では和歌山城の石垣改修などの史跡整備関連調査のほか、国の重要文化財である旧中筋家住宅の解体修理工事に伴う調査が行われた。

これらの調査で、いくつかの重要な成果が得られているので以下にまとめることとする。

弥生時代

弥生時代については、太田・黒田遺跡のほぼ中心部に位置する第45次調査で前期の環濠2条などを検出し、前期段階で環濠集落が形成されていたことが明らかになった。また、隣接する第46次調査では同じく前期の土坑などを検出し、前期段階での遺跡の広がりを知るための資料を得た。さらに、北西部に位置する第47次調査では中期初頭の溝から木製の鋤が出土し、近接地に水田等の生産域の存在を示唆するものといえ、当地での農耕の実態を考える上において貴重な資料を得た。

古墳時代

古墳時代については、先述の太田・黒田遺跡第45次調査で前期初頭頃の銅鏃が出土したほか、第46次調査では前期の堅穴住居などを検出した。また紀ノ川北岸に位置する西庄遺跡では、遺跡南東部の第2次調査で新たな横穴式石室1基を確認した。また、遺跡中央部で行った第3次調査では後期の掘立柱建物や炉堤をもつ製塩炉を検出し、多量の製塩土器が出土した。

奈良・平安時代

太田・黒田遺跡第47次調査で集落北西縁辺部に掘削された奈良時代の溝を検出し、第46次調査

【2000年度調査一覧表】

番号	調査名	原因	調査期間	面積	調査概要	担当者名	備考
1	楠見遺跡	遺跡確認	6月	35㎡	遺跡範囲が北西方向に広がることを確認。	藤藪	
2	鳴神Ⅵ遺跡第5次	市道拡幅	7月～8月	120㎡	江戸時代以前の氾濫源の堆積を確認。	高橋川口	
3	岩橋Ⅱ遺跡	遺跡確認	8月	36㎡	南北方向に延びる石列2条を確認。	藤藪	
4	太田・黒田遺跡第45次	事務所ビル建設	10月～1月	300㎡	弥生時代前期の環濠を2条検出。弥生時代中期の絵画土器出土。古墳時代初頭の銅鏃出土。	井馬川口	
5	太田・黒田遺跡第46次	遺跡確認	11月～12月	90㎡	弥生時代前期の土坑、古墳時代の堅穴住居などを検出。平安時代の須恵器円面硯出土。	井馬	
6	西庄遺跡第2次	遺跡確認	11月	35㎡	遺跡南東部の古墳群を構成する新たな古墳1基を確認。	藤藪	
7	西庄遺跡第3次	共同住宅建設	12月	48㎡	古墳時代後期の掘立柱建物1棟や炉堤をもつ製塩炉を検出。	藤藪	
8	旧中筋家住宅	解体修理	12月	40㎡	近代以降の人力車庫の変遷を確認。	高橋	
9	太田・黒田遺跡第47次	集合住宅建設	12月～2月	190㎡	弥生時代中期初頭の溝から木製鋤出土。	井馬 藤藪	
10	史跡和歌山城第23次	石垣改修	2月～3月	80㎡	和歌山城南東部堀の石垣構築状況を確認。	北野 高橋	

では平安時代前期の須恵器円面硯が出土した。また、西庄遺跡第3次調査で奈良時代から平安時代にかけての土坑や溝を検出した。

鎌倉・室町時代

鎌倉時代については、太田・黒田遺跡第45次調査で井戸2基など、第46次調査で溝2条などを検出した。溝は室町時代にかけて踏襲されており、土地区画の方向性や太田城跡との関わりを考える上で貴重な成果を得た。また、太田・黒田遺跡第45次調査において、室町時代後期の土葬墓から保存状態の良い成人男性の人骨が出土し、太田城跡との関わりを考える上で貴重な資料提供となった。

江戸時代

江戸時代については、史跡和歌山城東堀の南東側に位置する石垣の基底部の構築状況や石垣改修の時期等について確認した。

近代

近代については、旧中筋家住宅において近代以降の人力車庫の変遷を確認した。

2. 平成13年度（2001年度）の調査

和歌山市における平成13年度（2001年度）の本財団の発掘調査受託事業は12件である。

調査に至った原因としては、集合住宅建設などの民間受託が5件に対して市道拡幅などの公共的な調査が7件を数える。前年同様公共的な調査が多いが、民間受託件数も増加傾向にある。民間受託のうち太田・黒田遺跡での調査が4件を数え、JR和歌山駅東側の開発が顕在化したといえよう。公共的な調査では前年に引き続き和歌山城の石垣改修などの史跡整備関連の調査や旧中筋家住宅の解体修理工事に伴う調査が行われた。また、和歌山市教育委員会の直接調査として、和歌山城の配管設置に伴う調査が1件行われた。

以上の調査で、いくつかの重要な成果が得られているので以下にまとめることとする。

縄文時代

縄文時代については、紀ノ川北岸の川辺遺跡で後期から晩期の遺物包含層を検出したことから、下面に遺構面が存在する可能性を明らかにした。

弥生時代

弥生時代については、太田・黒田遺跡第50次調査で前期の土坑やピット、第52次調査で中期初頭の井戸や中期の竪穴住居2棟などを検出した。また遺跡北西部に位置する第48次調査では中期の土器棺墓7基と溝などを検出し、遺構の重複関係から中期に当地が墓域から水田へと土地利用が変遷することを明らかにした。このほか、中期の溝底から管状土錘91点が一括出土した。また、第51次調査では前期の環濠とみられる溝の一部を検出し、当該期のムラの規模を知るための資料を得た。

紀ノ川北岸においては、先述の川辺遺跡で中期の松菊里型住居2棟などを検出し、石器製作に関わる遺物も出土している。

古墳時代

古墳時代については、太田・黒田遺跡第50次調査で前期の竪穴住居などの遺構を検出したことから、集落の中心部の一角であったと考えられる。また秋月遺跡第9次調査で庄内式併行期の大型竪穴住居や後期の祭祀遺構とみられる土坑などを検出した。

奈良・平安時代

秋月遺跡において奈良時代の溝や土坑、平安時代後期の井戸などを検出したほか、「神宮寺」に関係するとみられる瓦が多量に出土した。

鎌倉・室町時代

鎌倉時代については、秋月遺跡において土師器皿類や瓦器椀が多量に出土した大溝や石組井戸を3基検出した。同遺跡では、室町時代の溝や土坑などを検出し、集落が継続して営まれていたことを確認した。また太田・黒田遺跡第52次調査において、鎌倉時代の溝、土坑、井戸などを検出し、土師器皿・瓦器椀などの遺物が大量に出土した。

江戸時代

江戸時代の調査は、史跡和歌山城第25・26次調査で二の丸と西の丸の間に架けられていた「御橋廊下」の二の丸側取り付き部分の調査を行い、御橋廊下の礎石や多聞櫓の礎石を3時期分検出し、それぞれの構造の変遷を明らかにすることができた。和歌山市教育委員会が行った第24次調査では、御勘定門に関連する礎石などを検出している。

和歌山城跡第8次調査では、紀州藩家老水野家屋敷跡を調査し、基礎石組、礎石、土坑、ピットなど屋敷地に関わる遺構を3時期検出し、江戸時代初頭からの屋敷地の構造を知る上で貴重な成果を得た。

近代

近代については、旧中筋家住宅において第2次調査で主屋土間の調査を行い、竈は2回以上作り替えを行っていることを確認した。第3次調査は長屋蔵とその周辺を調査し、近代の石組溝、石列などを検出し、3時期の変遷を確認した。

【2001年度調査一覧表】

番号	調査名	原因	調査期間	面積	調査概要	担当者名	備考
11	太田・黒田遺跡第48次	集合住宅建設	5月～8月	300㎡	弥生時代中期の土器棺墓7基を検出、管状土鍾91点が溝から一括出土。	高橋	
12	太田・黒田遺跡第49次	〃	5月～6月	100㎡	古墳時代の土坑・溝・ピット、江戸時代の粘土採掘坑を検出。	奥村	
13	有功遺跡第3次	小学校施設建設	5月～7月	240㎡	遺跡の西端部の状況を確認した。	藤藪	
14	旧中筋家住宅第2次	解体修理	5月	50㎡	主屋土間部分を調査。近代の竈を検出、2回以上の作り替えを確認。	川口	
15	太田・黒田遺跡第50次	個人住宅建築	6月～7月	48㎡	弥生時代前期の土坑、古墳時代の竪穴住居などを確認。	井馬	
16	太田・黒田遺跡第51次	集合住宅建設	7月	60㎡	弥生時代前期の環濠、古墳時代の竪穴住居などを検出。	川口	
17	太田・黒田遺跡第52次	集合住宅建設	8月～11月	120㎡	弥生時代中期初頭の井戸や中期の竪穴住居を検出。	藤藪	
18	秋月遺跡第9次	中学校校舎建設	9月～3月	800㎡	古墳時代前期の大型竪穴住居、後期の祭祀土坑、鎌倉時代の大溝などを検出。	井馬	
19	史跡和歌山城第25・26次	石垣改修	9月～3月	470㎡	二の丸西側櫓台で3時期の多聞櫓、御橋廊下関連の礎石などを検出。石垣に組み込まれた石室(いしむろ)を確認。	高橋	
20	旧中筋家住宅第3次	解体修理	10月～11月	255㎡	近代の石組溝、石列などを検出。	川口	
21	和歌山城跡第8次	店舗増築	12月	70㎡	江戸時代の遺構面を3面検出。基礎石組、石列、石組溝、礎石などを検出。	北野	
22	川辺遺跡	遺跡確認	12月～2月	192㎡	弥生時代中期の松菊里型住居2棟、近世初頭の水田区画19単位以上を確認。	川口	
23	史跡和歌山城第24次	配管設置	7月	10㎡	御勘定門礎石、石敷、石組溝を検出。	益田	市教委調査

Ⅱ. 埋蔵文化財の発掘調査概要 【平成12年度（2000年度）】

1. 楠見遺跡^{くすみ} 発掘調査

調査地 和歌山市大谷 285 番地

調査面積 35 m²

位置と環境

楠見遺跡は和歌山市の北部、紀ノ川河口から約5kmあまり遡った北岸に位置し、背見山山塊から南流する小河川によって形成された扇状地の中央末端部に立地する。

本遺跡は楠見小学校を中心として南北約200m、東西約250mに広がる遺跡であり、周辺には縄文時代の遺跡として府中Ⅲ遺跡や直川遺跡、六十谷遺跡、また弥生時代の遺跡では平井遺跡、六十谷遺跡などがみられる。古墳時代中期以降、楠見遺跡の周辺では渡来系の遺物を出土する遺跡が数多く確認されている。しかしながら、古墳時代の集落跡の確認された例は少なく、その様相もあまり知られていないのが現状である。そのなかで鳴滝遺跡は、大型の倉庫とみられる掘立柱建物や陶質土器が検出されたことから、紀ノ川を利用した水運の物資集積地としての性格が考えられている。また楠見遺跡の北約100mには、全長約70mの前方後円墳である大谷古墳が築造されている。大谷古墳からは、朝鮮半島製の馬冑・馬甲が出土しており、供伴した馬具・装飾品とともに渡来系文化を示す貴重な資料である。



調査位置図

調査内容

調査地は、両側を丘陵に挟まれた谷部の扇状地端に位置するため、谷筋に平行する東西5m、南北7mの調査区を設定した。調査地の基本層序については、調査地の全面に旧耕作土とその床土である第1・2層が堆積している。また江戸時代の水田耕土と考えられる第3層は、黄灰色の細砂混粘土の堆積が主体となるもので、鉄分の沈着面及び土質の変化から4単位に分けられる。第4層は、厚さ5～20cmを測る黒褐色の細砂混粘土で、古墳時代の土師器・初期須恵器を多数含む調査区の南半部だけに堆積している。第5層は、浅黄色のシルトであり、調査区全体にみられる。

遺構は第4・5層上面において検出した。第5層上面では、古墳時代中期前半の土坑1基及びピット3基を検出し、第4層上面では、古墳時代中期中頃の土坑1基や江戸時代の溝2条を検出した。このうち、土坑2からは器台脚部(4)、土坑1からは杯身(1)、直口壺(2)、甕(3)などの初期須恵器が出土した。

まとめ

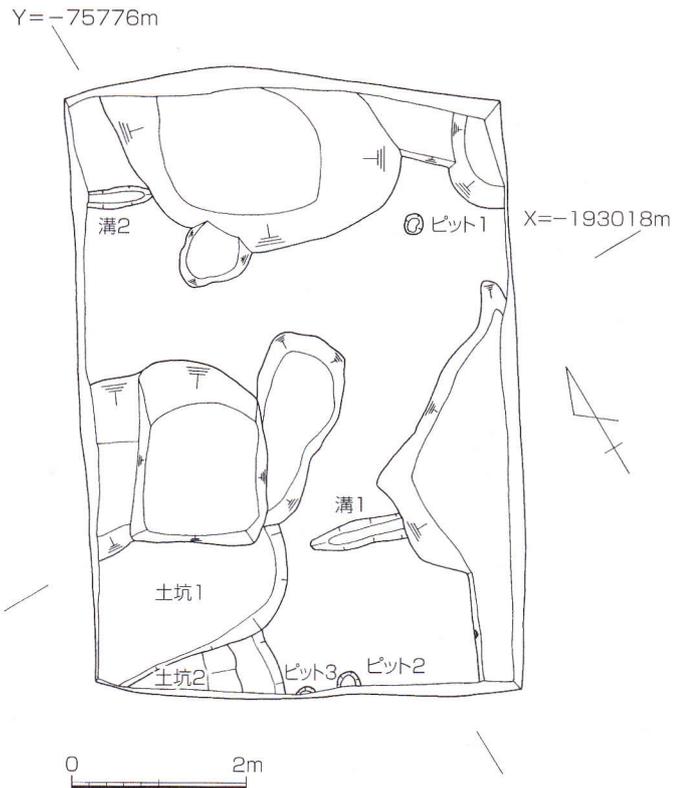
今回の調査地点は、楠見遺跡の西側範囲外の近接地にあたるが、調査では主に古墳時代の遺構を検出した。また、今回の調査で検出した古墳時代中期前半の初期須恵器や土師器、陶質土器を含む黒褐色土(第4層)は、過去の調査においても確認されており、遺跡の広がりには現在の遺跡範囲よりもさらに北西に広がり、大谷地区の集落が立地する扇状地の先端部にまで及ぶ可能性が考えられる。

(藤藪勝則)

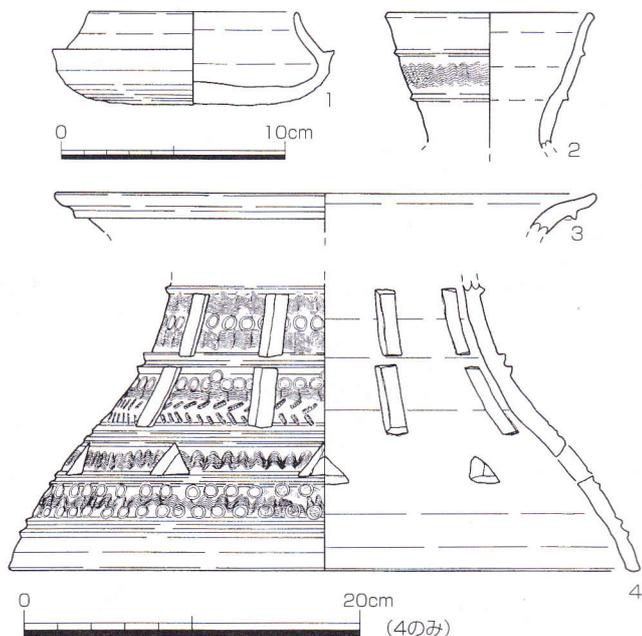
【参考文献】

『和歌山市内遺跡発掘調査概報』

—平成12年度— 和歌山市教育委員会 2002年



遺構全体平面図



遺物実測図

2. なるかみ 鳴神VI遺跡 第5次調査

調査地 和歌山市鳴神 916 - 12 番地他

調査面積 120 m²

位置と環境

鳴神VI遺跡は和歌山平野の中央部、紀ノ川南岸の沖積平野に位置し、紀ノ川の分流である旧大門川の氾濫原及びその流域内に立地する。遺跡の推定範囲は東西約300m、南北約150mを測り、今回の調査対象地は遺跡の南東部に位置する。本遺跡ではこれまでに4次に至る調査が行われており、各調査で河道の堆積とみられる砂礫層が確認されるとともに、弥生時代から江戸時代に至る各時代の遺物が出土している。また、南東の鳴神IV遺跡では古墳時代中期から後期の住居群や後期の方墳が検出されており、調査地南側には古墳時代の集落が存在していたことが明らかになっている。

調査内容

今回の調査は排土処理や近接地への進入路確保の都合上、調査は2回に分けて行い、東側2/3の範囲を第1区、残りの西側を第2区とした。掘削部分の合計面積は、約120m²を測る。

調査地の基本層序は第1層が近現代の整地層及び盛土、第2・3層が近代の整地層、第4層が第1区西端から第2区東端のみに堆積する部分的な整地土、第5・6層が江戸時代の遺物包含層である。第7層以下、第12層までは旧河道内の堆積層であり、第7層以下は弥生時代から鎌倉時代の遺物を含んでいるが、第7層は鎌倉時代まで、第8層は平安時代までの遺物を含むことから、旧河道の最終堆積の年代は鎌倉時代頃に求められる。遺構は3面の遺構面と、氾濫原の堆積を確認した。

第1遺構面は、第5層上面において検出した江戸時代後期から近代にかけての遺構面であり、土坑6基、ピット7基を確認した。土坑には直径1.2m、深さ1.0mを測る規模の大きなものがあり、



調査位置図

坑内に粘土を貼り付けた構造のものが見られた。

第2遺構面は、第6層及び第7層上面において検出した江戸時代後期の遺構面である。遺構は耕作に関連する南北方向の溝10条、東西方向の溝3条、柱穴5基を検出した。

第3遺構面は第7層上面において検出したもので、土坑1基（土坑8）を確認した。土坑8は第2区の南西隅で検出したもので、出土遺物から時期を比定することは困難であるが、旧河道の堆積後の遺構であることから、旧河道の埋没する鎌倉時代から江戸時代後期の範疇であると考えられる。

出土遺物は弥生時代から近代に至る時期のものがあり、旧河道の堆積層である第7層以下から出土したものは磨滅しており、他の集落から河道へ流入したものと考えられる。

まとめ

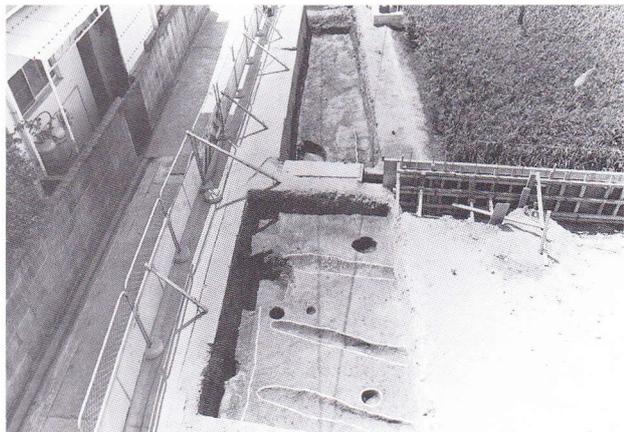
鳴神VI遺跡は既往の調査において、旧河道の堆積と考えられる砂礫層が全ての調査において検出されており、鳴神VI遺跡全体が旧河道の氾濫原にあたるということが明らかになってきている。今回の調査は鳴神VI遺跡でも南側縁辺部に位置するが、3面の遺構面と共に氾濫原の堆積を検出し、本調査地点も氾濫原の範囲に含まれることが明らかになった。また堆積の方向性を知るために各調査区でサブトレンチを設定して掘削・断面観察を行ったが、河道南岸部の立ち上がりなどは確認できず、氾濫原の範囲は本調査地よりもさらに南方に広がるものと考えられる。旧河道の最終堆積は出土遺物から鎌倉時代頃と考えられ、当該期までの河道南岸部は当地のさらに南側に位置していたものとみられる。江戸時代の河道は既往の調査成果からみて、遺跡北東部から南西方向にあるとみられる。また第1・3次調査及び今回の調査で検出された小溝群からみて、河道南岸部では耕作地が展開していたと考えられる。今後は周辺集落の様相を明らかにするためにも、氾濫原の範囲を確認していく必要がある。（川口修実）

【参考文献】

『鳴神VI遺跡第5次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団 2001年



第1遺構面全景（南から）



第2遺構面全景（東から）



土層堆積状況（東から）

3. 岩橋Ⅱ遺跡 発掘調査

調査地 和歌山市岩橋 1380-7番地

調査面積 36 m²

位置と環境

岩橋Ⅱ遺跡は、和歌山市の東部、龍門山系より西に派生する岩橋丘陵の北裾部に位置し、北西に花山丘陵を望む北東に開けた微高地上に立地する。

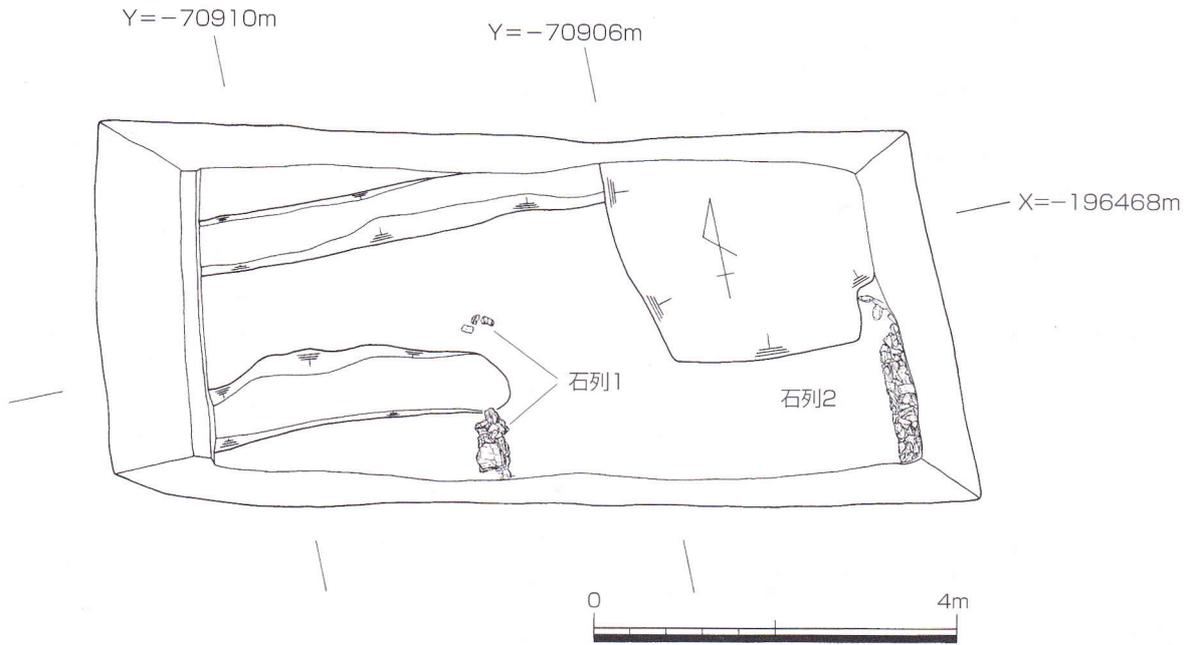
本遺跡は東西500m、南北300mの範囲に広がり、今回の調査地は遺跡範囲の南端に位置する。岩橋Ⅱ遺跡の近隣には、北西約1kmの花山丘陵に4世紀後半～6世紀にかけての前方後円墳を中心とした花山古墳群が、また南にせまる岩橋丘陵には、天王塚、將軍塚、知事塚、郡長塚などの前方後円墳を中心として方・円墳が多数分布する岩橋千塚古墳群が立地する。岩橋千塚古墳群は、結晶片岩を用いた「岩橋型石室」を採用する特徴のある古墳群であり、築造時期については5世紀中頃～7世紀にかけての長期にわたり造墓活動がみられるものである。また岩橋Ⅱ遺跡の西約1kmには、平成8年に当財団が調査を行った岩橋Ⅲ遺跡がある。この遺跡は、岩橋丘陵と花山丘陵の鞍部に立地するもので、平安時代の柱穴、土坑、溝、奈良時代から江戸時代の遺物などが検出されている。

調査内容

調査区は、東西9m、南北4mを測る。調査地の基本層序は、まず現代の耕作土を第1層とした。



調査位置図



遺構全体平面図

第2層は、肥前系陶器・磁器などを含み江戸時代の水田耕土とみられる灰色粘土で、第3層は、瓦器・中国製青磁などを含み室町時代の水田耕土と考えられる暗灰色粘土である。第3層以下は、緑灰色の粘土（第4層）が堆積している。

遺構については、第3層上面において石列2条を検出した。石列1・2の主軸はともに磁北から2～5°東に傾き、その構造は扁平な石を2～3段ほど積み上げるもので、使用されている石材は長さ10～20



石列2（北西から）

cm、幅約10cm、厚さ3～5cmの結晶片岩である。これら石列1・2の間隔は、それぞれの中軸線で計測した結果4.3mを測るものである。

まとめ

今回の調査で確認した石列2条は、土層堆積状況や遺物から室町時代後期以降のものとみられ、その性格については、溝状遺構に拳大の結晶片岩を充填した暗渠排水施設である可能性が高い。また本遺跡の北を西流する宮井用水の方向性との比較から、条里制土地区画との関連性は薄く、室町時代後期以降の水田開発に伴う土地区画の方向性を示す遺構と考えられる。（藤藪勝則）

【参考文献】

『和歌山市内遺跡発掘調査概報』—平成12年度— 和歌山市教育委員会 2002年

4. 太田・黒田遺跡 第45次調査

調査地 和歌山市太田515-1番地

調査面積 300 m²

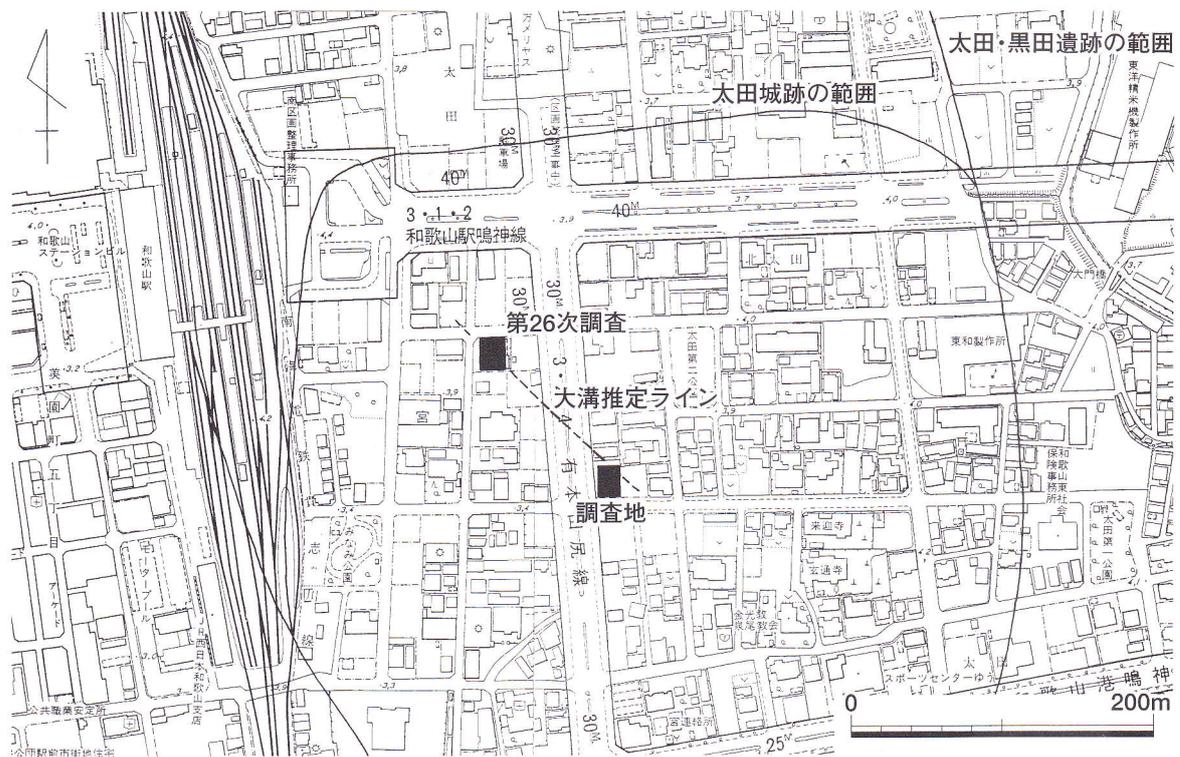
位置と環境

太田・黒田遺跡は、和歌山平野の中央部、紀ノ川南岸の微高地上に立地する遺跡である。本遺跡ではこれまでに44次にわたる発掘調査が行われ、弥生時代前期から中期にかけての県内最大規模をほこる集落跡であることが明らかとなっている。遺跡内には室町時代に羽柴秀吉によって水攻めされた太田城跡の推定地が重複し、複合遺跡としても周知されている。

調査対象地は太田・黒田遺跡のほぼ中央部に位置し、さらに太田城跡推定範囲の中央部にあたる。本調査地の北西150mの地点にあたる第26次調査では、幅2.3m、検出面からの深さ1.2mを測る弥生時代前期の大溝が検出されており、今回の調査対象地がその延長部の推定地にあたることから、この大溝を含めた弥生時代前期遺構の検出が予想された。また、太田城跡推定範囲の中央部に位置することからも、太田城に関する遺構の検出が重点課題に挙げられた。

調査内容

調査は、工事計画範囲内の建物基礎部分にあたる地点において、南北20m、東西15mの調査区を設定した。調査地の基本層序は、現況面のアスファルト及び近現代の盛土下に調査区北端では石垣に伴う整地土が3単位確認でき、南側は旧耕作土（第1層）、江戸時代の水田耕作土（第2層）が堆積する。その下層には室町時代以降の遺物包含層（第3層）、弥生時代中期初頭の遺物包含層（第4層）、弥生時代前期後半の遺物包含層（第5層）がそれぞれ堆積する。第6層以下は標高約



調査位置図

0.5 mまではシルト層を5単位(第6～10層)確認し、第10層より下層では灰色系の粘土層(第11・12層)、標高約-1.6 mで灰色系の砂層になることを確認した(第13層)。第6層以下は、無遺物層の可能性はある。

本調査では遺構面を4面確認し、弥生時代から江戸時代にかけての遺構を検出した。

第1遺構面は第2層上面において、江戸時代末期以降に構築された石垣、土坑2基を検出した。石垣は第2層である水田耕作土に対応する遺構と考えられ、宅地と水田を区画する性格をもつものと考えられる。

第2遺構面は第3層上面において検出したものであり、江戸時代後期の溝状遺構2基を検出した。

第3遺構面は第2・3層掘削後、第4層上面において検出したもので、弥生時代中期から室町時代にかけての遺構を検出した。

弥生時代の遺構は、中期の溝3条、土坑2基、井戸1基などを検出した。溝5は検出長20.0 m、幅2.7～3.2 mを測り、調査区北西部から蛇行しながら南東方向に延び、調査区南側で途切れるもので、覆土内から弥生時代中期中葉から後葉の遺物が多量に出土した。

古墳時代の遺構は前期の土坑2基、中期の土坑1基、後期の土坑2基、末期から飛鳥時代の溝1条などを検出した。前期の土坑はともに庄内式併行期の井戸とみられるものであり、完形の土器をはじめとする一括資料が出土した。

鎌倉時代の遺構は、土坑8基や柱穴などを検出した。土坑の中には遺構の形状から井戸とみられる遺構があり、そこからは完形の瓦器椀と土師器皿が1点ずつ出土しており、これは井戸廃棄時の祭祀行為であると考えられる。

室町時代の遺構は、後期の石組井戸2基、土坑2基、後期後半の土葬墓(土坑36)などを検出した。土坑36は東西、南北ともに1.3 mの規模を測り、人骨が良好な形で遺存していた。棺材等の痕跡は確認できなかったが、南東部で砂岩・結晶片岩と共に平瓦・備前焼の甕の口縁部が重なっ



第3遺構面全景(東から)



溝5(南東から)



土坑36(南西から)

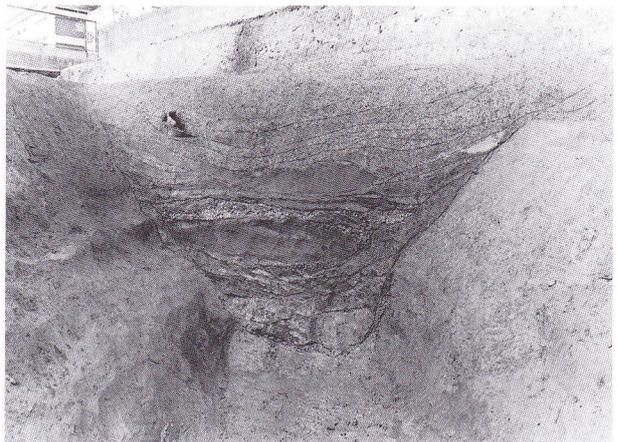
て出土した。人骨は上部の削平により右肋骨以下のみが遺存していたが、頭部を東に上肢・下肢を屈曲させた仰臥屈葬の状態に埋葬されていた。また人骨は、鑑定の結果、40才以上の成人男性であることが明らかとなった。

第4遺構面は第5層上面において検出したもので、弥生時代前期の環濠（溝11・12）や溝、柱穴を検出した。溝11は調査区の北壁中央から南東方向へ延びる内環濠であり、検出長13.8m、幅3.6～3.9m、底面の幅0.6m、深さ1.9～2.0mを測り、溝の断面形は逆台形を呈する。溝底面の標高は北側で0.9m、南側で0.7mを測ることから、流路方向は北西から南東方向であると考えられる。また南側では約2.6mの範囲において、約50cm等間で打ち込まれ、矢板のような護岸施設の可能性がある6本の杭列を検出した。杭は西壁際の底面のみに確認でき、溝の勾配に沿ってやや内傾させて打ち込まれている。さらに北側においても南側の杭列から2.6mの間隔を空け、南側と同じく約50cm等間で打ち込まれた5本の杭列を検出した。溝12は調査区の北西隅から南東方向へ延びる外環濠であり、溝11と幅3.0～3.6mの間隔をもって掘削されている。遺構の規模は検出長20.7m、幅1.2～1.4m、底面の幅0.2m、深さ1.2～1.4mを測り、溝の断面形は「V」字状を呈する。溝底面の標高は北側で1.4m、南側で1.3mを測ることから、流路方向は溝11と同じく北西から南東方向であると考えられる。

この2条の環濠は、最下層に自然堆積による粘土層が堆積する他は、幾層にも粗砂と礫層が堆積しており、再掘削と幾度かの洪水を繰り返しながら埋没したと考えられる。堆積土層は、最下層に灰色系の粘土層、その上層約1.2mはシルト混粗砂層、最上層は溝11がシルト混粗砂層、溝12が粗砂層によって最終埋没する。環濠からの出土遺物は弥生土器が少量、溝11の最下層から木杭や膝柄横斧の斧台、不明部材などの木製品、自然木・種子などの自然遺物が一定量出土した。出土し



第4遺構面全景（東から）



溝11土層堆積状況（南東から）



溝11杭列断割状況（北西から）

た遺物の年代から、弥生時代前期後半には機能し、弥生時代中期初頭には最終的に埋没したものと考えられる。

今回の調査で出土した遺物は、弥生時代前期から江戸時代にいたる時期のものが多量に出土したが、その大半は弥生時代の遺物である。また、特筆すべき遺物として、鹿が描かれた弥生時代の絵画土器1点や古墳時代前期初頭の所産と考えられる銅鏃が1点出土した。絵画土器は江戸時代後期の溝状遺構の混入遺物として取り上げたものであり、段状口縁壺の口縁外端面に鹿2頭が描かれている。太田・黒田遺跡における絵画土器の出土は、採集資料と第12次調査出土のものについて3例目であり、構図が判別できるものは全て鹿である。また、銅鏃については太田・黒田遺跡においては初例のものである。

まとめ

今回の調査では4面の遺構面の調査を行い、それぞれの検出面において良好な遺構を検出した。各遺構面の時期は、第4遺構面が弥生時代前期後半に、第3遺構面が弥生時代中期前半から室町時代後期まで、第2遺構面が江戸時代後期に、第1遺構面が江戸時代末期にそれぞれ比定できる。

今回の調査における最大の成果は、第4遺構面において検出した弥生時代前期環濠の検出である。北西約150mの地点に位置する第26次調査で検出された前期の大溝が、今回検出した環濠（溝11）の延長部に当たるものとみられ、その距離は約150m以上続くことが明らかとなった。このことから、当遺跡が弥生時代前期段階において環濠集落であったことを初めて明らかにすることができた。今回検出した2条の環濠は、出土遺物や堆積による埋没状況などが類似することから併存していたことが明らかであり、出土した土器からみて機能していた時期は弥生時代前期末に、最終埋没の時期は中期初頭にそれぞれ比定できるものである。

また室町時代の遺構として、井戸2基や土坑2基、土葬墓1基を検出した。これらの遺構は、時期の判別できるものは全て室町時代後期後半のものであり、太田城が存在した時期と符号するものである。太田城に関連する遺構としては、本調査地の北約200mの地点にあたる第1～9次調査、第19次調査において幅10m、深さ3mの規模をもつ濠状の溝や、北西90mの地点にある第12次調査において溝や池状の落ち込みが確認されている。今回検出された井戸や土葬墓などの遺構は、未検出のものであり、このような遺構とどのような関わりをもつものか、今後明らかにしていくことが課題の一つである。

以上、今回の調査では弥生時代前期から江戸時代にわたる多数の遺構・遺物を検出し、太田・黒田遺跡中央部の様相を検討する良好な資料が得られた。また、太田・黒田遺跡における環濠の検出は、ようやく2地点において確認された状況であり、前期集落の範囲を含め、その実態解明については今後の課題であろう。また、前期段階で環濠集落が形成されていることから、中期以降にも環濠の掘削を行っていた可能性が考えられ、これについても今後の調査によって明らかにしていく必要がある。（川口修実）

【参考文献】

- 『太田・黒田遺跡第26次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団 1995年
『太田・黒田遺跡第45次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団 2001年

5. 太田・黒田遺跡 第46次調査

調査地 和歌山市太田514-2番地

調査面積 90 m²

位置と環境

今回の調査地は、太田・黒田遺跡中央部のやや南側、太田城跡のほぼ中央部に位置し、弥生時代前期の2条の環濠を検出した第45次調査地の北東側隣接地にあたる。第45次調査で検出した環濠は、1995年に調査を行った第26次調査において検出した大溝の延長部であることが判明し、この弥生時代前期環濠が前期集落の西側を取りまくものと考えられた。このことから、当調査地は前期環濠集落の内側に位置し、弥生時代前期の遺構・遺物が検出されるものと推定された。また室町時代には、当遺跡の南半部を中心として羽柴秀吉の紀州攻めの際、水攻めを受けたとされる太田城の推定地が重複する。今回の調査地は、この太田城の範囲のほぼ中央部に位置する。

なお、本年報において掲載している第50次調査及び第52次調査について、調査地の状況が類似することから、調査位置を下図に示した。

調査内容

調査区は、深掘される建物の基礎部分にあたる地点に設定し、北東側に位置するものから第1区と定め、3地区に分けて調査を行った。第1区は、南北幅2m、東西長18mを測る調査区であり、中間部の約4m間は既存建物の基礎が残存していたため調査区から除いた。第2区は東西幅2m、南北長6.5mの調査区であり、第1区と第3区の東端を縦断する。また第3区は、南北幅2.5m、東西長18mの調査区である。

調査地の現況が宅地であるため、表土は厚さ50～60cmを測る近代以降の整地土である。この整地土の状況も含めて、調査区ほぼ中央部をN-14°-Eの方向性で貫く旧土地区画による堆積が影響を及ぼし、この区画ラインを境に西側は削平を受けていたが、東側には鎌倉時代以降の良好な堆積が依存していた。旧土地区画ライン東側では、

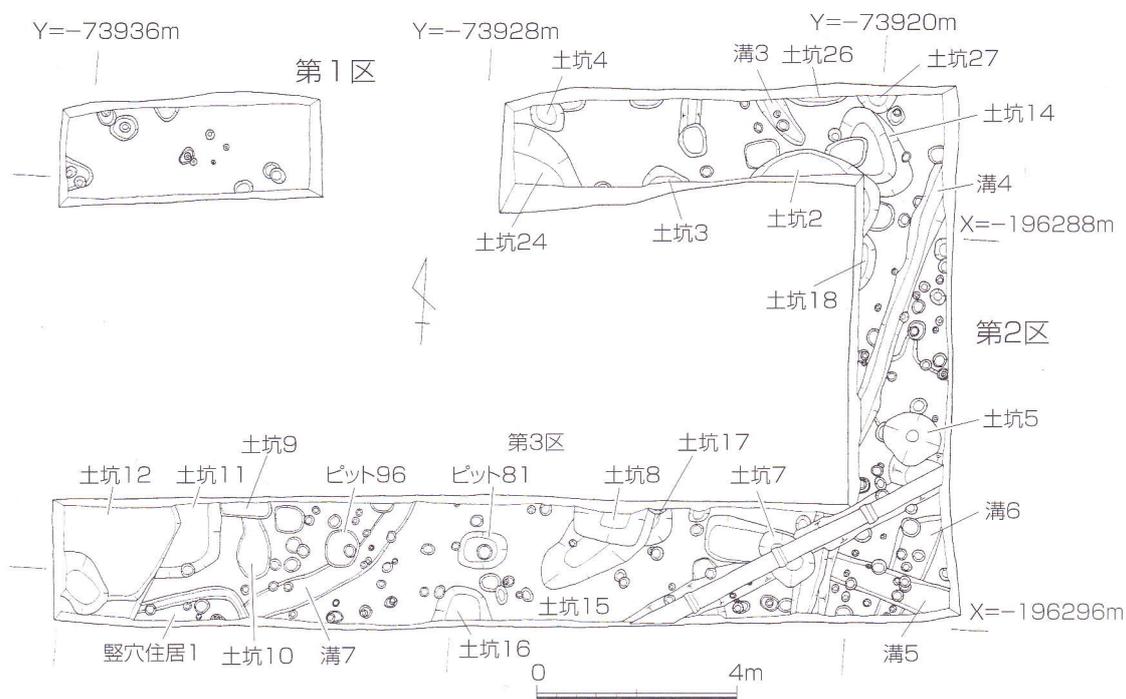


調査位置図

整地土下の第1a層（約20cm）が江戸時代頃の堆積とみられる。第1a層の下には黒褐色系の第3層（5～20cm）があり、鎌倉時代の遺物を含む。この第3層の上面が第1遺構面である。第4層は黄褐色系のシルト層であり、5～10cm程度の厚みで3単位（第4a～4c層）に細分できる。第4層下の状況は、西側に厚く堆積する第5層（10cm程度）とその下層に褐色系のシルトである第6層（約45cm）が堆積する。このなかで最も多くの遺構を検出したのは、第4a層の上面であり、弥生時代中期中頃から鎌倉時代にかけての遺構がある。また第4b層の上面では弥生時代中期古段階の竪穴住居や土坑などを、さらに第6層上面では弥生時代前期新段階の土坑などを検出した。

まず第1遺構面（標高約3.3m）の状況は、室町時代の溝1条及び土坑1基、江戸時代の溝1条を検出した。

第2遺構面は、調査区全面の第4a層上面（標高3.0m前後）において検出したもので、弥生時代中期の溝3条（溝3・6・7）、土坑10基（土坑3・4・10・14～18・26・27）やピット15基、古墳時代前期の竪穴住居1棟（竪穴住居1）、土坑5基（土坑2・5・7～9）やピット16基、鎌倉時代の溝2条（溝4・5）やピット数基などを検出した。なお、第3区西端で検出した土坑11・12については、出土遺物からみて室町時代に比定できるものであり、本来第1遺構面に対応する遺構と判断した。このほか、弥生・古墳・平安・鎌倉各時代のものともみられるピット多数を検出した。弥生時代では、ピット96や土坑15がある。ピット96は第3区の西半部で検出した遺構で、東西70cm、南北80cmのほぼ円形を呈し、深さ10cmを測る。この遺構の底面には横位の弥生土器壺や石斧が出土し、壺の出土状況などからみて土器棺の可能性もある。また土坑15は、第3区のほぼ中央部において検出した遺構である。この遺構は、古墳時代前期の井戸（土坑8）に北半部が切られている。規模は長径2.4m以上、短径1.4mを測る長楕円形のもので、最深部は検出面から2.1mの深さをもつ。この状況から木柵等は検出できなかったが、井戸の可能性が高いものとみられる。遺物は凹線文を主体とする紀伊第IV様式の土器が出土した。古墳時代の竪穴住居1は第3



第2遺構面 遺構全体平面図

区西端で検出したものである。この竪穴住居の全形は明らかでないが、検出した壁溝の状況から隅円方形の平面プランをもつものとみられ、東西 2.4 m 以上、南北 0.7 m 以上を測る。壁溝などから出土した土器からみて古墳時代前期の布留式併行期のものと考えられる。このほか、井戸と考えられる遺構を 3 基(土坑 5・7・8) 検出した。土坑 8 は、東西 1.4 m、南北 0.9 m の平面形が方形のもので、検出面からの深さ 1.3 m を測る。覆土内には布留式併行期の土器を多量に含み、特に最上層から製塩土器が多量に出土したことで注目できる。溝 4 は調査区を N-14°-E の方向性で直線的に貫く溝である。この溝は第 1 遺構面で検出した室町時代の溝とほぼ同じ位置にあたり、その方向性も一致する。また先にふれた旧土地区画の方向性とも一致することで注目できる。このことから、鎌倉時代の溝 4 が埋没した後もその方向性が踏襲されていたものと考えられる。

第 3 遺構面は、第 2 区及び第 3 区東端の第 4 b 層上面(標高 2.9 m 前後)において検出したもので、弥生時代中期初頭の竪穴住居 1 棟(竪穴住居 2)、土坑 3 基やピットなどを検出した。竪穴住居 2 は、第 3 区東端において検出したもので、壁溝、支柱穴、炉を検出した。壁溝の状況からこの住居は、直径約 6.3 m を測るとみられ、不正円形の平面プランをもつものである。また、検出した 3 基の支柱穴から 5 本柱の住居が復原できる。この住居の炉は、中央からやや南側に位置する直径 90 cm の円形のもので、

20 cm 程度の深さをもつ。炉内部の覆土は 6 単位に分けられ、最上層と最下層に赤褐色の焼土が多く含まれていた。出土した土器は、クシ描直線文を主体とする壺で、紀伊第 II 様式に併行する時期のものである。

第 4 遺構面は、第 1 区の中央から東側の 2 ヶ所の深掘調査区内の第 6 層上面(標高 2.6 m 前後)において検出したもので、土坑 2 基がある。土坑 23 は第 1 区東端で検出したもので、東西 0.9 m 以上、南北 1.3 m 以上を測り、検出面からの深さが 60 cm である。この土坑の覆土は、数単位に分けられるが、全体的に上層には赤褐色の色調をもつ焼土が、下層には黒褐色の色調をもつ炭が多く



土坑 8・15 (南西から)



竪穴住居 2 (南東から)



土坑 23 (南西から)

含まれ、炉の可能性が高い遺構である。遺物は、ヘラ描文を主体とする壺・甕が出土し、紀伊第I様式の新段階に併行する時期に比定できる。

遺物は、遺物収納コンテナ約30箱分が出土した。これら遺物の内容は、弥生時代前期から中期の土器をはじめ、土師器、須恵器、黒色土器、中世土師器、瓦器、瓦質土器、輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦、土製品、石器、石製品などがある。また特筆されるものに第1区第3層から出土した平



須恵器 円面硯

安時代に比定できる須恵器円面硯がある。この硯は硯面部7.8cm、磨墨面5.6cm、器高3.9cmの小形のものである。磨墨面は使用のため平滑であり、硯面端部は欠損するが、短く直立するものと考えられ、脚台部との境には突線状に僅かな稜がめぐる。脚台部にはスカシ孔は認められないが、「×」字状のヘラ描が認められ、脚台径から復原できるヘラ描文様の数は12ヶ所である。また内面ほぼ中央部、磨墨面裏面にも彫りが浅い「×」字状のヘラ記号が認められる。

まとめ

この調査では、弥生時代の遺構面を3面検出した。まず紀伊第I様式の新段階に比定できる第4遺構面では、土坑2基を検出した。この第4遺構面で検出した遺構は、近接地という利点から層位的にとらえて前期環濠と同一面上に検出されたものとみられ、遺物の時期からも併行関係にあるものと考えられる。弥生時代中期では、初頭にあたる第3遺構面で竪穴住居や土坑を、また後出する時期の遺構を第2遺構面においてそれぞれ検出した。集落中心部に推定できる旧土地区画の東側にあたる部分では、縁辺部に比べ遺構等の残存状態が良く、弥生時代中期においても生活面が2面存在することが明らかとなった。また竪穴住居2は、これまで検出されている竪穴住居のなかで最も南西部に位置するものとして注目できる。

次に古墳時代では、第2遺構面において前期の布留式併行期に比定できる竪穴住居や土坑を検出した。古墳時代の遺物量は弥生時代の遺物量に次いで多く、この点からもこれまでの調査地点と比べて特殊な様相と考えられる。当遺跡ではこれまで古墳時代を通して溝などの遺構が多数検出されていたが、竪穴住居の検出は本調査における竪穴住居1が初例である。

古墳時代以降では、平安時代の所産と考えられる須恵器円面硯が1点出土した。平安時代における円面硯の報告例は少なく、和歌山市内では紀ノ川北岸の平安時代の集落跡である高井遺跡などに出土例がある。このような状況から、今回出土した須恵器円面硯は重要視されるもののひとつとしてあげられる。鎌倉時代から室町時代にかけては、室町時代の溝が鎌倉時代の溝4を踏襲して掘削されていることや旧土地区画の方向性もこれらに踏襲されていることなどが明らかである。そして、当地が太田城の推定地にも含まれていることから、このN-14°-Eとやや東に振っている方向性が土地区画の方向性のひとつとして今後検討を要するものである。(井馬好英)

【参考文献】

『和歌山市内遺跡発掘調査概報』—平成12年度— 和歌山市教育委員会 2002年

6. ^{にししょう}西庄遺跡 第2次調査

調査地 和歌山市西庄 575-6番地

調査面積 35 m²

位置と環境

和歌山市西庄及び本脇周辺に所在する西庄遺跡は、標高4.5m前後の砂堆に位置する海浜集落である。遺跡の範囲は東西約900m、南北約400mに広がっており、古墳時代の大規模な製塩遺跡として周知されている。

周辺の遺跡を概観すると、縄文時代以降、加太遺跡、大谷川遺跡など紀伊水道に面した海岸部に小規模ながら海浜集落が出現する。また、弥生時代に出現するものとしては加太駅北方遺跡などがある。さらに、古墳時代以降では深山遺跡で製塩炉が確認されるなど、西庄遺跡の西側海岸部は県内でも製塩遺跡が多数分布する地域である。次に平野部に所在する遺跡については、縄文時代のもものとして、晩期後半の突帯文土器が出土した木ノ本Ⅱ遺跡、弥生時代では弥生時代後期末から古墳時代前期の竪穴住居が数棟検出された木ノ本Ⅰ遺跡がある。古墳時代の遺跡として本遺跡の西約2kmにある車駕之古址古墳は、周濠及び外堤まで含めた全長が約120mを測るもので、造り出しと盾形の周濠をもつ県内最大規模の中期前方後円墳である。車駕之古址古墳からは朝鮮半島製の金製勾玉が出土している。

西庄遺跡は、このような環境のなか古墳時代前期から奈良時代にかけて多数の製塩炉と多量の製塩土器を使用していた製塩集落である。

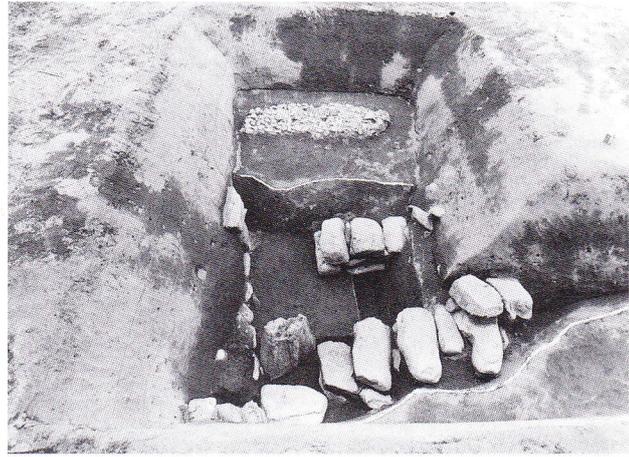


調査位置図

調査内容

今回の調査地周辺は、西庄遺跡の東部にあたり、内部主体に横穴式石室をもつ西庄古墳群の範囲内である。よって、古墳群の南への広がりを確認する目的で逆L字状に調査区を設定した。調査地の基本層序については、現代の整地土及び旧耕作土を第1層とし、第1層以下の江戸時代の遺物包含層と考えられるオリブ褐色の細砂を第2層、さらに土師器、瓦器など含むことから鎌倉時代の遺物包含層と考えられる灰黄褐色の細砂を第3層とした。第3層には、にぶい赤褐色の粗砂が縞状に混じる。また第4層は、古墳時代から平安時代にかけての遺物包含層と考えられるもので、第5層は自然堆積による無遺物層である。遺構は、第5層上面において古墳時代後期の埋葬施設2基、ピット2基、溝1条を検出し、平面的な調査では確認していないが第4層上面においてピットを1基、さらに第3層上面では鎌倉時代のピット5基、土坑3基を検出した。以下、古墳時代後期の埋葬施設について述べる。

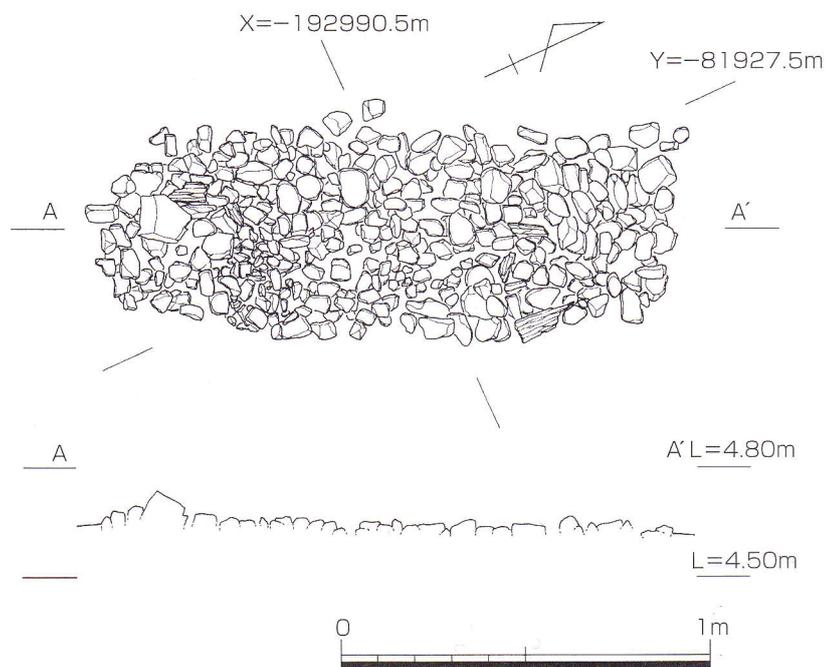
埋葬施設1は、南北1.6m、東西0.6mの範囲に石を敷き詰めたもので、使用されている石材は主に砂岩の玉石であるが、結晶片岩・チャートが少量みられる。現状では、南側が楕円状であり、北側は矩形を呈し、その主軸はN-24°-Eの方向性をもつ。この遺構の性格としては、何らかの埋葬施設



第3遺構面全景（西から）



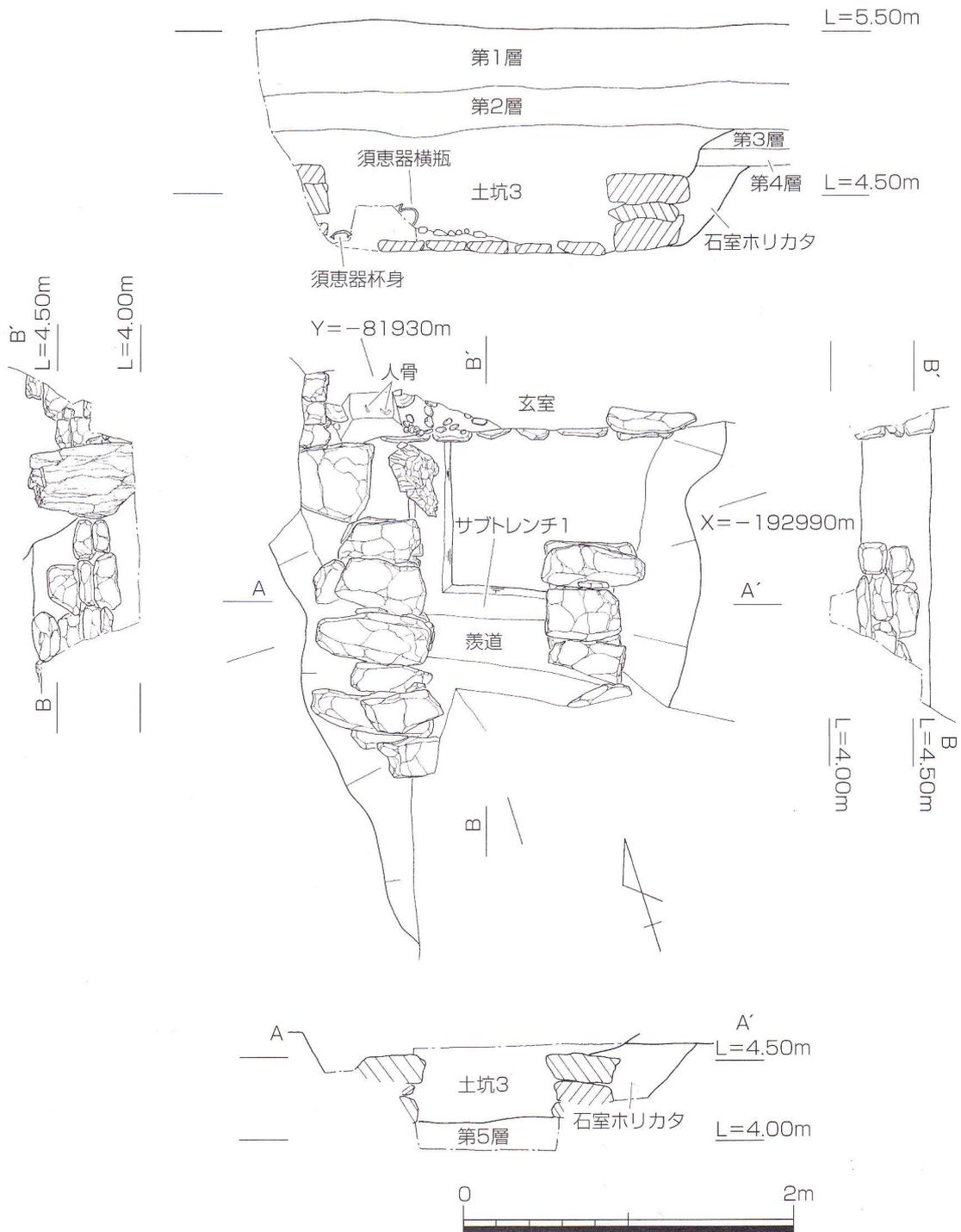
第3遺構面全景（南から）



埋葬施設1 遺構平面図及び断面図

と考えられるが、上部が削平を受けているため明らかにできなかった。

埋葬施設2は、横穴式石室であり羨道、玄門、玄室の一部を確認した。この石室は第3層上面から掘削された土坑によって上部構造が削平を受けており、玄室から羨道に向かって左側の側壁は、袖石部分の石材がすべて抜き取られている。また両側壁は石室床面から2～4段を残すのみである。玄室側壁については右側壁及び、そこから西へ2m付近で左側壁を検出した。さらに第1区北壁土層断面の観察から玄室床面には板状の石材を用いた敷石が確認できた。石室の平面プランについては、左袖石が欠失しているため復元を要するが、玄室と羨道の位置関係から南に開口する両袖式の



埋葬施設2 遺構平面図及び断面図・立面図

横穴式石室になることは明らかである。ただ、羨道右側壁の玄門部には結晶片岩の袖石が用いられ、側壁ラインから幅約 10 cm、玄室南端まで約 50 cm 程度内側に突出した構造になっている。よって石室の中軸線で反転させ復元すると、この石室は玄室前道を有することになる。以上の検出状況から石室規模は、羨道検出長 1.6 m、羨道幅約 70 cm、玄門幅約 55 cm、玄門長約 50 cm、玄室幅約 1.7 m を測り、また石室主軸の方向性は、N-17°-E である。石室石材については、玄門部の袖石を除きすべて和泉砂岩である。玄室内については、敷石直上において TK-43 型式の須恵器杯身が逆位の状態で出土し、その上部には 3~5 cm 大の玉石が約 8 cm の厚さで堆積している。さらに玉石の直上には TK-209 型式の横瓶が正位の状態で出土し、また人骨がみられた。よって、埋葬施設 2 は少なくとも 2 回の埋葬行為が行われていると考えられ、追葬時には、玉石を用いて玄室床面を再構築した可能性がある。

築造時期については、敷石直上出土の須恵器杯身の型式から 6 世紀後半の築造とみられる。

まとめ

西庄遺跡では、財団法人和歌山県文化財センター（以下、県文化財センター）によって県道西脇・山口線道路改良工事に伴う発掘調査が第 6 次調査まで行われている。当財団では、平成 10 年度に県文化財センター第 5 次調査地点の南側隣接地において、個人住宅建築に伴い発掘調査を行っている。これらの調査の結果、古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物、石敷製塩炉、古墳などが確認されており、各調査地点において主体となる遺構の相違から遺跡の西部を作業域、中央部を居住域、東部を墓域として遺跡内の土地利用について復原されている。

今回の調査地は遺跡の南東部分、墓域とされている部分にあたり、県文化財センターが行った第 5 次調査地点の南西 30 m 付近に位置する。県文化財センターの調査では、現在までに遺跡西部の第 3 次調査において 1 基、第 5 次調査において 4 基の合計 5 基（西庄 1~5 号墳）の古墳が検出されている。これらのうち、5 号墳については削平のため石室の構造については不明であるが、2・4 号墳が横穴式石室、3 号墳が小型の竪穴式石室を埋葬施設に採用している。特に 4 号墳の横穴式石室は、袖石が内側に突出し玄室前道基石を備えているもので、玄室床面には 3 時期の床面が確認されており、第 1 次床面には扁平な板石が敷かれ、第 2 次床面と第 3 次床面には数 cm 大の玉石が敷かれていたようである。このような特徴は、玄室幅などの法量や築造時期なども含め今回検出した埋葬施設 2 と共通する要素であることから、埋葬施設 2 は県文化財センターの調査で検出された一連の石室群とともに、西庄遺跡南東部を中心とする西庄古墳群を構成するひとつと考えられ、県文化財センター検出の古墳に続き 6 号墳として把握するべきものと考えられる。また今後、古墳群の範囲がさらに南に広がる可能性がある。

今回の調査は、和歌山県内では検出例の少ない古墳時代後期から終末期にかけての古墳の検出例である。よって、その石室構造や埋葬行為の特徴を明らかにして、砂堆に築造された古墳群の性格と製塩遺跡とのかかわりを検討していくことが今後の課題となろう。（藤藪勝則）

【参考文献】

『和歌山市内遺跡発掘調査概報』—平成 12 年度— 和歌山市教育委員会 2002 年

7. ^{にししょう}西庄遺跡 第3次調査

調査地 和歌山市本脇 46-1 番地

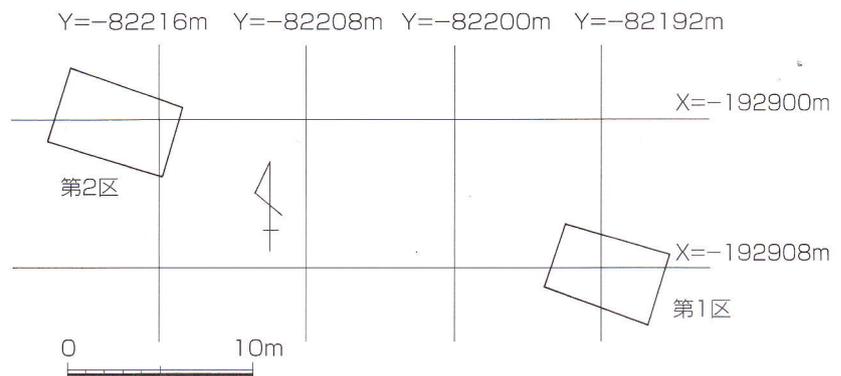
調査面積 48 m²

位置と環境

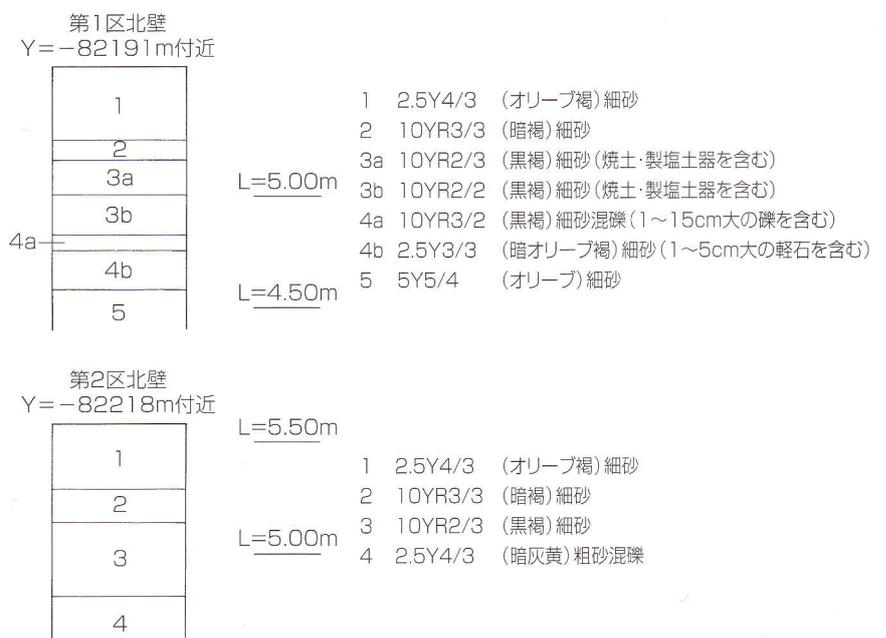
今回の調査地は、遺跡の中央部西側にあたり、北側隣接地は財団法人和歌山県文化財センター（以下、県文化財センター）の第4次調査南隣接地である。当調査位置は、6. 西庄遺跡 第2次調査の調査位置図（P.18）に示した。調査地周辺においては、県文化財センターが県道西脇・山口線道路拡幅工事に伴う発掘調査を継続的に行った結果、古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物、石敷製塩炉、古墳、鎌倉時代の土坑墓などが確認されている。それらの調査成果から判断すると、今回の調査地においては古墳時代の住居跡、石敷製塩炉、鎌倉時代の土坑墓などが検出される可能性が考えられた。

調査内容

調査は、東西 6 m、南北 4 m の調査区を 2 ヶ所に設定し東から第 1 区、第 2 区とした。基本層序については、調査区の全面に現地表である近現代の耕作土（第 1 層）が堆積する。また第 1 層下には、暗褐色の細砂（第 2 層）が堆積する。この第 2 層上面では、第 1・2 区ともに室町時代の溝や江戸時代の遺構などを検出した。また第 1 区で検出した溝 1 からは緑釉陶器が 1 点出土した。第 2 層下については、第 1 区において黒褐色の細砂（第 3 a 層）が堆積している。また第 3 b 層は、同じく黒褐色の細砂で、古墳時代の製塩土器や砂岩礫を多量に含むものである。



調査地区割図



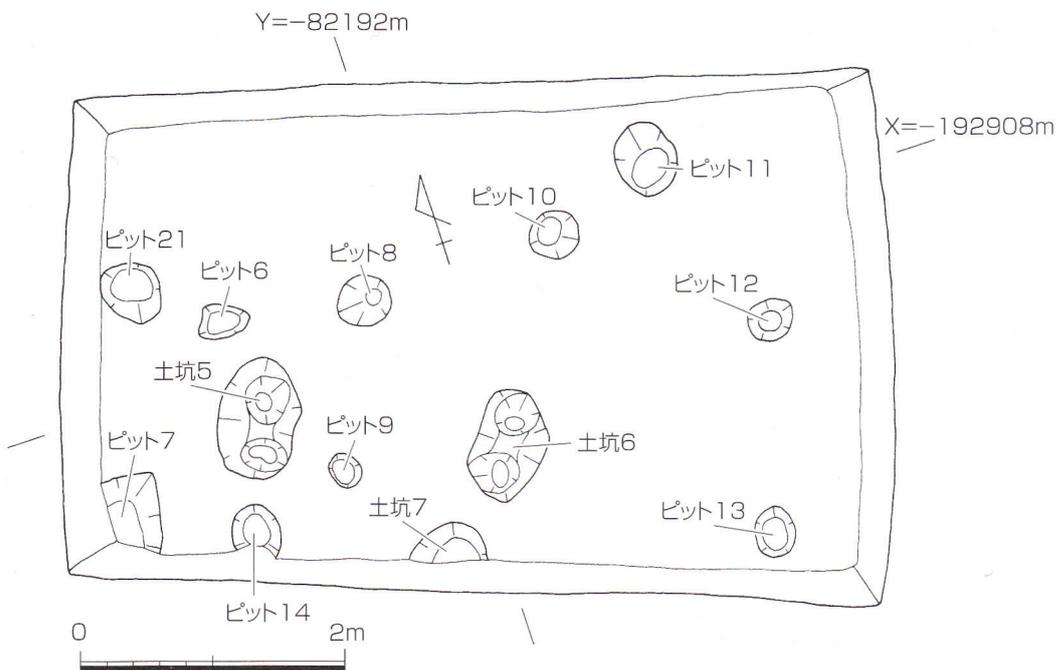
調査地土層柱状模式図

これらの堆積の時期については、古墳時代後期から奈良時代のもと考えられる。第2区では、第1区でみられた第3a・b層の堆積を明確に分層することができなかった。ただ、製塩土器を多量に包含する黒褐色の細砂が調査区の全面に堆積しており、その土色・土質が類似することから判断して、第2区第3層は第1区第3a・b層に対応するものと考えられる。この第3層上面では、第1区で平安時代と考えられる溝を、第2区で調査区南東隅に奈良時代から平安時代とみられる土坑を検出した。第3層下については、第1区において黒褐色の細砂混礫（第4a層）及び暗オリーブ褐色の細砂（第4b層）が堆積している。これらの堆積の時期については、出土遺物から古墳時代中期から後期と考えられ、この上面では古墳時代後期と考えられる石敷製塩炉や土坑などを検出した。第2区においては、第3層下に暗灰黄色の粗砂混礫（第4層）が堆積しており、この上面は古墳時代後期と考えられる掘立柱建物や、古墳時代中期とみられる土坑などを検出した遺構検出面である。この第4層には遺物がみられないため、自然堆積による無遺物層と判断した。また第1区においては、第4b層下にオリーブ色の細砂（第5層）が堆積している。第5層は遺物を全く含まない無遺物層で、この上面は古墳時代中期の土坑などを検出した遺構検出面となる。よって、第2区における第4層は層位的にみて第1区第5層に対応するものと考えられる。

遺構については、今回の調査では古墳時代中期から江戸時代にかけてのものを検出した。ここでは、そのなかでも古墳時代中期から後期の遺構について説明する。

まず第1区では、古墳時代中期のものとして第5層上面（標高約4.6m）において土坑3基、ピット10基を検出した。

土坑5・6はともに調査区の南西部において検出したもので、土坑5は長径92cm、短径60cmを測る。平面プランは楕円形を呈し、長軸にそって直径20～30cm、深さ約40cmの柱穴が二つみられるものである。また土坑6は、土坑5の東約2mに位置するもので、長径84cm、短径52cmを測り、平面プランは土坑5と同様に楕円形を呈する。これらはともに覆土は単一で柱材などは残って

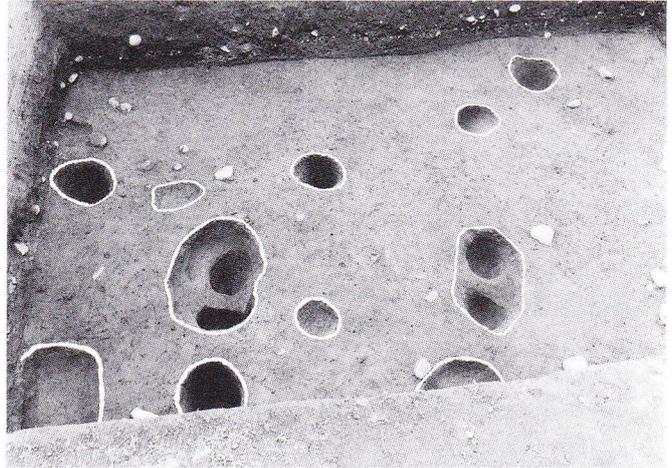


第1区 第5層上面遺構全体平面図

いなかった。土坑の性格としては、掘立柱建物に伴う柱穴と考えられる。

古墳時代後期のものとしては、第4a層上面（標高約4.7m）において石敷製塩炉1基、土坑1基、ピット5基を検出した。

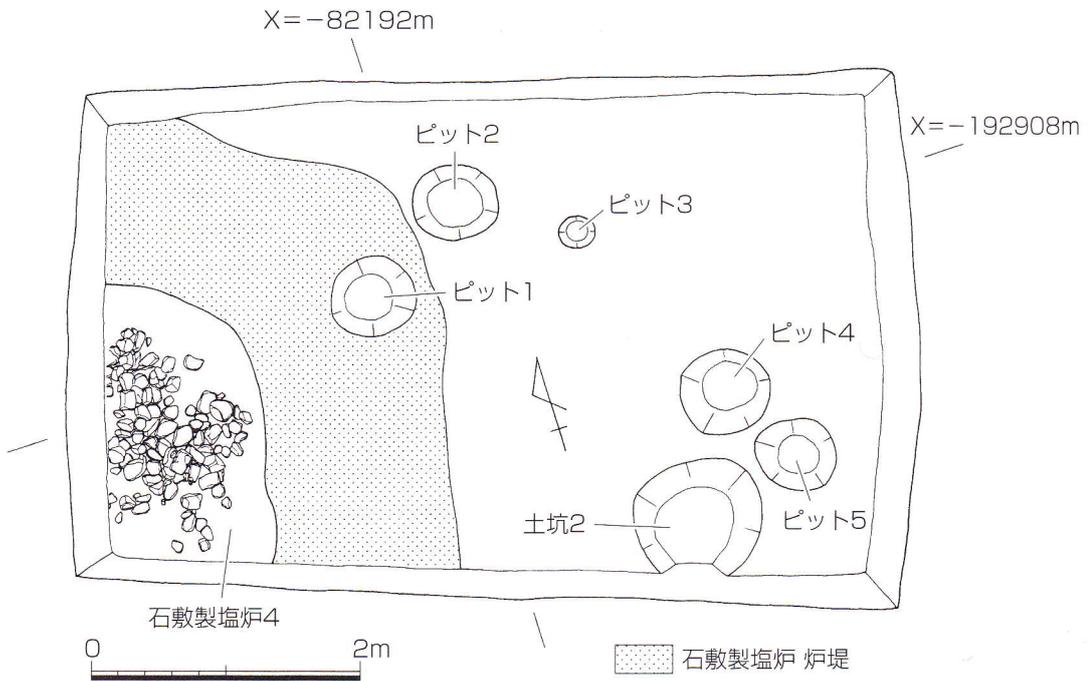
石敷製塩炉4は、調査区の西南隅において検出したもので、炉周辺には炉堤と考えられる焼土の高まりがみられるものである。平面プランは楕円形を4等分した形態を呈することから、炉堤まで含めた規模を復元すると長径7.2m、短径5.4mを測る。また炉堤については幅1.2～1.4m、調査区南壁面土層堆積状況の観察から高さは10cm前後を測り、断面形が蒲鉾形を呈する。この炉堤の形成過程については、製塩を行った後、炉周辺に灰や破損した製塩土器を掻き出す行為を繰り返すことによって形成されたと考えられ、製塩炉の石材自体も動かされ掻き出されたものが炉堤を掘削した際



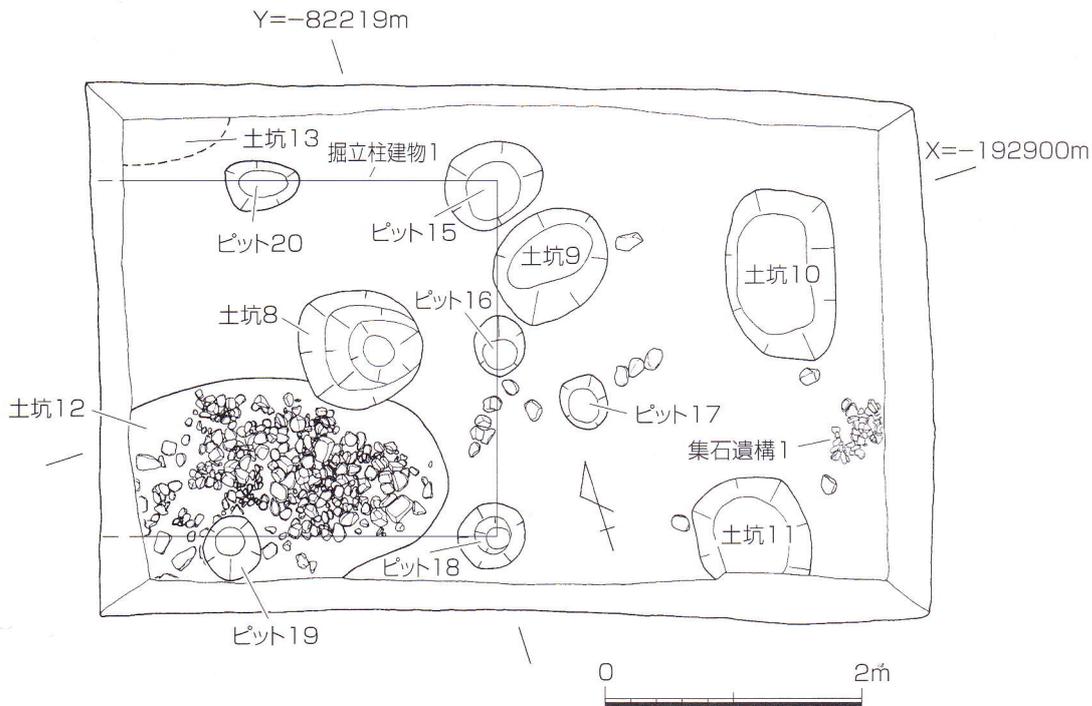
第1区 土坑5・6（南から）



第1区 石敷製塩炉4（南から）



第1区 第4a層上面遺構全体平面図



第2区 第4層上面遺構全体平面図

に数多くみられた。

次に第2区の遺構としては、第4層上面（標高約4.8 m）において、古墳時代中期から後期にかけての掘立柱建物1棟、土坑6基、ピット6基を検出した。

掘立柱建物1は、ピット15・16、18～20で構成されるもので、建物の規模は梁行2間、桁行2間以上の規模を有し、その方向性は真北に対しN-72°-Eである。柱間は梁行が1.4 m等



第2区 第4層上面全景（西から）

間であるのに対し、桁行は1.8～2.1 mとばらつきがある。柱穴の直径は20～50 cmを測り、深さは検出面から20～40 cmである。この掘立柱建物の時期については、ピット19からTK-10型式の須恵器杯身（17）が出土していることから古墳時代後期のものと考えられる。

土坑12は、第2区の南西隅において検出したもので、10～15 cmの浅い土坑を掘削した後、5～20 cm大の砂岩を敷き並べた石敷製塩炉と考えられる。遺構の時期としては、掘立柱建物の柱穴群との重複関係から古墳時代中期と考えられる。

出土遺物については、土師器・須恵器・陶質土器・製塩土器・黒色土器・緑釉陶器・瓦器・輸入陶磁器・国産陶磁器・土製品・石器・金属器・骨角器・獣骨などがあり、その時期は古墳時代前期から江戸時代にかけてのものである。これらのうち陶質土器については、細片のため図示しなかつ

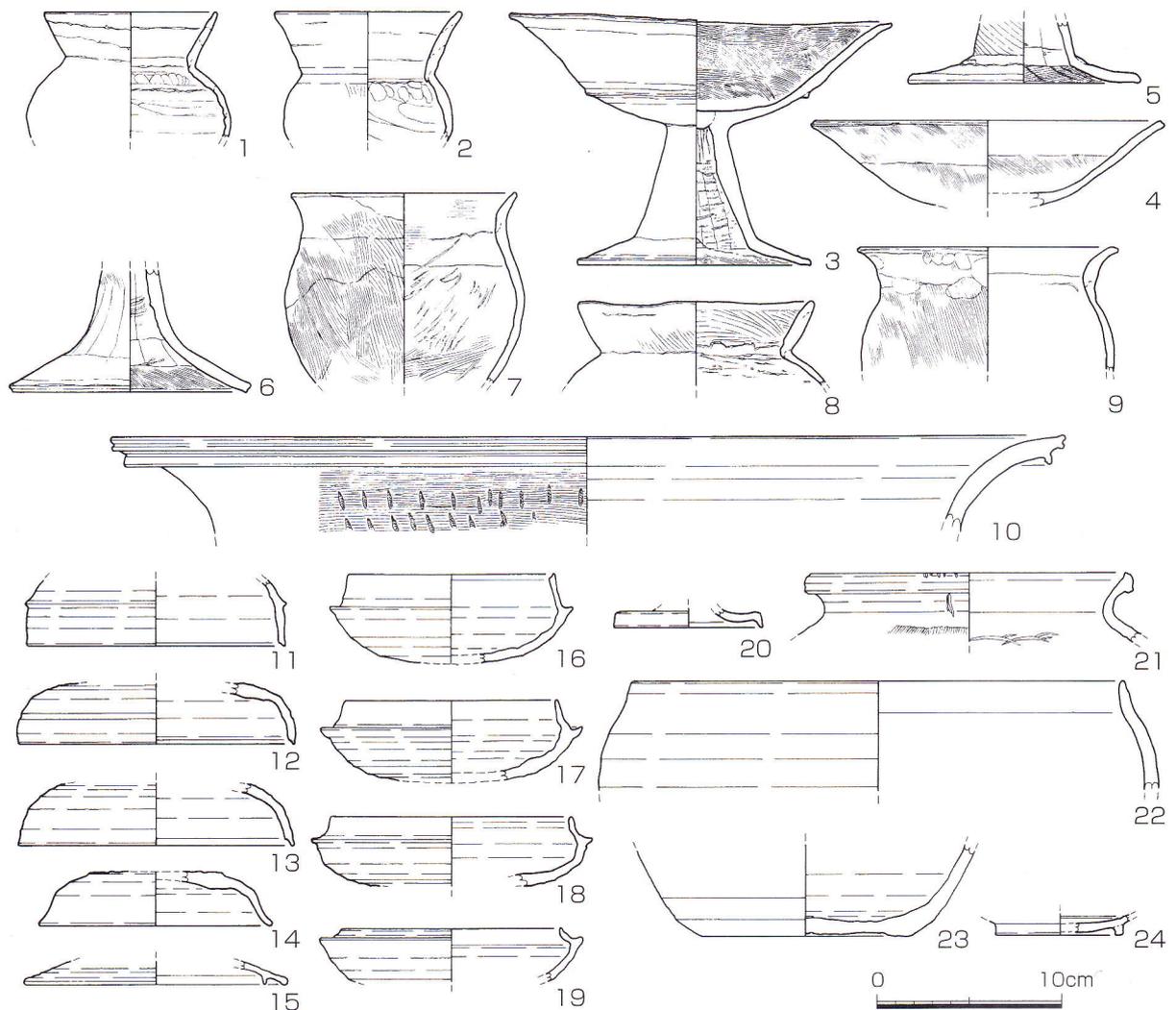
たが、県文化財センター第4次調査において出土した陶質土器の甕（県文化財センター報告2002、遺物番号1009）と接合するものである。また遺物の総数はコンテナに約16箱を数える。以下、主なものについて説明する。

1～9は土師器である。1・2は小型丸底壺で、口径は1が9.4 cm、2が10.2 cmを測る。これらはともに口縁部の内外面にヨコナデを施すもので、頸部内面にはユビオサエが顕著にみられる。

3～6は高杯である。3は口径20.9 cm、脚部径12.8 cm、器高13.1～13.7 cmを測り、杯部下半に突帯を貼り付けて稜をつくりだすものである。外面の調整にはヨコナデが施されている。4は口径18.6 cmを測り、内外面の調整にはナナメ方向のハケが施されている。5・6は脚部である。脚部径は、5が12.4 cm、6が12.7 cmを測る。

7～9は甕である。7は口径12.0 cmを測るもので、体部内面にはナナメ方向のヘラケズリの後、下半部にヨコ方向のハケが施されている。8は口径12.9 cmを測るもので、口縁部の器壁が体部に比べ厚いものである。9は口径14.2 cmを測るもので、胎土には1～3 mm大の雲母が含まれている。

10～23は須恵器である。10は須恵器の甕である。口径52.3 cmを測り、口縁下端部に突帯を1



遺物実測図1

条巡らすものである。外面の調整にはカキメが施されており、2列に配された刺突文がみられる。

11～15は杯蓋である。11は口径14.0cmを測り、口縁部と天井部の境に明瞭な稜をもつものである。また12・13は口径15.0cmを測り、口縁部と天井部との境の稜が沈線に変化しているもの(12)と口縁部と天井部の境界が不明瞭なもの(13)である。また14は天井部にヘラ切りの痕跡が明瞭に残るもので、身になる可能性がある。15は口径14.0cmを測り、杯身と杯蓋が上下逆転する段階のものである。

16～19は杯身である。16は口径11.2cmを測るもので、体部下半の約1/2までをヘラケズリによって仕上げるものである。17は口径11.5cmを測り、ヘラケズリの範囲が16に比べ狭く、口縁部が短く内傾するものである。また18は口径13.0cmを測り、17に比べさらにヘラケズリの範囲が狭くなり、口縁部も短く内傾するものである。19は口縁部が最も短く内傾するものである。

20は高杯の脚部と考えられ、脚部径8.1cmを測るものである。

21は短頸壺である。口径は17.0cmを測り、口縁端部を上下に肥厚させるものである。口縁端部には部分的に刻み目が施され、頸部にはヘラ記号とみられる沈線が1条刻まれている。

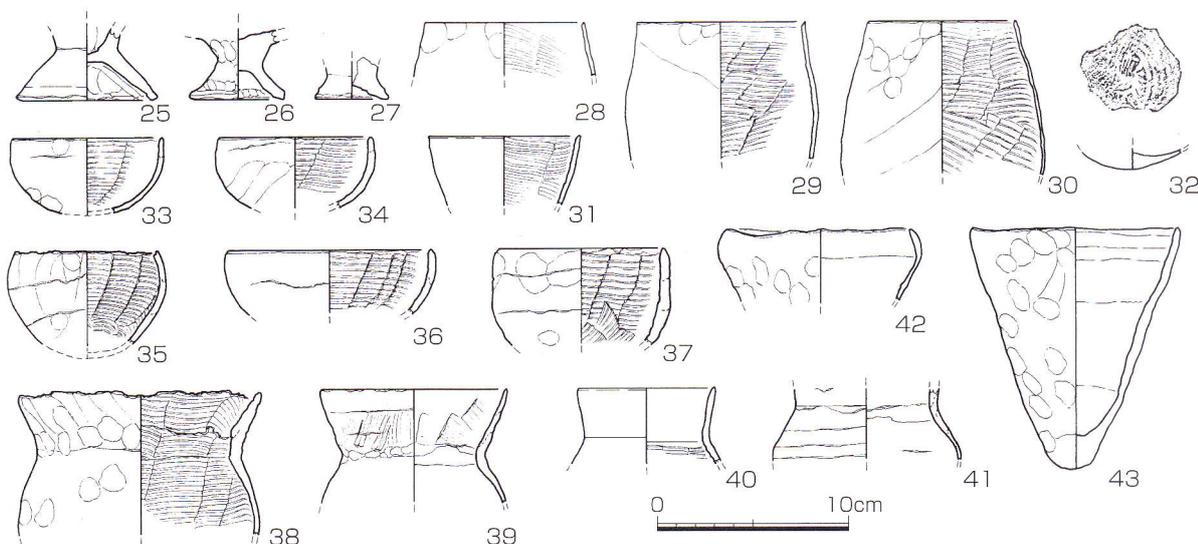
22は無頸壺とみられるもので、口径26.9cmを測る。

23は壺の底部とみられるもので、底径11.3cmを測る。

24は緑釉陶器である。高台径7.0cmを測るもので、見込み部分に沈線が巡るものである。内外面の調整は、基本的にナデによって仕上げられるが、高台付近は高台貼り付け後のヘラケズリがみられる。施釉は、高台内側以外はすべて行われている。

これらの遺物の出土位置は、1が土坑13、2・5・6・11が第1区第4層、3が第2区集石遺構1、4が第2区土坑9、7・9・10・15・18・19が第2区第3層、8が第1区第4b層、12・14・16・23が第1区第3a層、13・20・21が第2区第2層、17が第2区ピット19、22が第2区第3層、24が第1区溝1から出土した。

25～43は製塩土器である。25～27は脚台式のものである。25は脚台Ⅱ式で、脚部径7.4cm



遺物実測図2

を測る。脚部から斜め上方に体部がのびるものである。26は脚台Ⅲ式で、脚部径5.0cmを測る。短く外反する脚部からやや水平方向に体部がのびるものである。27は脚台Ⅳ式で、脚部径3.8cmを測る。

28～43は丸底式のものである。そのうち28～32は丸底Ⅰ式で、口径は28が8.2cm、29が8.8cm、30が7.6cm、31が7.8cmを測る。これらはすべて外面の調整にナデ及びユビオサエがみられ、内面には貝殻条痕が施されている。31は口縁部が外傾することから他のものと形態が異なるが、調整及び器壁の厚さなどから丸底Ⅰ式に含めた。32は底部であり、内面には貝殻条痕がみられる。

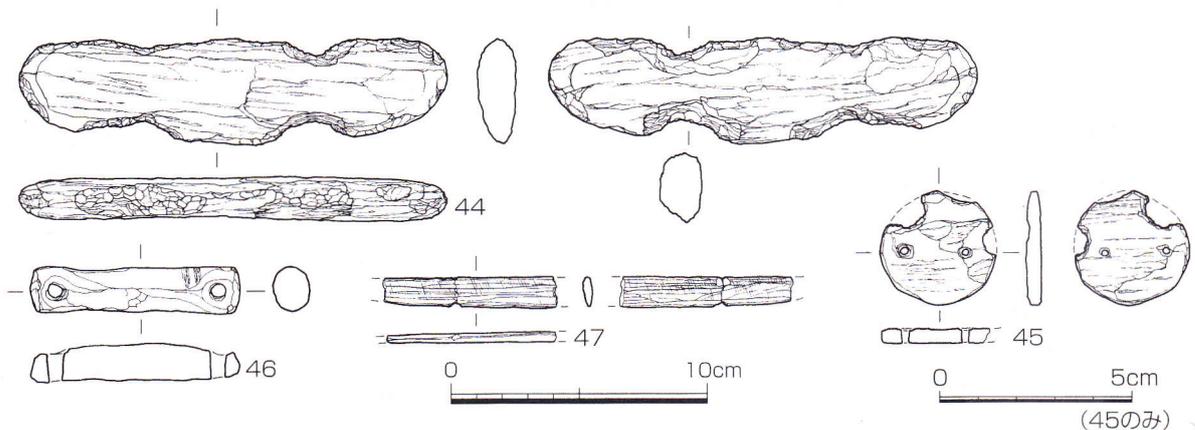
33～37は丸底Ⅱ式のものである。口径は33が7.8cm、34が8.0cm、35が7.4cm、36が10.6cm、37が8.5cmである。これらの調整技法については、丸底Ⅰ式のものと同様である。37は、器壁がやや厚いものであるが、調整技法や製作技法が類似することから丸底Ⅱ式に含めた。

38～41はいわゆる甕形のものと考えられる。38は口径12.6cmを測るもので、外面の調整にはユビオサエ及びナデがみられ、内面の調整には体部から口縁部にかけて貝殻条痕が施されている。39は口径9.6cmを測るもので、斜め上方に長く直線的にのびる口縁部をもつものである。器壁が薄いことや、2次的に火を受けて赤変することから製塩土器と判断した。40は口径7.2cmを測るもので、体部から上方へ直線的に口縁部がのびるものである。41は口縁部を欠失するが、40と同じ形態のものとみられ、内外面の調整にはナデ及びユビオサエが施されている。

42・43はいわゆる砲弾形のものである。42は口径9.3cmを測り、口縁部が内彎するものである。43は口径10.7cm、器高12.7cmを測るものである。42に比べ器壁が厚く口縁部が直線的にのびるものである。色調は乳褐色を呈し、赤変部分がみられないという特徴がある。

これらの遺物の出土位置は、25・38・39が第1区第4b層、26が第1区第4a層、27が第1区ピット10、28・34が第1区石敷製塩炉4、29・30・37が第2区第3層、31・33・35・41・42・43が第1区第3a層、32が第2区土坑12、36が第1区第2層、40が第2区土坑8から出土した。

44は結晶片岩製の棒状石製品とみられるもので、最終的に叩石として使用された複合石器である。全長は16.8cm、最大幅4.1cm、最大厚1.5cmを測るもので、重さ187.6gである。この石器は



遺物実測図3

3段階の使用痕が確認でき、最も古い第1段階の使用痕は両端部にみられる擦痕である。その後、第2段階の使用痕として、左右の上下相対する位置に合計4ヶ所の抉りがみられる。そして第3段階のものとして、上下左右の稜線部分に敲打痕が認められる。色調は淡緑色を呈する。

45は滑石製の有孔円板で、直径3.0 cm、厚さ3.5 mmを測り、重さは5.3 gである。上部には3ヶ所に人為的な抉り込みが認められる。色調は乳白色を呈する。

46は土錘である。有孔土錘または瀬戸内型土錘と呼ばれるもので、全長8.2 cm、直径1.4～1.8 cmを測る。重さ23.4 gである。一部に火を受けて赤変した部分がみられるものである。

47は骨角製の刀子とみられるもので、残存長6.8 cm、最大幅1.7 cm、最大厚4 mmを測る。表裏面には、成形段階のものと考えられるヨコ方向のケズリが施されており、背部から刃部にかけては斜め方向の条線がみられる。色調は黒褐色を呈する。これらの遺物の出土位置は、44・45が第1区第3層、46が第1区第2層、47が第1区土坑5から出土した。

まとめ

今回の調査では、古墳時代の石敷製塩炉や大量の製塩土器が検出され、当財団が行ってきた西庄遺跡内における発掘調査成果からみても、遺構の性格が各調査地点で異なることを指摘することができる。このことは遺跡の西部を作業域、中央部を居住域、東部を墓域とする考え方を裏付けるものであり、さらに発掘調査が進めば各時代を通した西庄遺跡の変遷が明らかになるものと考えられる。

また第1区第5層上面において、二つの柱穴をもつ土坑を2基検出することができた。和歌山県内でこのような構造をもつ土坑は、規模やホリカタは異なるが、鳴滝遺跡や当財団が平成10年に調査を行った友田町遺跡においても確認されており、大型倉庫群に採用されていたと考えられている。よって、今回検出した土坑5・6は倉庫として機能した掘立柱建物の柱穴になる可能性がある。さらに第4a層上面においては、炉堤を伴う石敷製塩炉を確認することができた。製塩炉の調査は、石敷炉の検出が主体となる現状であるが、炉に付随する施設やその構造も今後視野に入れ調査する必要があると考える。

第2区では、第4層上面において掘立柱建物を1棟検出した。今回の調査区は、県文化財センターの調査成果では作業域にあたることから、製塩によってできた塩の保管を目的とした倉庫としての性格が考えられる。

遺物では、製塩活動にかかわるものの他、土錘や結晶片岩製の棒状石製品、骨角製の刀子など漁労活動にかかわると考えられる遺物も出土した。これらは西庄遺跡の生産活動を示すものとして重要な資料である。

(藤藪勝則)

【参考文献】

- 『西庄遺跡発掘調査Ⅰ』(財)和歌山県文化財センター 1995年
- 『西庄遺跡発掘調査Ⅱ』(財)和歌山県文化財センター 1999年
- 『西庄遺跡—都市計画道路西脇山口線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—』(財)和歌山県文化財センター 2002年
- 『(財)和歌山県文化財センター年報』(財)和歌山県文化財センター 1998年
- 『(財)和歌山県文化財センター年報』(財)和歌山県文化財センター 1999年
- 『友田町遺跡 第2・3次発掘調査概報』(財)和歌山市文化体育振興事業団 1998年

8. 旧中筋家住宅 発掘調査

調査地 和歌山市禰宜148番地

調査面積 40 m²

位置と環境

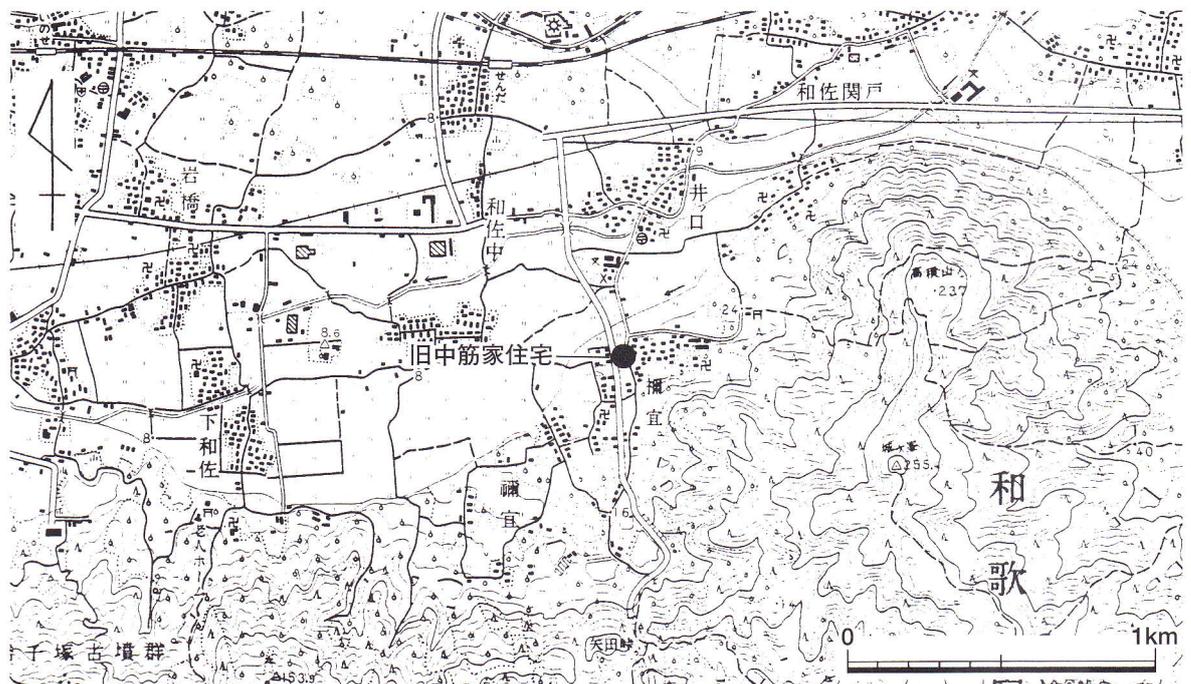
旧中筋家住宅は国の重要文化財に指定されている建造物で、紀ノ川の南岸、岩橋山塊から北方に延びる丘陵の裾部に位置している。中筋家は江戸時代、和佐組の大庄屋であったとされており、組下の村々の統治に重要な役割を果たした。現在の主屋が建てられた年代は鬼瓦の紀年銘から1852年前後と考えられている。今回の調査は旧中筋家住宅の解体修理に伴うもので、南西部に位置する人力車庫の下層遺構確認のために行われた。

調査内容

調査区の基本層序について、第1層は南側区画に約5cmの厚さで堆積する土層で、現状での表土にあたる。北側区画の地表面はコンクリートによって覆われている。第2層は整地土とみられる灰褐色のシルト層で黄褐色のシルトをブロックで含んでいる。その厚さは5～10cmを測る。北側の区画では第2層掘削後の第4層上面において埋甕等を検出している。

さらに下層の状況を確認するためにサブトレンチを設定し掘削を行ったところ、南側区画では第3層が10cm、第4層が15cmの厚さで確認できた。また、北側区画では第3層はみられず、第4層が約35cmの厚みで堆積している。第3層からは昭和期の新聞紙片が出土している。また第4層には長さ10～20cmの結晶片岩が多く含まれていた。この第3・4層は現在の基礎石列を構築する際の整地土と考えられる。第5層は暗褐色のシルトで、周辺の敷地全体を整地した際の盛土とみられる。

検出した遺構は北側区画の第4層上面において検出した埋甕で、レンズ状の浅い落ち込みの中央



調査位置図

付近に甕が埋設されていたものである。甕の上部には幅約 13 cm、長さ約 90 cmの板材が 5 枚、蓋をするように据えられており、さらにその上には瓦片が多くみられた。落ち込みは直径約 2 m、深さ約 10 cmを測るもので遺構全体が粗砂層によって埋められていた。甕埋設時のホリカタは直径約 55 cm、深さ約 50 cmで、埋設の後に同じ土で埋め戻している。

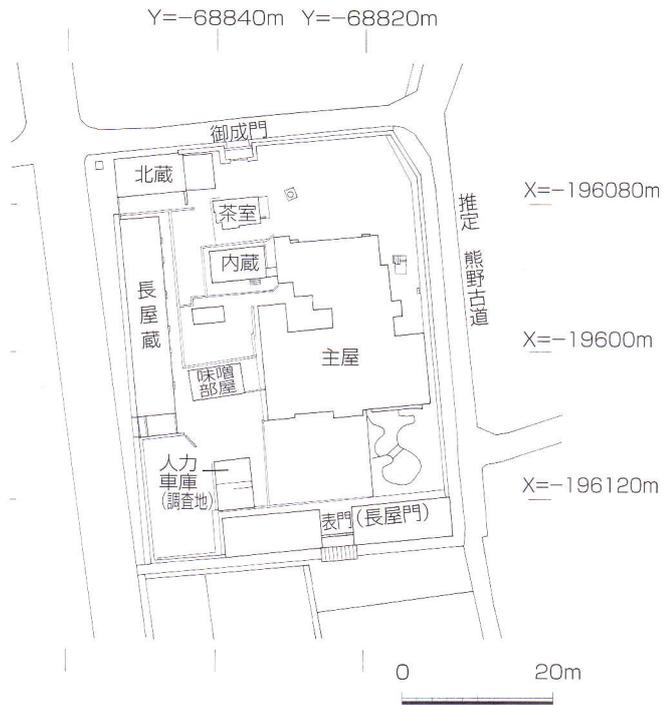
検出した甕は高さ 48 cm、口径 35 cm、最大胴部径 42 cm、底径 16 cmを測る。内部は空洞で遺物はみられなかった。口縁部には 3 段の段がつけられ、歪みのためか平面形が楕円形を呈している。暗褐色の釉薬が施される陶器であるが産地は不明である。体部上位には菊紋がみられ、左右には「松林軒」「本漉」の文字が刻印されている。その反対側にも同様に菊紋がみられ、右側に「松平」の刻印が確認できた。この埋甕の用途としては、検出状況等から考えて、牛馬の排便処理に用いられたものと考えられ、一時期には家畜小屋として機能したとみられる。埋没時期は、同一面にコンクリート片がみられることや埋土からプラスチック片が出土していることを勘案すると昭和期に入ってからと考えられる。

まとめ

今回の調査の結果、調査区北側では埋甕を検出したことで、この区画が家畜小屋として使用されていたことが明らかになった。埋設されていた甕には刻印が施されていたが、同様の特徴をもった大型の甕が同屋敷内の長屋蔵から発見されており、同一箇所から購入したものと考えられる。

出土遺物では近世・近代の瓦が多いが、その中には中世の土器・瓦も散見された。熊野古道に隣接することや歓喜寺との位置関係などを考えると、周辺に中世の遺構が存在する可能性が高いとみられる。

(高橋方紀)



旧中筋家住宅建物配置図と調査位置



調査区全景 (北西から)



埋甕断割状況 (南から)

9. 太田・黒田遺跡 第47次調査

調査地 和歌山市黒田81-5番地

調査面積 190 m²

位置と環境

調査対象地は、太田・黒田遺跡の中央からやや北西部、太田城跡推定範囲の北縁部に位置し、既往の調査である第33・34次調査地及び第41次調査地の隣接地にあたる。第33・34次調査では、弥生時代中期の大溝や奈良時代の大溝、平安時代の溝が、第41次調査では、弥生時代中期の溝や第33次調査で確認した平安時代の溝の延長部を検出している。

今回の調査では、第33・34次調査で検出された遺跡北西部の様相をさらに明確にし、第26次調査及び第45次調査で検出された弥生時代前期環濠の推定ライン付近にあたることから、この環濠の検出も重点課題に挙げられた。

調査内容

調査区は、建物の建設範囲にあたる2ヶ所の地点に設定し、北側に位置するものを第1区と定め、南西の調査区を第2区とした。第1区は、東西7m、南北22m、また第2区は東西7m、南北4.5mの調査区である。

調査地の現況が駐車場であることから、表面は厚さ4cmを測るアスファルトである。このアスファルトの下は整地土となり、その厚さは第1・2区の南側で90cm、第1区の北側で50cmを測る。整地土下には約20cmの厚みをもつ旧耕作土（第1層）がほぼ水平に堆積する。この第1層は、江戸時代以降の堆積とみられる。第1層下にはその床土（第2層）があり、その下に20～30cmの厚さをもつ水田耕土（第3層）が堆積する。この第3層は第33・34次調査で平安時代の水田耕土と報告されているが、本調査においてこの第3層が3単位に細分できる

ことを確認し、瓦器などの出土からその下限が鎌倉時代になるものとみられる。第4a層は第33・34次調査時の第4層に対応する土層で、上端面が東側の第2区において最も高く、西側の第1区

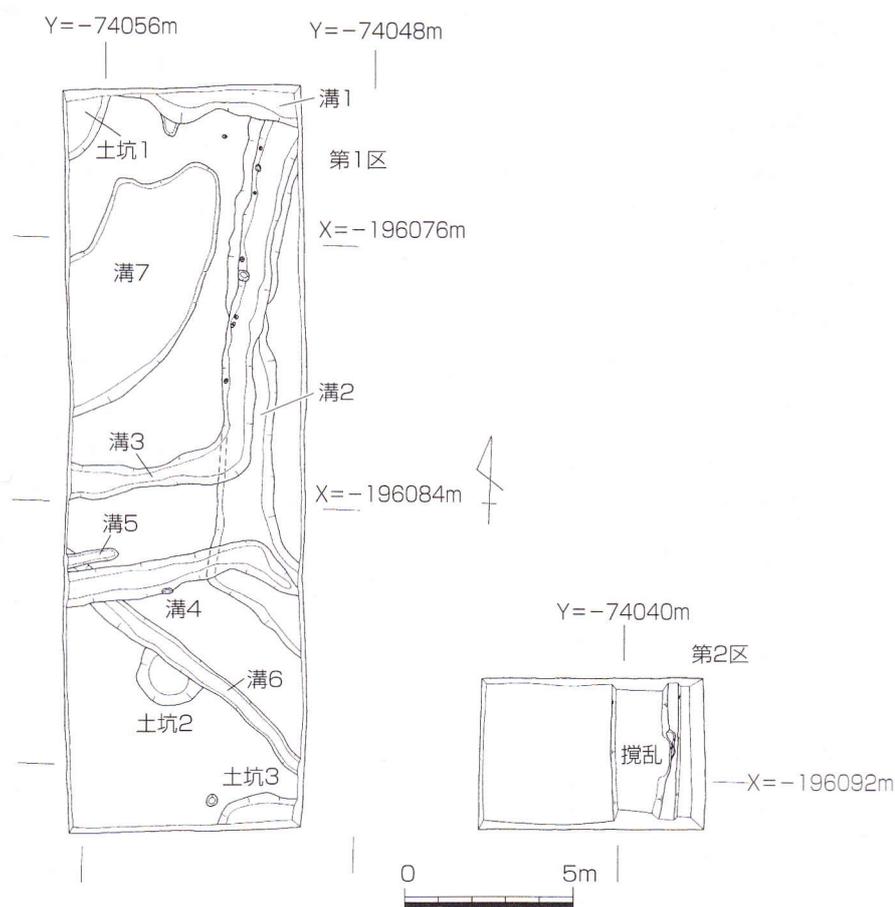


調査位置図

に向かって緩やかに落ち込む。包含する遺物からみて、奈良時代末から平安時代初頭頃の堆積と考えられる。第4a層下には第1区においてのみ検出した厚さ5～10cmの黄褐色系の粗砂混シルト(第4b層)がある。この第4b層上面において奈良時代の溝1条を検出した。また第4b層の下面では弥生時代中期から古墳時代までの遺構を検出した。これらの状況から、第4b層は微低地部のみに堆積した土層で、その時期は古墳時代後期から奈良時代前期頃とみられる。第5層は灰黄褐色系のシルト層であり、10～20cm程度の厚みを測る。また第6層は黄褐色系のシルト層であり、20～30cm程度の厚みを測る。これらの土層はともに北西側に緩やかに傾斜する堆積であり、弥生時代中期前半の遺物を含む。第7層は、にぶい黄褐色系のシルト層であり、10～30cmの厚みを測る。この第7層の上面が弥生時代中期初頭の溝などを検出した第2遺構面である。第7層下の状況は、これまで無遺物層とされていた第26次調査で確認した第7b層や第45次調査で確認した第7層が、今回検出した灰黄褐色のシルト層(第8層)に類似する土層と考えられ、この調査において初めて弥生時代前期の土器片を検出した。

第1遺構面は、第1区の第4b層上面(標高約2.6m)及び第5層上面(標高約2.5m)において検出した。これらは、第4b層が谷状の微低地部に堆積した土層と考えられ、また第33・34次調査などの成果からみて、微高地部では同一面上で検出されている時期の遺構であるため、本調査ではともに第1遺構面として扱った。検出した遺構は、弥生時代中期の土坑2基(土坑2・3)及び溝4条(溝3・4・6・7)、古墳時代の溝1条(溝2)、奈良時代の溝1条(溝1)などである。このなかで特筆すべきものとして、ともに「L」字状に屈曲する特徴をもつ溝3・4がある。溝3は、第1区北端から直に

南にのび、中央付近ではほぼ直角に西に折れ曲がる。溝の幅は、0.6～1.1m、深さ10～20cmで、その流路方向は底面の比高差からみて、西から東、そして北へ向かう。また溝4は幅0.8～1.0m、深さ20cm前後の規模をもつ。その流路方向は底面の比高差からみて西から東とみられる。この状況から、溝3・4はその方向性や流路方向など共通する要素が多いことと、地形にそった溝6などの流路方向に逆行することなどから、耕作に関する用水路



第1遺構面 遺構全体平面図

の可能性が高いと考えられる。

第2遺構面は、第1区の第7層上面（標高2.2 m前後）において検出したもので、弥生時代中期初頭の溝1条（溝8）やピットなどを検出した。

溝8は第1区南半部において検出した溝で、検出長は約18 mである。この溝の深さは、北端部では25 cm前後であるが、調査区北壁から3.5 mの地点で急に深くなり80 cm前後となる。その方向性は、やや西側に弧を描くN-19°-Eであり、その流路方向は底面の比高差からみて、北から南と考えられる。溝の覆土は4～6単位に分けられ、上位層が黄褐色系のシルト混粘土であり、下層ほど灰色と粘性が強くなる。この溝から出土した遺物は、他のものと比べると希薄であったが、覆土内の第4層から紀伊第Ⅱ様式併行期の直口壺が横位で、また最下層の第6層から木製の鋤がともにほぼ完形の状態で出土した。木製鋤の検出状況からみて、溝にそった方向の最深部に意図的に沈めているようにみられた。

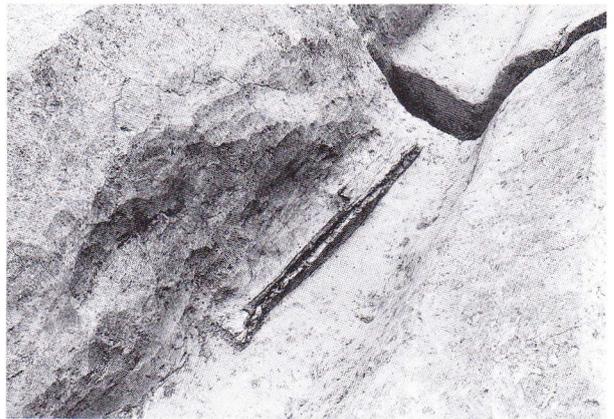
遺物は、遺物収納コンテナ5箱分が出土した。遺物には、弥生時代前期から中期の土器をはじめ、土師器、須恵器、中世土師器、瓦器、瓦質土器、輸入陶磁器、国産陶磁器、石器や木製品などがある。

溝8から出土した弥生土器直口壺は、口径15.8 cm、器高48.5 cm、底径7.0 cmを測り、体部中位に最大径（30.5 cm）をもつものである。肩部から頸部にかけては、条線10本を一単位とするクシ描直線文が合計11条施され、口縁部にも同じ単位のクシ描波状文が2条施されている。外面の調整は、全面にタテ方向のハケを施した後、体部中位から下半部はヘラミガキが、上半部はナデ消しが行われている。また内面は全体にナデ調整が行われている。胎土には1～5 mm程度の結晶片岩を含む。

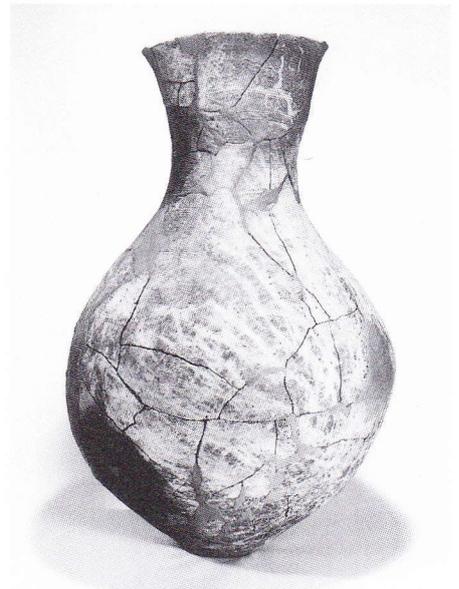
同じく溝8から出土した木製鋤は、身と柄を一木から作りだす一木平鋤と呼ばれるもので、中央に逆三角形の孔があいた把手をもつものである。この鋤の各部位の法量は、全長135.8 cm、刃部長53.4 cm、把手長15.2 cm、残存身幅11.6 cm、復元身幅18.0 cm、把手幅9.8 cm、柄径3.6 cmである。



第1区 第2遺構面全景（北から）



溝8 木製鋤出土状況（北東から）



溝8出土 弥生土器壺

観察できる加工痕跡は、身部と肩部にそれぞれちょうな痕がみられる。また樹種鑑定の結果、木製鋤の樹種がアカガシ亜属に属するものであることが判明した。

まとめ

まず弥生時代の状況は、第1遺構面で検出した溝3及び溝4が、第33・34次調査で検出した溝とほぼ同時期とみられ、その流路方向も類似することから、これらの水の引先となる自然河道が当調査地のさらに西側に位置するものと考えられる。第2遺構面では、前期環濠の埋没時期と溝8が同時期に比定でき、環濠の延長部が全く検出されなかったことから、当地が前期環濠の外側にあたるものとみられ、環濠の延長部は当地よりも東側に位置するものと推定できる。また溝8は、出土した遺物から中期初頭に掘削されたものとみられ、底面から出土した木製鋤から近辺が水田等の生産域であることを示唆するものといえよう。当遺跡での木製農耕具は、第26次調査の前期環濠底面から出土した木製広鋤が唯一の出土例であったが、若干後出土するものの今回の木製鋤が2例目の木製農耕具として重要視される。

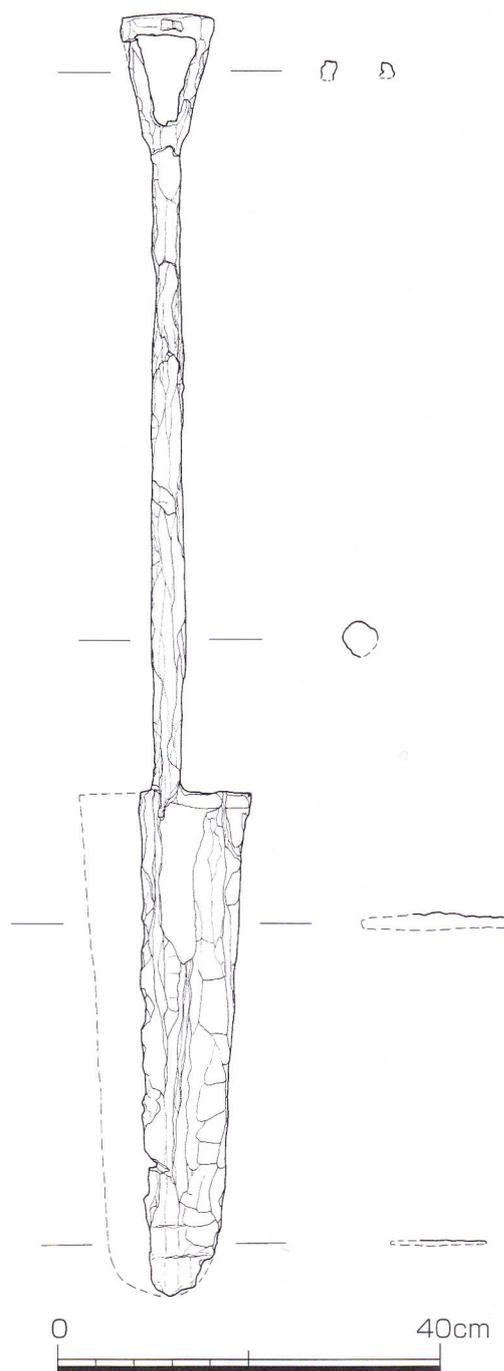
次に、古墳時代では弥生時代の溝3・4の一部を踏襲する位置に掘削された溝2がある。この時期の遺構は南東部にあたる遺跡中心部においては検出されているが、隣接地の調査ではこの時期の明確な遺構は検出されていない。また西側450mに位置する友田町遺跡では古墳時代前期から後期にかけての集落の一部が検出されている。これらのことから、今後双方の遺跡の状況を検証しながら集落の実態を解明していく必要がある。

奈良時代の溝1は、第33・34次調査で検出した溝の延長部にあたる。この調査では、過去の調査成果を勘案して奈良時代における遺跡の中心部が南東方向にあたり、この溝が太田・黒田遺跡における奈良時代の集落（郡衙？）北西側縁辺部に掘削された遺構として位置づけられている。

（井馬好英）

【参考文献】

『太田・黒田遺跡 第47次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団 2001年



遺物実測図

10. ^{しせきわ かやまじょう} 史跡和歌山城 第23次調査

調査地 和歌山市一番丁3

調査面積 80 m²

位置と環境

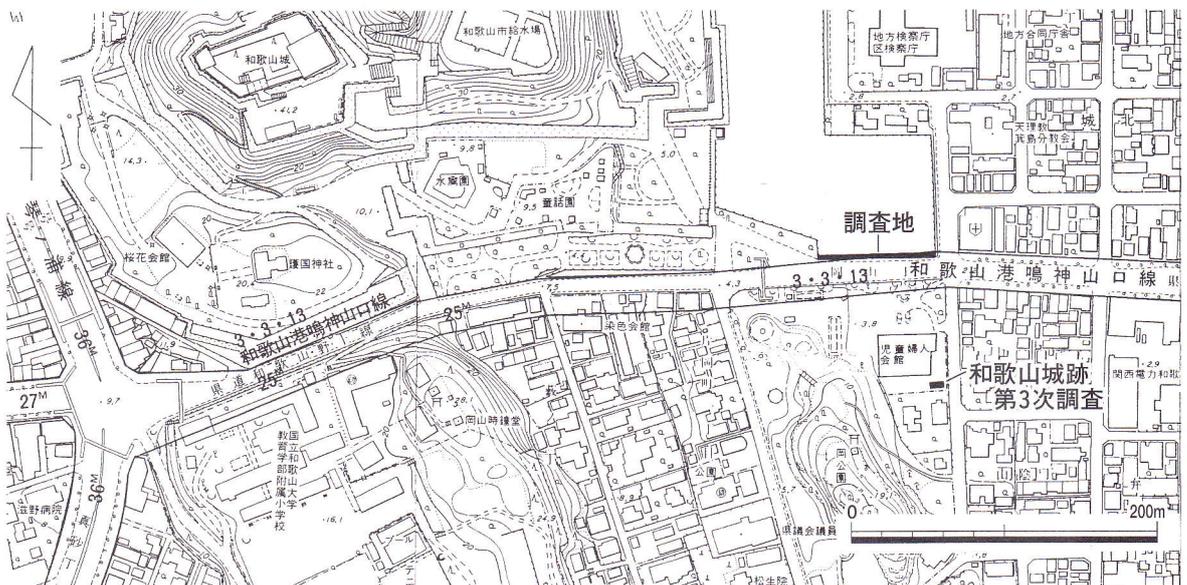
史跡和歌山城は、紀ノ川流域南岸平野部のほぼ中央に位置する平山城で、御三家の一つ紀州徳川家の居城としても知られている。今回の調査は東堀南側における石垣改修工事に伴う事前確認調査として行われたものである。調査対象の北面石垣は東西長約75 m、高さ約2.6 mを測る部分で、石材には結晶片岩の割石を用いるものであった。調査は石垣上面と断面調査を行い、石垣断面の調査については西側に続く東面石垣も含めて実施した。

調査内容

本石垣は東堀南端部に位置する北面石垣で、結晶片岩の割石を用いた野面積みの石垣である。基底部に近い部分の石垣勾配は69～72度を測り、平均約70度である。石垣の上部約1/2程度は全体的に積み直しが行われており、同じ結晶片岩でも石材が小型になっている。石垣石材の大きさは上部が幅10～20 cm、下部が幅40～60 cmを測る。この積み直しの状況は石垣の勾配にも表れており、積み直し部分の角度は70～80度となる。周辺の石垣との関係は東端及び西端の隅角部で石材が交互に積み込まれていることから、構築・改修は一連の作業で行われたとみられる。

石垣上面の調査では、石垣天端から内側へ1.2～1.5 mの範囲で裏込石（第3層）を検出した。石材には長さ10 cm程度の結晶片岩を用いている。遺構については、樹木による攪乱の影響が大きく、確認することができなかった。

石垣解体時に行った断面調査では、裏込石はその大きさや埋土の土質から大きく2つの単位に分けられた。これは石垣の表面観察による積み直しの痕跡とほぼ一致する。上部裏込（第3層）は石垣積み直しに伴うもので、長さ10 cm程度の結晶片岩と岩盤片を用いている。石垣下部の裏込石材は長さ10～30 cmとやや大きめの結晶片岩である。また基底部については、黒褐色の粘土の上に基



調査位置図

底石が据えられている状況であった。粘土と基底石の間には石材を安定させるための結晶片岩の小片がみられるのみで、胴木や捨石等は確認できなかった。石垣背面の地形や裏込石の厚さ（奥行き）については、調査範囲の制約等により確認することができなかった。裏込内からの出土遺物には、肥前系磁器と寛永通寶が1点ずつ出土している。

東面石垣については、南北長約11m、水面からの高さ約2mを測るもので、結晶片岩割石の野面積み、北端隅角部は算木積みで構築されている。上部2～3段は石材がやや小振りで改修が行われたとみられ、北面石垣との隅角部は石材が一部組み合っている。裏込の厚さは約70cmで長さ5～20cmの結晶片岩を裏込石として使用している。

まとめ

石垣基底部では胴木や捨石層はみられず、基底石は粘土層の上に据えられている状況であった。この粘土層と基底石の間では石材を安定させるための結晶片岩の小片を確認している。

北面石垣下部について、この石垣の下部裏込からは肥前系磁器が1点出土しているが、混入の可能性があるため年代の根拠とすることはできず、今回の調査では出土遺物から石垣の構築年代を明らかにすることはできなかった。

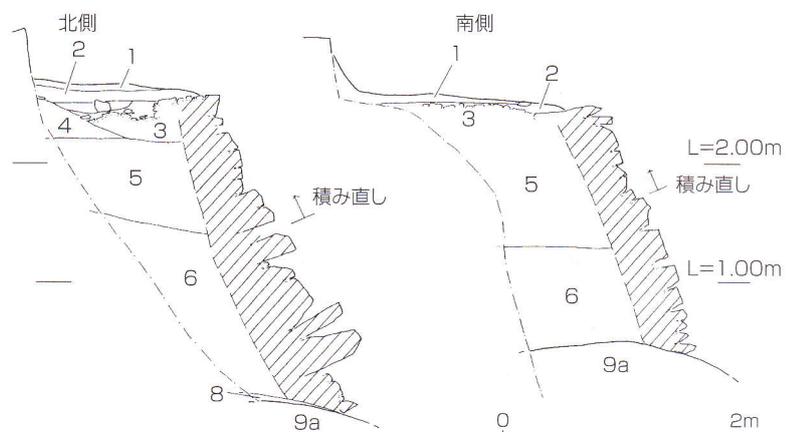
次に北面石垣及び東面石垣の上部積み直しについて、石材の構築状況から改修は一連のものとして同時期に行われたと推定できる。東面石垣断面からは3点の肥前系陶磁器などが出土しており、その年代は17世紀代から18世紀前半の間で収まる。北面石垣からは古寛永通寶が1点出土しているが、その鑄造年代は寛永13（1636）年から明暦2（1656）年頃までとされており、陶磁器の年代と矛盾しない。以上のことから北面・東面石垣は少なくとも18世紀後半までには改修が行われたと考えられる。（高橋方紀）



調査区全景（北西から）



石垣断面状況（西から）



- | | |
|--|--|
| 1 10YR3/2 (黒褐) 細砂 (直径1~5cmの隙を含む) | 6 (石垣下部裏込) N5/ (灰) 粘土 (長さ10~30cm大の結晶片岩を密に含む) |
| 2 10YR5/4 (にぶい黄褐) 細砂 | 8 (基底部堆積土) 10GY4/1 (暗緑灰) 粗砂 |
| 3 2.5Y4/3 (オリーブ褐) 細砂 (長さ10cm程度の結晶片岩及び岩盤片を含む) | 9a (基底部堆積土) 2.5Y3/2 (黒褐) 粘土 |
| 4 2.5Y5/4 (黄褐) 細砂 | |
| 5 (石垣上部裏込) 2.5Y4/2 (暗灰黄) 細砂 (長さ5~20cmの結晶片岩を密に含む) | |

石垣断面図

【平成13年度（2001年度）】

11. ^{おおだ}太田・^{くろだ いせき}黒田遺跡 第48次調査

調査地 和歌山市黒田113-1・2

調査面積 300 m²

位置と環境

太田・黒田遺跡は県内でも最大規模の弥生時代集落として知られているほか、室町時代の大坂本願寺門徒集団である雑賀衆の一派、太田党の居館といわれる太田城跡の範囲にも重なり、弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡として周知されている。今回の調査は、集合住宅建設に先立つもので、調査地は太田・黒田遺跡の範囲でも北西端部に位置する。

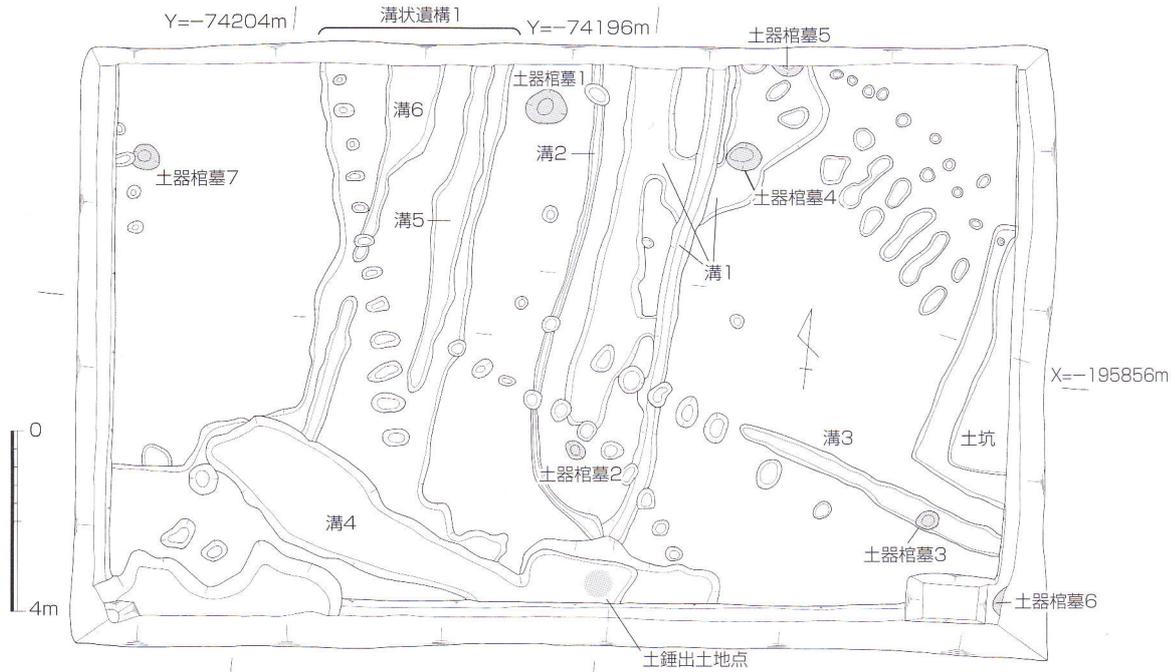
調査内容

調査区は建物の基礎部分を中心に、東西21.5m、南北14mの約300m²の長方形の調査区を設定した。地表面の標高は約3.3mを測る。地表以下の現代の整地土は約60cmの厚みを持ち、その下に4層の堆積がみられる。第4層は弥生土器、古墳・奈良時代の須恵器を包含している。

遺構は標高2.1～2.2mの第5層上面において検出したもので、弥生時代の土器棺墓7基・溝8条・土坑1基・ピット62基、奈良時代の溝状遺構1条がある。遺構出土の遺物が全体的に希薄であるが、弥生時代の遺構は土器棺墓も含め、すべて中期の範疇で収まるものと考えられる。合計7基の土器棺墓は第Ⅲ様式のものを中心であるが、時期的に古い様相を示す土器棺墓6は第Ⅱ様式新段階～第Ⅲ様式古段階に、新しい様相を示す土器棺墓7は第Ⅳ様式に比定できる。南北に走る溝8は溝状遺構1の下で確認したもので、溝4より先行するものである。溝1・2・5～7は南流して溝4に注ぐ溝で、溝4からは刺網に用いられた可能性がある管状土錘91点や叩石と共に弥生時代中期の壺底部が出土している。また土坑は出土遺物から第Ⅳ様式と考えられる。ピット群は先述の遺構よりも一段階新しいが、ピット内から弥生土器の小片が出土している。溝3は土器棺墓5以外の遺構とは重なりをもたないが、ピット群と類似する埋土をもつことや方向性から考えて時期的にはピット群と対応するものと考えられる。



調査位置図

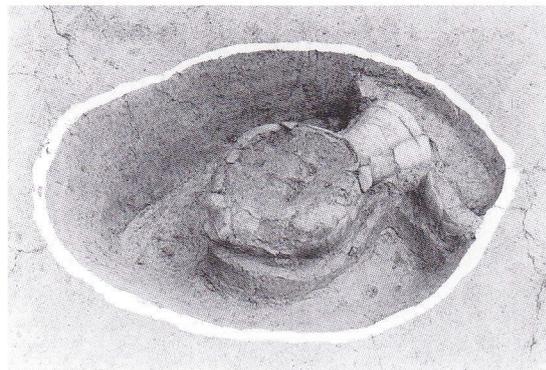


遺構全体平面図

まとめ

当該地の土地利用の様相としては、まず弥生時代前期の遺物は確認しておらず、土地利用が始まるのは弥生時代中期前葉から中葉の段階に土器棺墓群が出現してからである。その後溝8が掘削されるが、中期中葉から後葉段階では土器棺墓と併存していた時期があったと考えられる。この溝8埋没後には、溝1・2・4～7が掘削される。プラント・オパール分析の成果も勘案するならばこれらの溝は農耕に関するものと考えられ、本調査地は墓域的な性格であった場所が生産域へと土地利用が変化したものと推定できる。だが土器棺墓7と溝8が共に第IV様式であり、他の遺構も第IV様式の範疇であること、またプラント・オパールの検出量の些少さを勘案すると、農耕が行われたとしても第IV様式の中の比較的短期間であった可能性が高い。

溝より1段階新しいピット群については、特殊な方向性を持っており、その性格も判然としない。ピット群に続く時期の遺構は確認できず、奈良時代に埋没する溝状遺構1まで断絶がみられる。溝状遺構1はその埋土から馬歯が数点出土しており、祭祀等の関連が考えられるが、遺構の形状は不明瞭でその性格も判然としない。だが、遺物も稀薄であることから当該時期においても調査地は集落の縁辺部であったと考えられる。
(高橋方紀)



土器棺墓4 (南から)



土錘出土状況 (西から)

12. 太田・黒田遺跡 第49次調査

調査地 和歌山市太田（第1地区15街区2-2）地内

調査面積 100 m²

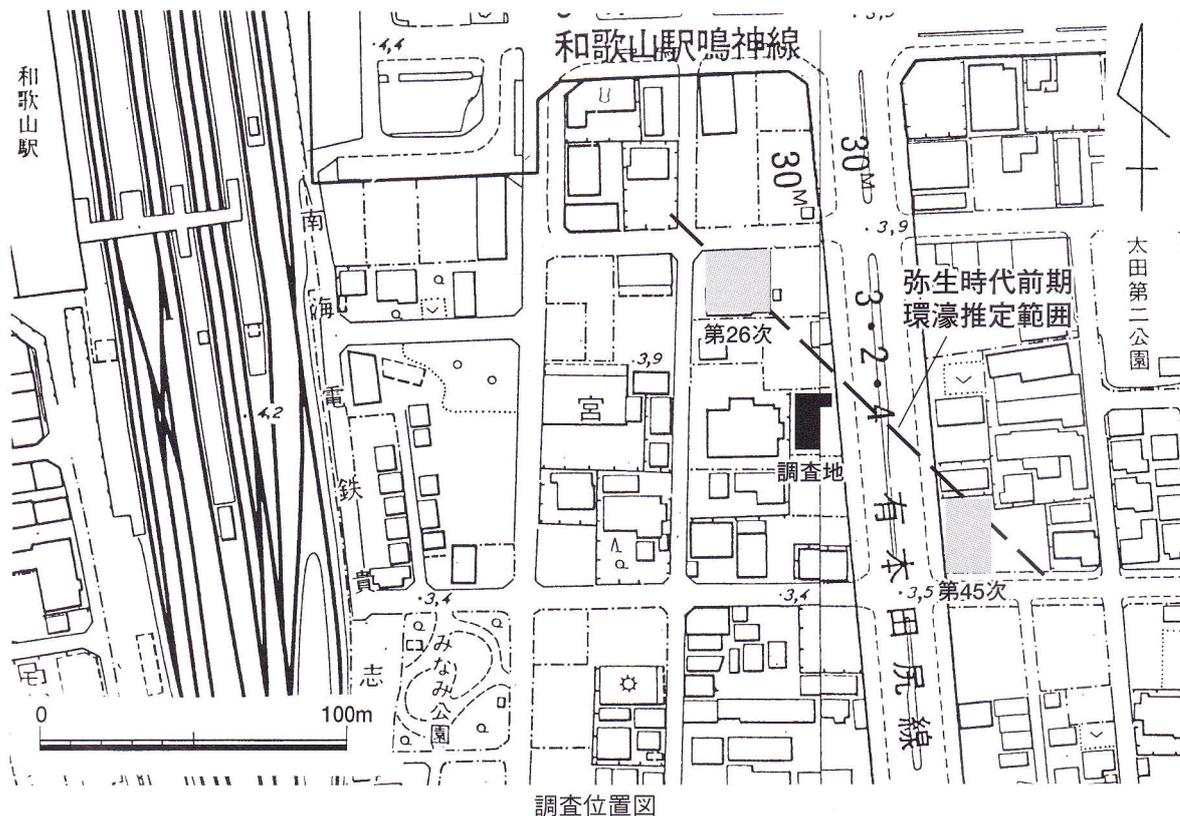
位置と環境

太田・黒田遺跡は、弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。特に、弥生時代前期から中期にかけての県内最大規模の集落として知られ、竪穴住居・井戸などの集落域やこれらの周囲をめぐる2条の環濠、水田などの生産域に関わる遺構、土坑墓・土器棺などの埋葬施設が確認されている。また、鹿を描いた絵画土器を含む多量の弥生土器などの他、直柄広鋏や鋤などの木器、石製舌を伴った銅鐸などの重要な遺物が出土している。歴史時代では、大型の井戸が2基検出され、7世紀前半の井戸からは斎串などが、8世紀後半の井戸からも和同開珎42枚、万年通寶4枚などがまとめて出土しており、井戸祭祀に関わるものとして注目されている。また、雑賀衆の太田城跡に関わるものと推定される16世紀後半に埋没した大規模な濠状遺構なども確認されている。

調査内容

本調査地の北西側（第26次調査）と南東側（第45次調査）において弥生時代前期の環濠が検出されており、調査対象地が環濠の延長上に位置するものと推測された。このため、調査区の北側に第1区として東西長約7.5 m、南北幅約3 m、西側に第2区として南北長約14.5 m、東西幅約6 mの調査区をL字状に設けた。

土層堆積状況は、現地表面である現代の整地土が約50～70 cm、その下の堆積は旧耕土である第1層（10YR4/2（灰黄褐）粗砂混シルト）が約20 cm、その床土に相当するとみられる第2層



調査位置図

(2.5 Y 3 / 2 (黄褐) 粗砂混シルト) が約 10 cm 堆積する。さらに第 3 層 (2.5 Y 5 / 3 (黄褐) 粗砂混シルト) が約 70 cm、第 4 層 (2.5 Y 5 / 2 (暗黄褐) 粗砂混シルト) が約 12 cm、第 5 層 (10 YR 4 / 1 (褐灰) シルト) は約 25 cm の厚さで堆積する。以上の堆積はいずれも南側が北側より標高が約 10 cm 高く堆積している。また、第 6 層 (2.5 Y 4 / 2 (暗灰黄) シルト混粗砂) は約 70 cm、第 7 層 (2.5 Y 4 / 3 (オリーブ褐) シルト混粗砂) は約 10 cm 以上の堆積である。これらの堆積はほぼ水平堆積である。



第 2 区 第 1 遺構面全景 (東から)

遺構面は第 3 層・第 4 層・第 6 層上面の 3 面あり、それぞれ古墳時代中期から江戸時代、弥生時代前期から中期初頭、弥生時代前期のものとみられる。第 3 層は出土遺物から古墳時代中期以前の包含層であり、第 4 層から第 7 層は遺物の出土がみられなかった。

遺構について、第 3 層上面の古墳時代中期から江戸時代の遺構面では、古墳時代の溝 1 条、土坑 1 基、ピット 22 基、江戸時代後期の粘土採掘坑 2 基などを検出した。第 4 層上面の遺構面では、弥生時代前期から中期初頭の焼土坑を 1 基検出した。第 6 層上面の遺構面では、弥生時代前期のものとみられる落ち込み状遺構を検出した。

まとめ

今回の調査に当たり、周辺の調査成果から弥生時代前期環濠の延長部分に相当する可能性が考えられたが、結果として検出するには至らなかった。このことから、第 26・45 次調査において確認された弥生時代前期の環濠は、本調査地外の北東側に掘削された可能性がある。

太田・黒田遺跡の古墳時代の遺構については、遺跡中心部に当たる第 46 次調査において、古墳時代前期の住居跡が 1 棟初めて確認され、第 46 次調査地の南側に隣接する第 50 次調査では 2 棟、遺跡北部に当たる第 51 次調査でも 2 棟検出されている。

今回の調査において、土師器・須恵器などの古墳時代中期から後期にかけての遺物がまとまって出土した。これらの遺物は、当該期の遺構から出土したものではなく、江戸時代の大規模な粘土掘削坑から出土したものである。当遺跡において、古墳時代中期から後期にかけての集落等の様相は不明であるが、これらの出土遺物はこの空白期を考える上で重要な資料といえ、調査地周辺にも当該期の遺構群が展開していたものと考えられる。

以上、今回の調査において弥生時代前期の環濠が本調査地を通らないこと、古墳時代中期から後期にかけての遺構群が周辺に存在した可能性を指摘できたこと、江戸時代後期の粘土採掘坑が周辺に展開していることなどの重要な成果を明らかにすることができた。(奥村 薫)

【参考文献】

『太田・黒田遺跡第 49 次発掘調査概報』(財)和歌山市文化体育振興事業団 2002 年

13. 有功遺跡 第3次調査

調査地 和歌山市園部 1453 番地

調査面積 240 m²

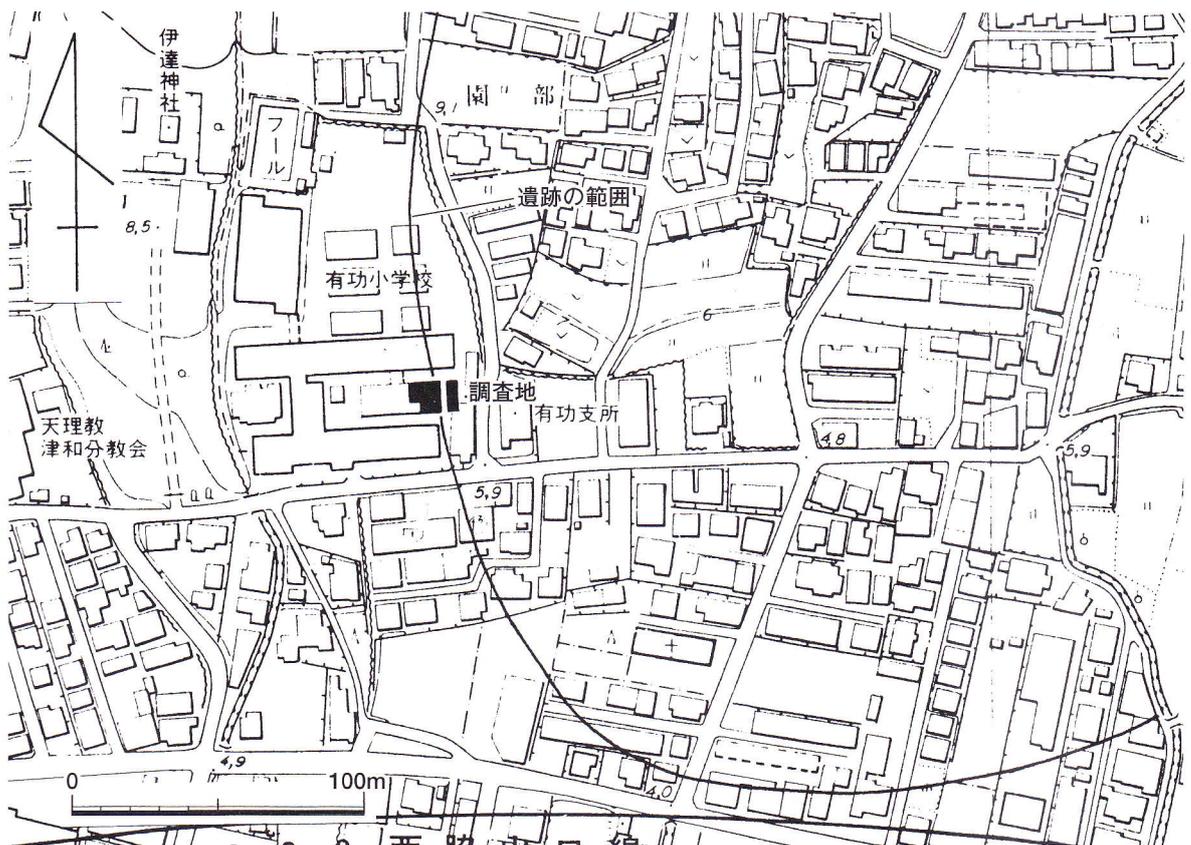
位置と環境

有功遺跡は、紀ノ川河口から約6 km遡った北岸に位置し、標高約5 mの河岸段丘上に立地する。遺跡の範囲は、和歌山市立有功小学校を西端として、南海道と推定されている県道粉川・加太線を南端とした東西300 m、南北500 mの範囲に広がるものである。有功遺跡のある園部周辺は、紀ノ川の流れが北に大きく蛇行する地域にあたり、紀ノ川北岸で最も平野部の狭い地域と言える。

周辺の遺跡を概観すると、古墳時代のものとしては家形甕を含む5個の陶質土器が出土した大同寺遺跡、また大規模倉庫群が検出された鳴滝遺跡がある。さらに奈良・平安時代では、大同寺の北、標高約50 mの丘陵上に、銅製蔵骨器とそれを納めた石櫃が出土した大同寺墳墓が立地する。よって有功遺跡周辺は、古墳時代には外来文化の窓口として、また奈良・平安時代には寺院関係の遺跡がみられる重要な地域と言える。

調査内容

調査は、有功小学校中庭において第1・2区の2ヶ所に調査区を設け行った。調査地の基本層序については、近現代の水田耕土（第1層）と床土（第2層）が調査区の全面においてみられ、江戸時代の耕作土と考えられる第3層が第1区と第2区の南半のみに堆積する。第4層は、調査区の全



調査位置図

面において粗砂混礫と黄褐色の細砂が互層に堆積するもので、出土遺物から江戸時代以降に洪水もしくは河川の流水によって堆積したものと考えられる。第4層以下は、鎌倉時代以降の河川氾濫による第5層、平安時代から鎌倉時代の河川氾濫による第6層が堆積する。また第6層下は、第2区南半では第7層が、第1区南東隅・第2区北東隅においては平安時代の堆積と考えられる第8層が堆積する。

以上が河川内の堆積とみられるものであり、第8層下には第1区北東隅において第9・10層を確認した。この第10層は、初期須恵器・黒色土器などを含む黒褐色の粘土で、北東から南西に傾斜することから、北東に存在する丘陵地から調査地方向に流れ込んできた遺物包含層と理解した。

遺構検出面は、第1・2区ともに第6層上面であり東から西に傾斜する。標高は第1区で4.6～4.8 m、第2区では約4.2 mを測る。遺構については、第1区では鎌倉時代の土坑状遺構を2基、第2区では平安時代以降のものと考えられる溝、鎌倉時代以降のものと考えられる自然流路をそれぞれ1条検出した。

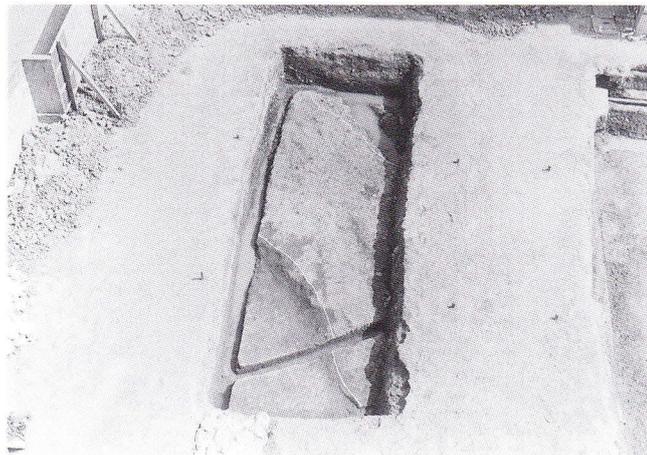
まとめ

今回の調査地は、有功遺跡の西端にあたる部分である。調査の結果、遺物包含層は砂と礫が互層に堆積する河川内の堆積である状況を確認した。よって有功遺跡の西端部は谷状地形であり、遺跡の中心は調査地の北東部と考えられる。また第2区の北壁面の観察において、第8層下から噴出する地震による液状化現象を確認した。この液状化現象は、土層観察から鎌倉時代以降、江戸時代までの間で起こった地震に対応するものと考えられる。出土遺物では、古墳時代のものとして初期須恵器の杯蓋と埴輪がそれぞれ1点ずつ出土した。これらは、調査地の上流に古墳の存在を示唆する遺物として注目される。今回の調査によって、遺跡の西端部の状況が確認されたことは大きな成果であったと考えられる。

(藤藪勝則)

【参考文献】

『有功遺跡 第3次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団 2002年



第1区 全景（北から）



第2区 全景（南から）

14. 旧中筋家住宅 第2次調査

きゅうなかつじけじゅうたく

調査地 和歌山市禰宜148番地

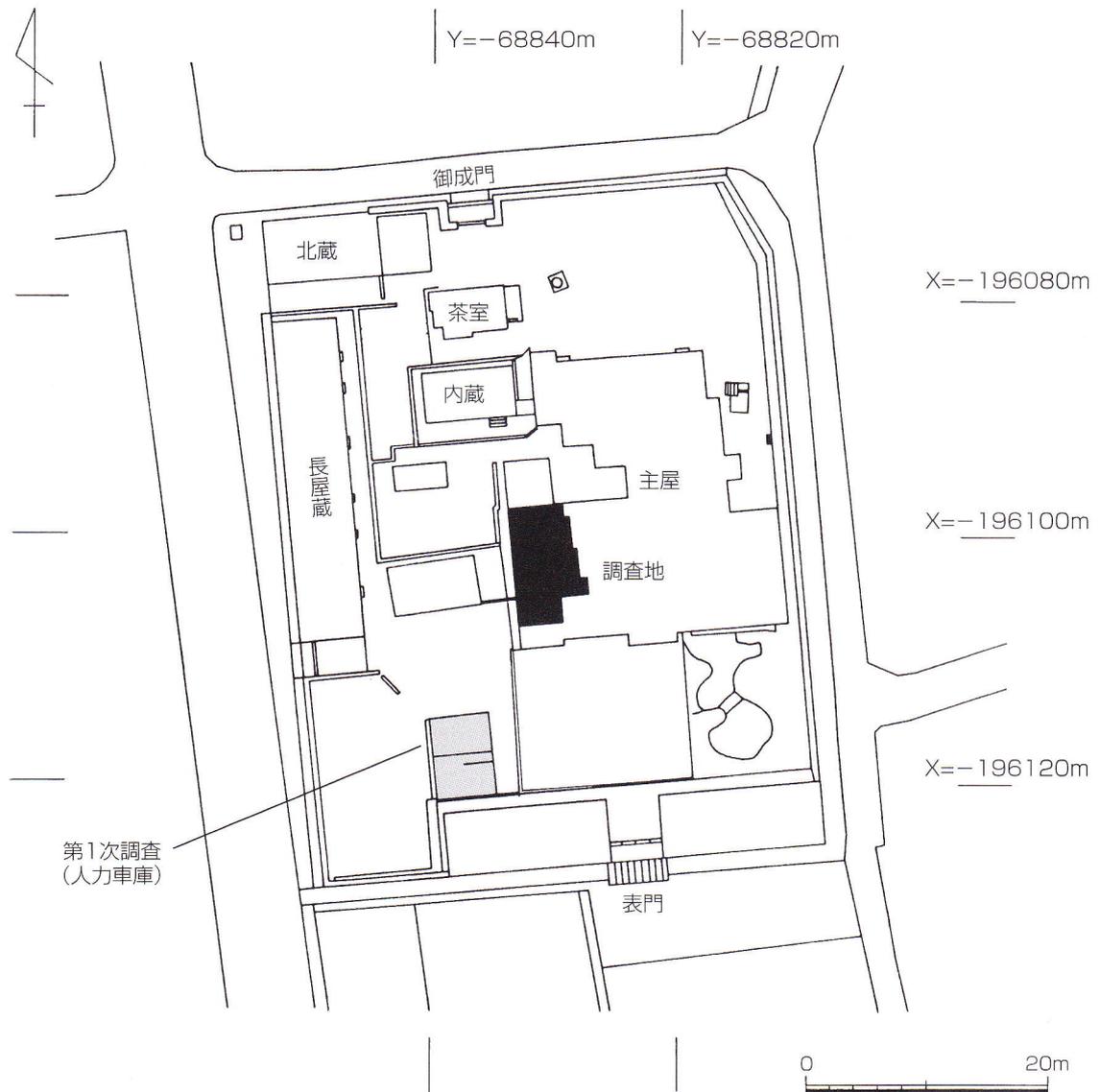
調査面積 50 m²

位置と環境

旧中筋家住宅は、国の重要文化財に指定されている建造物で、紀ノ川の南岸、岩橋山塊から北方に延びる丘陵裾部に立地する。中筋家は江戸時代には和佐組の大庄屋であり、現主屋の創建年代は紀年銘のある鬼瓦から嘉永5年（1852）頃と推定される。既往の調査としては、2000年に人力車庫を対象に第1次調査が行われ、家畜小屋として使用されていたことが明らかとなっている。

調査内容

今回の調査は解体修理に伴い、主屋土間部を調査対象とし、竈遺構の確認を主目的として実施したものである。調査区の基本層序は、現土間面下に、旧土間面のタタキ（第1・2層）、その下面に



調査位置図

現主屋構築時の整地土（第4～6層）を確認した。第4～6層は礎石及び根石の構築と併行するものである。

遺構は、土間北側で竈（竈1）及び南側で貯蔵穴、壇状遺構、柱根状遺構を確認した。竈1は東側部分において赤変部を東西方向に直線的に確認し、その周囲の床面が硬化していることから、この部分を一つの燃焼部と判断した。燃焼部は内径約80cmを測り、東側に焚口部を設けたものと考えられる。断ち割り調査の結果、竈は主屋構築時の整地土である第4層上面に盛土を行い、周囲の土間面よりも高く盛り上げた構造で、竈本体の構築に際して燃焼部を若干掘り窪め、上部を構築したものと考えられる。また赤変部や漆喰・焼土列とタタキとの対応関係から、竈は少なくとも2回以上の作り替えを行った可能性がある。

貯蔵穴1は土間南西部で検出したもので、遺構の最上部には板石が据えられており、断ち割り調査の結果、この板石の下部には拳大の円礫が密集し、さらにその下部に石組が構築されている状況を確認した。石組は約50cm遺存し、北側に面をもつ構造である。石組を境として堆積土が異なることから、仕切りの役割をもつものと考えられる。また、貯蔵穴の埋没年代は、埋土中に煉瓦・ガラスを含むことから近代以降と考えられる。

遺物は土間タタキ・整地土、貯蔵穴等において、弥生時代から近代にわたる時期のものが出土した。現主屋構築時の整地土中には、17世紀後半から18世紀末頃に比定できる遺物の出土があった。

まとめ

主屋土間部分を調査対象地とした今回の調査では、竈遺構の確認が調査の主眼であったが、竈については土間北側の南北約4m、東西約3mの範囲に構築されていたと考えられ、僅かに残された赤変部から東に焚口をもつ燃焼部を確認することができた。竈は主屋構築時の整地及び礎石据え付けが完了した段階で、竈構築面を土間面より高くする目的で盛土を行い、上部に本体を構築する構造と考えられた。今回確認した東側に焚口を有する燃焼部は、断ち割り調査による土層堆積から主屋創建時の竈であると言える。竈上部の構造についての知見を得ることはできなかったが、燃焼部や焚口、炭や灰を掻き出す作業場を深く掘り下げた構造のものではなく、土間面より高く作り上げた通例の調理用竈と考えられ、東側で確認した燃焼部は個別に構築された複数の竈の内の一つか、複数の焚口部をもつ南北に長い大型の竈の一部であると考えられる。（川口修実）



竈1（東から）



貯蔵穴1（北から）

15. 太田・黒田遺跡 第50次調査

調査地 和歌山市太田 514 - 18 番地

調査面積 45 m²

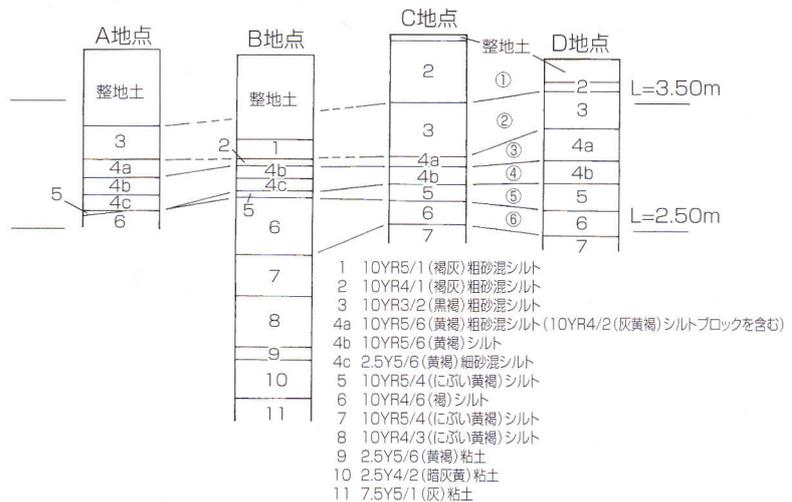
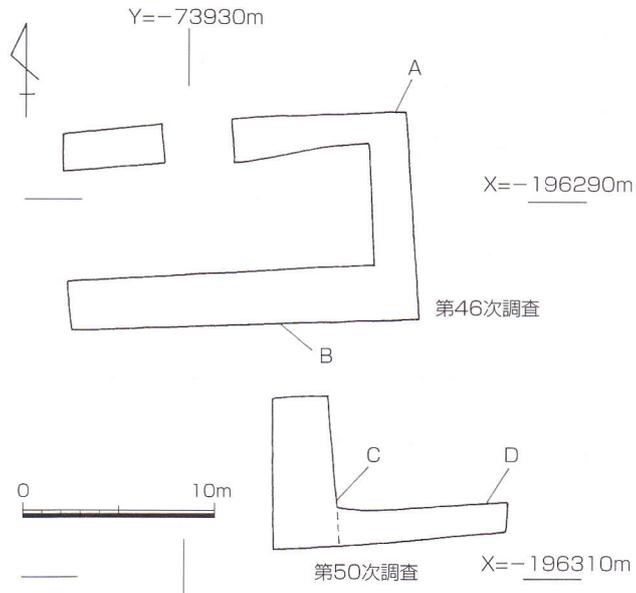
位置と環境

調査地は、太田・黒田遺跡の中央やや南側、太田城跡のほぼ中央部に位置し、昨年度調査を行い弥生時代前期の2条の環濠を検出した第45次調査地及び弥生時代中期初頭の竪穴住居を検出した第46次調査地の隣接地にあたる。当調査位置は、5. 太田・黒田遺跡第46次調査の調査位置図(P.14)に示した。

調査内容

調査区は、深掘される建物の基礎部分にあたる地点に「L」字状に設定し、北側に位置する東西幅3m、南北長8mの範囲を第1区、南北幅2m、東西長9mの範囲を第2区と定めた。

当調査地の基本層序は、南側隣接地の第46次調査に対応する。この土層の対応関係は右図に示した。第46次調査では第3層上面(室町~江戸時代)、第4a層上面(弥生時代中期~鎌倉時代)、第4b層上面(弥生時代中期初頭)、第6層上面(弥生時代前期末)において4面の遺構面が検出されている。今回の調査では、さらに第5層上面及び第7層上面において新たに遺構を検出し、先述の4面の遺構面を含め、6面の遺構面が存在することを明らかにした。新たに検出した遺構面の時期は、第5層上面(第4遺構面)が弥生時代中期の範疇におさまり、また第1区の東壁直下に設定したサブトレンチ内における第7層上面(第6遺構面)が、弥生時代前期の新段階古相にそれぞれ位置づけられ



調査地周辺の上層柱状模式図 (丸囲み数字は遺構面)

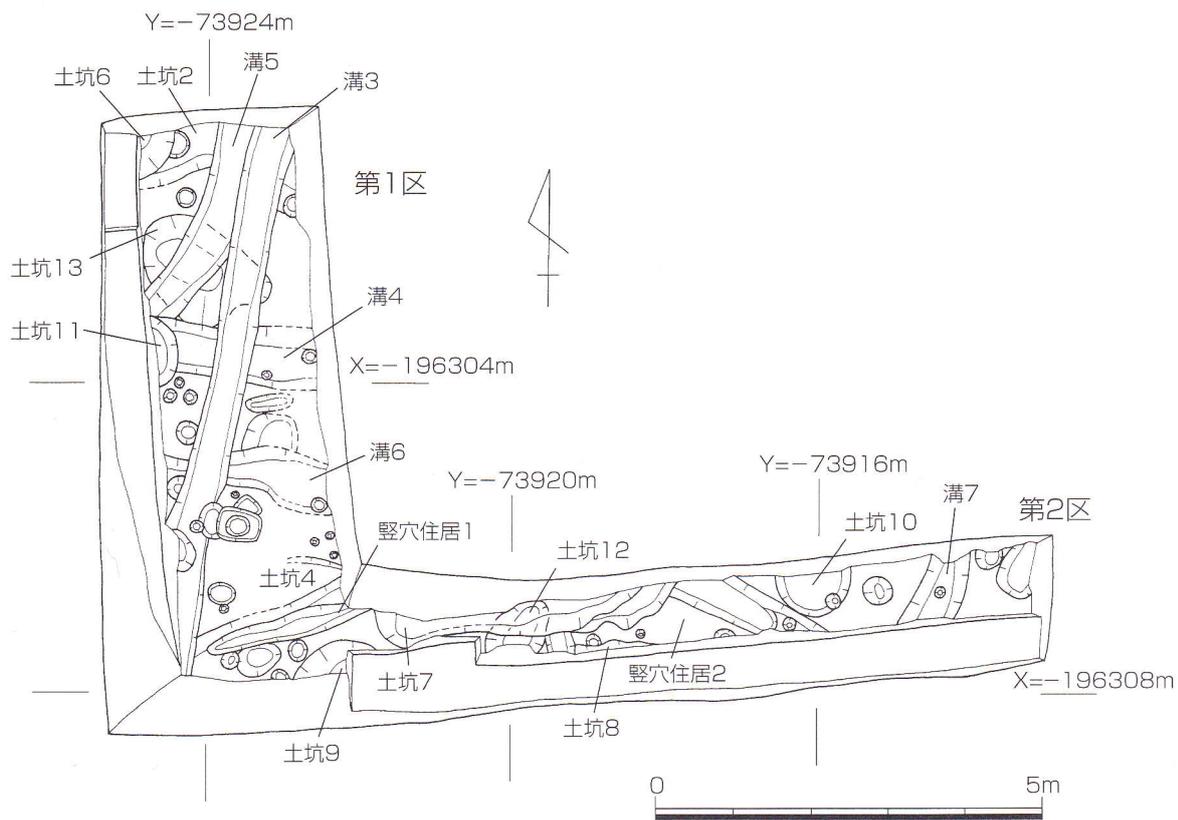
る。また第7層以下の状況は、今回の調査では確認できなかったが、近年の調査成果からみて第7層も遺物包含層である可能性が高いものとみられる。

第1遺構面は、第3層上面（標高約3.5m）において検出したもので、室町時代の溝2条及び江戸時代の土坑1基がある。室町時代の溝は、第46次調査時において検出していた延長部であり、N-14°-Eの方向性で直線的に20m以上続くものである。この溝からは、古墳時代の遺物混入とみられる須恵器イイダコ壺が出土した。

第2遺構面は、第4a層上面（標高3.1～3.3m）において検出したもので、今回の調査のなかでは最も多くの遺構を検出した遺構面にあたる。遺構は、弥生時代中期の土坑3基（土坑9・12・13）、古墳時代の竪穴住居2棟（竪穴住居1・2）、溝2条（溝5・7）、土坑6基（土坑2・4・6～8・10）、平安時代の溝1条（溝6）、鎌倉時代の溝2条（溝3・4）、土坑1基（土坑11）のほか、弥生時代中期から鎌倉時代にかけてのピットを多数検出した。このなかで、弥生時代の遺構では、土坑13がある。土坑13は、第1区北半部で検出した長径1.8m、短径1.2mの楕円形の土坑で、最深部では検出面からの深さが63cmである。遺物からみて紀伊第Ⅲ様式に併行する時期のものとみられ、一定量の壺や甕などの弥生土器が出土し



第1区 第1遺構面全景（南から）

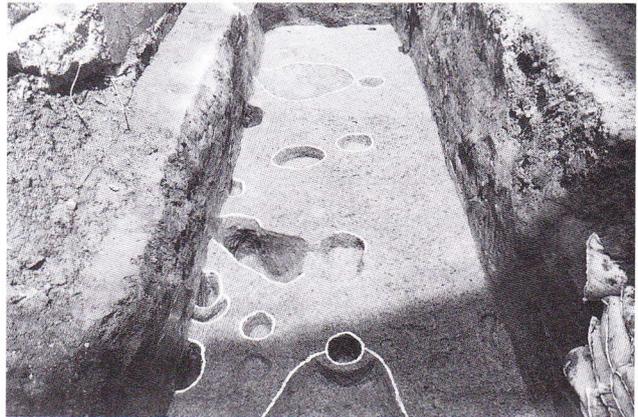


第2遺構面 遺構全体平面図

た。また古墳時代の遺構では、竪穴住居2棟がある。竪穴住居2は、第2区の中央部で検出したもので、調査区が狭小な範囲であったことと西側のほとんどの部分が後出する他の遺構と重複し、削平を受けていたため北壁際の一部のみの検出となった。この検出した壁面及び壁溝が直線的であるので、方形もしくは隅円方形のプランをもつ住居と考えられる。床面までの深さは約15 cm、壁溝の幅約50 cm、床面からの深さ約15 cmである。出土した遺物から、前期の範疇におさまるものとみられる。竪穴住居1は第1区南端部から第2区にかけて検出したもので、北及び東側の壁面と壁溝の一部を検出した。この住居は、東西長4.8 m以上、南北長2.2 m以上の方形の平面形をもつものと考えられ、出土した遺物から後期に比定できるものとみられる。



第1区 第3遺構面全景 (南から)



第1区 第5遺構面全景 (南から)

第3遺構面は、第4b層上面（標高約3.0 m）において検出したものである。遺構は、

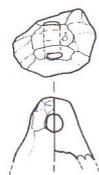
弥生時代中期前半の土坑7基とピットを多数検出した。土坑のなかには覆土内に多量の炭が含まれているものがあり、炉の可能性が考えられる遺構として注目できる。

第4遺構面の遺構は、第5層上面（標高約2.9 m）で検出したもので、第2区の西端の一部のみにおいて弥生時代中期初頭とみられるピット2基を検出した。

第5遺構面は、第6層上面（標高2.7 m前後）において検出したものである。遺構は、弥生時代前期後半の土坑2基とピットを多数検出した。このなかで、第1区において検出した土坑2基には多条のヘラ描直線文をもつ紀伊第I様式新段階に併行する弥生土器が一定量出土した。またピット内から同時期に併行する土器とともに石庖丁が1点出土した。

第6遺構面は、第1区の東壁直下において設定したサブトレンチ内の第7層上面（標高約2.5 m）において検出したものである。検出した遺構は、弥生時代前期後半の土坑1基である。

遺物は、遺物収納コンテナ約14箱分が出土した。これら遺物の内容は、弥生時代前期から中期にかけての土器をはじめ、土師器、須恵器、黒色土器、中世土師器、瓦器、瓦質土器、輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦、石器、石製品などがある。特筆されるものに第1区第1遺構面の溝から出土した古墳時代の遺物混入と考えられる須恵器イイダコ壺や碧玉製の管玉がある。須恵器イイダコ壺は、残存高3.4 cm、残存幅4.2 cmの破片で、全形は不明であるが、鐸状をなすものと考えられる。把手部には、直径9～10 mmの円孔が穿たれている。この土器は、主として大阪湾沿岸域で出土するもので、和歌山県内での出土例



遺物実測図

は極めて少なく、和歌山市内では海浜集落である西庄遺跡と関戸遺跡で各1点の2点のみが知られている。

まとめ

今回の調査成果のひとつとしては、これまで確認されていた4面の遺構面のほか、新たに2面の遺構面を検出し、合計6面の遺構面の存在を明らかにしたことである。遺構面の時期としては、弥生時代に比定できるものとして、第6遺構面（第7層上面）が紀伊第Ⅰ様式の新段階古相、第5遺構面（第6層上面）が紀伊第Ⅰ様式の新段階新相、第4遺構面（第5層上面）が紀伊第Ⅱ様式 of 古段階、第3遺構面（第4b層上面）が紀伊第Ⅱ様式の新段階、第2遺構面（第4a層上面）が紀伊第Ⅲ様式 of 古段階以降にそれぞれ位置づけられる。また第2遺構面では、弥生時代中期から鎌倉時代までの遺構を検出し、第1遺構面（第3層上面）では室町時代から江戸時代までの遺構をそれぞれ検出した。さらに、第7層においても遺物が含まれている点からみて、紀伊第Ⅰ様式 of 新段階古相以前の遺構面は第7層より下層に存在する可能性があり、今回の調査ではその状況を確認するところまでには至っていない。

遺構からみた成果では、まず弥生時代前期の遺構を検出したことである。今回の調査地は、環濠推定位置から10m程度の環濠に隣接する調査区であったが、前期環濠に対応する第5遺構面においてピットや土坑を検出した。北側隣接地の第46次調査地でも部分的な下層調査であったが土坑2基を検出しており、これらの環濠集落内部ではかなりの密度で遺構が検出されるものと推測できる。

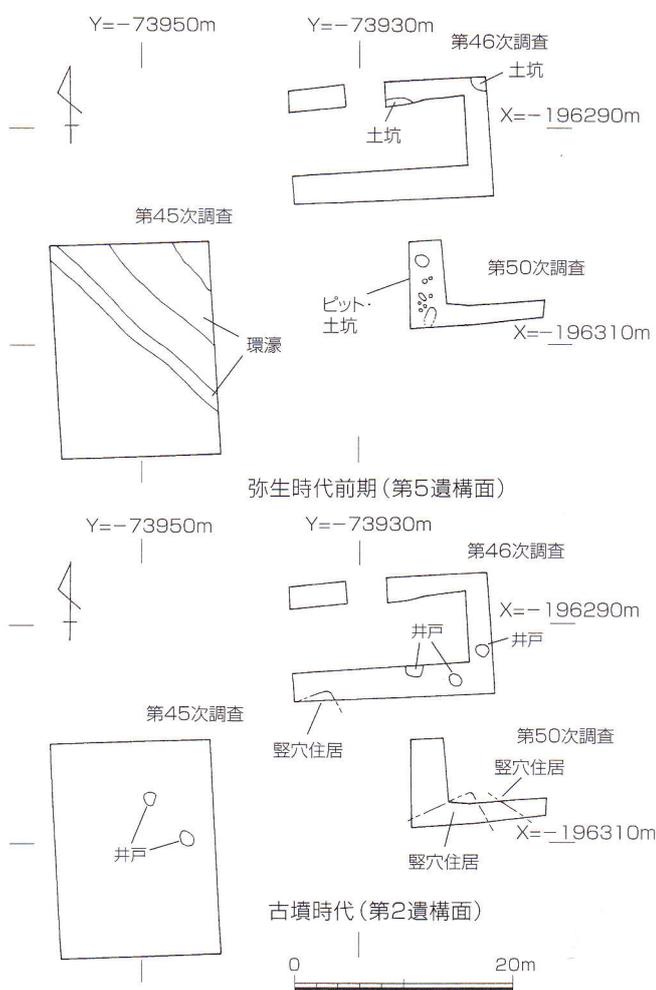
古墳時代の遺構では、竪穴住居を2棟検出し、第46次調査で検出した1棟とともに、合計3例目にあたる。竪穴住居以外に多数検出されている井戸は、第45次調査で2基、第46次調査で3基検出されている。さらに、今回の調査では中期の溝5や土坑2、後期の土坑7などを検出し、直上の遺物包含層（第3層）から出土した多量の遺物などからも当地周辺が古墳時代集落の中心部分の一角であるものと考えられる。

(井馬好英)

【参考文献】

『和歌山市内遺跡発掘調査概報』

—平成13年度—和歌山市教育委員会 2003年



周辺の主要遺構配置図 (第2・5遺構面)

16. 太田・黒田遺跡 第51次調査

調査地 和歌山市黒田160-2地内

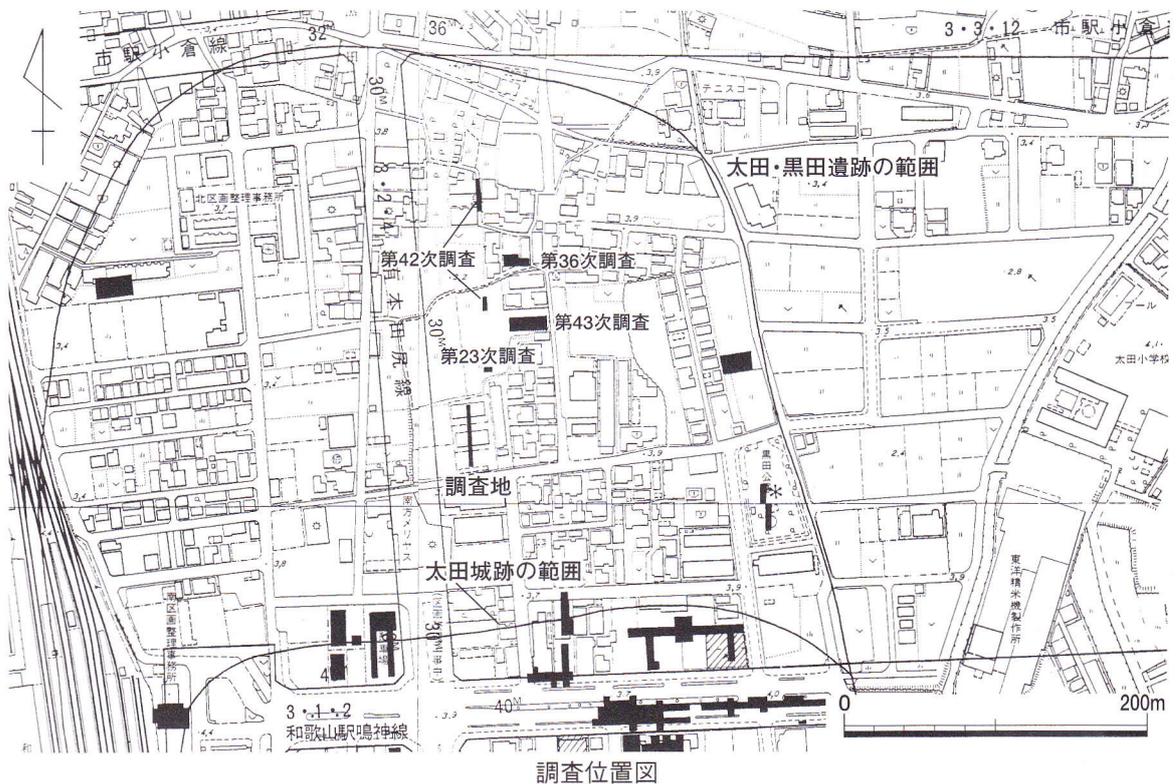
調査面積 60 m²

位置と環境

太田・黒田遺跡は弥生時代から江戸時代にわたる大規模な複合遺跡であり、特に弥生時代では県内最大級の集落跡として知られており、近年の調査によって弥生時代前期段階では環濠集落であることが明らかとなった。また、室町時代には豊臣秀吉によって水攻めが行われた太田城の推定地が遺跡の範囲と重複しており、それに関する遺構・遺物も検出されている。今回の調査地点は、遺跡の中央部でもやや北側にあたる。周辺の調査としては北東約30mから180mの地点で第23・36・43次調査が、北約130mと180mの地点で第42次調査が行われている。この中で本調査地の北東隣接地にあたる第23次調査においては、弥生時代中期、古墳時代後期、中世の3時期の遺構が検出され、中心部との遺構面の対比から微高地の縁辺部にあたることが確認されている。今回の調査地点は第23次調査より集落の中心部側にあたることから、多くの遺構・遺物の検出が予想された。

調査内容

今回の調査は集合住宅建設に伴う事前の調査として実施したものであり、工事計画範囲内の建物基礎部分にあたる地点において南北約40m、東西約1.5mの調査区を設定した。当調査地の基本層序については、表土である近現代の整地土下に旧耕作土（第1層）、近世の耕作土（第2層）が堆積する。第3層は中世の遺物包含層であり、弥生時代中期から鎌倉時代までの遺物を多量に含む。第4層は弥生時代中期初頭の遺物包含層であると考えられ、上下2単位に分けられる（第4a・4b



層)。遺構については、第3・4a・4b層上面において3面の遺構面を確認した(第1～3遺構面)。なお、第3遺構面検出の遺構は、上部を大きく攪乱されていた北端部のみで確認したものであり、調査区全体で確認したものではない。

第1遺構面は第2層掘削後、第3層上面で検出したもので、遺構面の標高は約3.1mを測る。遺構は調査区南方においてピット3基を検出したが、土師器の細片が出土した他は時期を特定する遺物の出土はなかった。

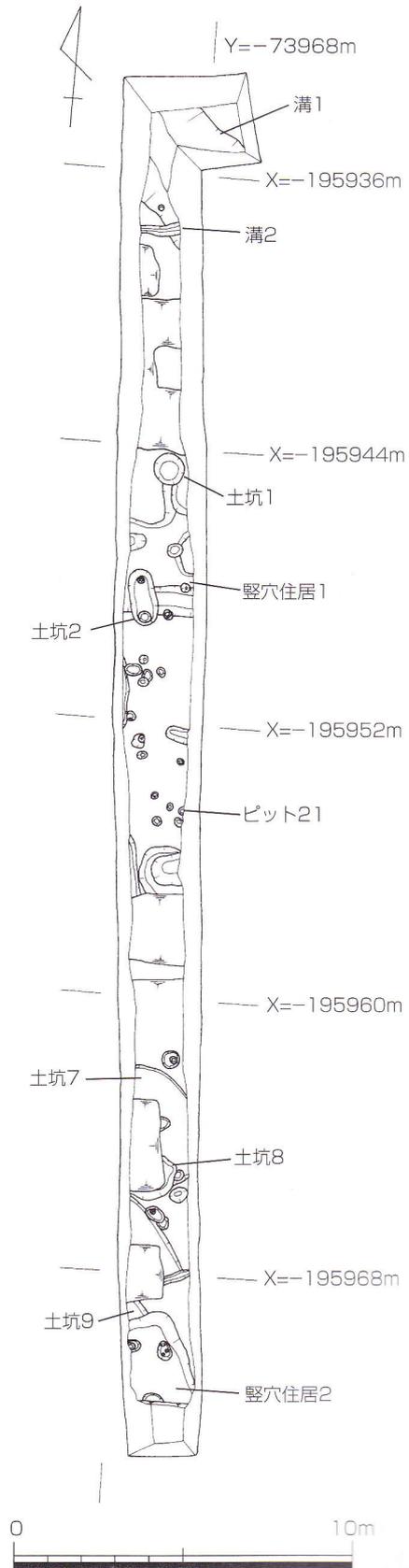
第2遺構面は、第3層掘削後、第4a層上面において検出したもので、遺構面の標高は2.8～2.9mを測る。検出した遺構は弥生時代中期から中世の遺構を検出した。まず弥生時代の遺構としては、土坑2基(土坑7・9)などを検出した。これらの遺構からは、弥生時代中期の土器が少量出土した。

古墳時代の遺構は前期の竪穴住居2棟(竪穴住居1・2)、後期の溝1条(溝2)などを検出した。竪穴住居1は調査区の中央部で検出したもので、東西2.1m以上、南北4.8m以上の規模を有し、方形の平面形を呈する。住居の深さは、検出面から25～30cmを測る。床面上において直径30～40cm、検出面からの深さ25～35cmを測る柱穴3基、南壁に沿って約70cm幅の壁溝、北東部において直径約80cmの土坑を検出した。土坑の覆土には炭の堆積が多く認められた。また、調査範囲が狭小なため、全体の形状は不明であるが、住居の北西部と東端においてベッド状の高まりを検出した。竪穴住居2は調査区南端で検出したもので、平面形は隅丸方形を呈し、東西1.6m以上、南北2.5m以上の規模を有する。検出面から床面までの深さは約25cmを測り、床面上において柱穴を3基検出した。竪穴住居1・2からは、古墳時代前期初頭の土器が一定量出土した。

奈良時代の遺構としては、土坑8がある。遺構の平面形は不定形を呈し、遺構の規模は南北1.4mを測る。攪乱により大部分は削平されているが、覆土内から奈良時代前期の土師器皿、須恵器杯身・杯蓋などが出土している。

中世の遺構としては土坑1・2がある。土坑1は円形を呈し、遺構の規模は直径約80cmを測る。検出面からの深さは、55cmを測り、遺構の断面形は挿鉢状を呈する。

第3遺構面は、第4b層上面において検出したものであり、弥生時代前期の環濠(溝1)を1条検出した。遺構面の標高



遺構全体平面図

は、約2.7 mを測る。

溝1は調査区の北端部で検出したものであり、遺構の主軸は北壁面下から南東方向へ延びる。遺構の規模は検出長約2.0 m、幅3.4～3.6 m、底面の幅0.8 m、深さ1.8 mを測り、溝の断面形は逆台形を呈する。溝底面の標高については、北側で1.0 mを測る。環濠に関連する施設などは認められなかったが、南壁上部において、環濠の最上層埋土である粗砂層で埋没したピットを1基検出した。このピットは直径20 cm、検出面からの深さ約20 cmを測り、北側に内傾して打ち込まれていた。

溝1の覆土は、最下層に自然堆積による粘土層（9・10・12・13）が約40 cmの厚さで堆積している。その上部は50～60 cmの厚さで、シルト層（2～8）が堆積しており、その多くは炭を多量に含み、再掘削が行われた可能性がある。最上部は粗砂層（1）によって埋没しており、60 cm以上の厚さが確認できる。

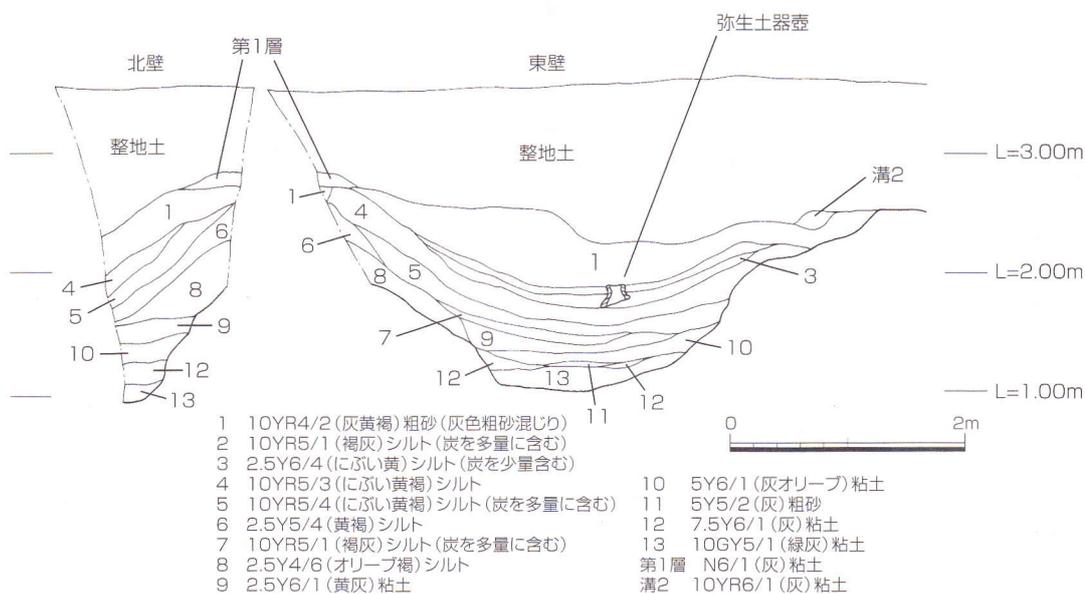
溝1からの出土遺物は少量であるが、3層から弥生時代中期初頭の壺上半部（3）と甕（8）が完形で、9層から弥生時代前期後半の甕（7）がほぼ完形の状態で出土した。これら出土遺物の年代観から、弥生時代前期後半には機能しており、弥生時代中期初頭に最終的に埋没したものと考えられる。溝1の年代や遺構の形状、埋没状況などは、第26・45次調査で検出された環濠と同一であり、第45次調査で検出した2条の環濠と対比するならば、内環濠に相当するものと言える。



溝1（西から）



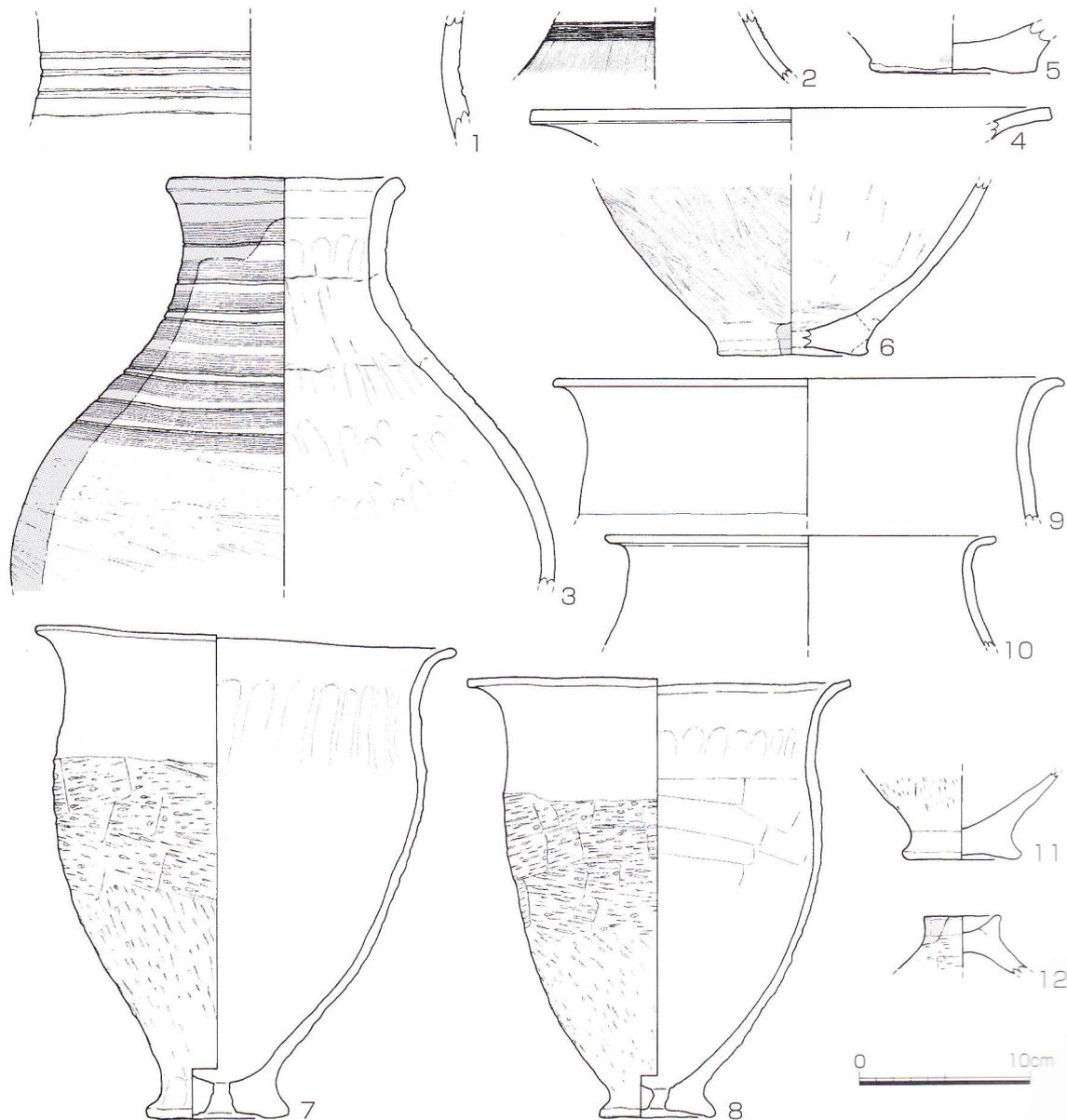
溝1 遺物出土状況（北から）



溝1 土層断面図

出土遺物は、遺構の覆土及び、第2～4a層の遺物包含層から、各時代にわたる多数の遺物が出土した。出土遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、焼締陶器、国産陶磁器、瓦、石器などがあり、その中でも特に弥生時代の遺物が大半を占めている。

1～11は溝1出土の弥生土器である。1・2は壺の頸部であり、1はヘラ描直線文を4条以上、2は5条施すものであるが、条線自体は太いものである。3は直口壺であり、上半部はほぼ完存している。口縁部下から頸部にかけてはクシ描直線文を8条施すが、使用された施文工具の一端が太いものであるため、直線文の一端がヘラ描直線文様の痕跡として残存している。この施文の特徴は、ヘラ描直線文とクシ描直線文を併用する土器と酷似しており、第I様式と第II様式の過渡の様相を呈する土器と考えられる。また、この土器には対向する位置に2箇所、黒斑が筋状に大きく付着している。4は広口壺の口縁部、5・6は壺の底部であり、6の外面の調整にはヘラミガキ調整が施される。7～11は紀伊型甕である。7・8は焼成後、底部中央に円孔が穿たれた有孔甕であり、ほぼ完形の個体である。形態的には体部最大径より口径が大きくひらく形態を呈し、底部は厚く上



遺物実測図1

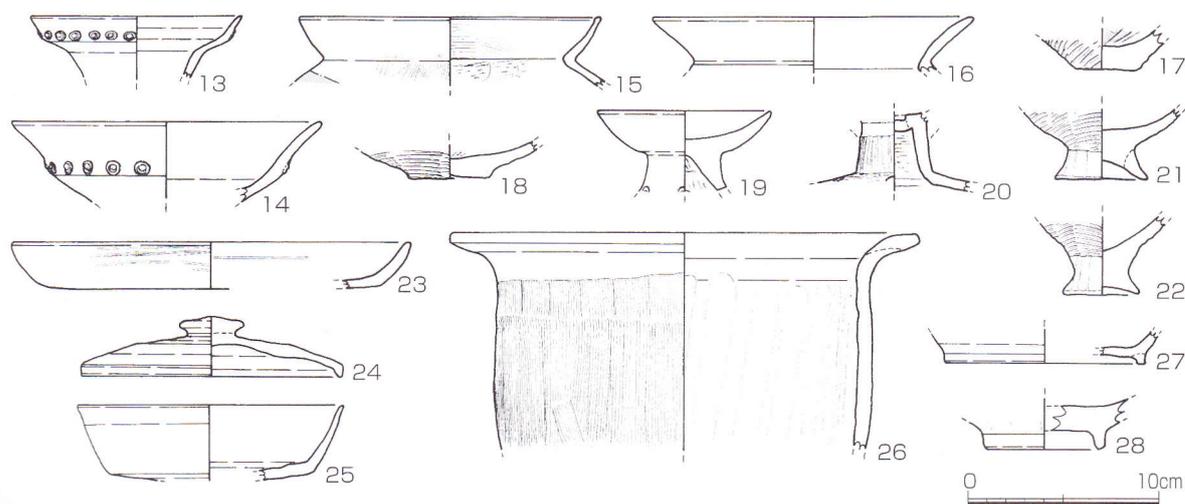
げ底である。外面のヘラ削り調整は粗いものであり、体部下半は上下方向に、体部上位はナナメからヨコ方向に施される。また体部下半は二次焼成により明褐色を呈し、器表面も磨滅しているが、上半は暗褐色を呈し、煤が付着する。7・8の法量は、7が口径24.5 cm、器高29.3 cm、底径6.8 cm、8が口径22.2 cm、器高26.0 cm、底径6.5 cmを測る。9・10は口縁部であり、9はやや厚手に、10はやや薄く成形されている。11は底部であり、厚く上げ底を呈するものである。12は第3層から出土した蓋であり、つまみ径4.4 cmを測る。外面はヘラ削りの後、ナデ調整が施され、調整技法が類似することから紀伊型甕の蓋と考えられるものである。

13～22は、庄内式併行期の土器である。13・14は二重口縁壺で、口縁屈曲部には円形浮文を貼付けた後、竹管文を施すものである。15～18は甕である。15・16は口縁部であり、15はやや内彎ぎみに、16は外反しながら立ち上がる。17・18は底部であり、外面にはタタキによる成形痕が認められ、内面にはいわゆる蜘蛛の巣状のハケ目の痕跡を残す。19は口径9.0 cmを測る小型器台であり、脚部にはスカシ孔が認められる。20は高杯の脚部であり、裾部にはスカシ孔が認められ、外面にはヘラミガキ調整が施される。21・22は製塩土器の脚台部であり、脚部は短くひらき、底部は上げ底状に窪む。13～22の出土位置は13が竪穴住居1、14が第3層、15～19・21・22が竪穴住居2、20が土坑7である。

23～26は土坑8出土の土器である。23は土師器の皿Aであり、外面には僅かにミガキの痕跡が認められる。24は須恵器の杯蓋であり、宝珠様つまみを貼付けるものである。25は須恵器の杯Aであり、口縁部は薄く成形されている。26は土師器の甕Aであり、外面はタテハケの後ヨコナデ、内面はタテ方向のナデによって調整されている。

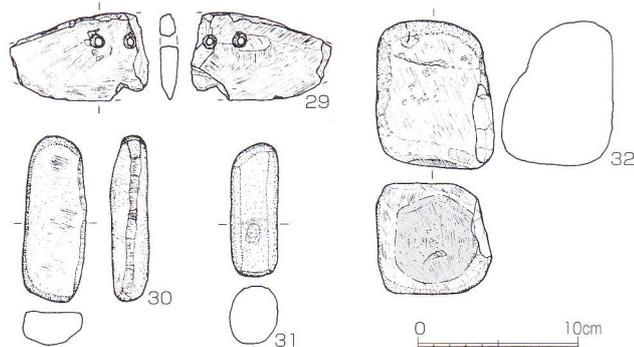
27は須恵器の杯Bであり、高台は底部と体部の境に貼付けられている。28は中国製の青磁碗であり、蓮弁のメントリが僅かに認められ、外底面の釉は削り取られている。27・28の出土位置は、第3層である。

29は、結晶片岩製の石庖丁である。刃部は片刃であり、その成形痕跡が明瞭に認められる。30・31は砂岩を用いた叩石である。30の上面には擦痕による3箇所のくぼみが認められ、上端部には敲打、側面には敲打及び擦痕が明瞭に残る。31は各側面・下端部に敲打痕が残るが、明瞭な痕跡は上面・下端部である。32は砂岩を用いた磨石である。ほぼ全面に敲打痕及び擦痕が認め



遺物実測図 2

られ、特に下端部の中央には使用時に付着したとみられる直径5 cm大の円形の範囲に変色部分があり、油分等の付着による痕跡と考えられる。29～32の出土位置は29～31が第3層、32がピット21である。



遺物実測図3

まとめ

今回の調査では、3面の遺構面と弥生時代から中世にかけての遺構・遺物を検出し、太田・黒田遺跡北部の様相を明らかにする資料が得られた。特に北東側隣接地にあたる第23次調査の成果と遺構検出面を対応させた場合、本調査の方が約60 cm程度高く、本調査地は微高地の縁辺部というよりは微高地中央部に類似した様相を確認することができた。また、調査区北端で環濠（溝1）を検出したが、環濠は第45次調査と同様に微高地縁辺部に掘削されたものと考えられることから、本調査地北側を微高地とその縁辺部の境として位置づけることが可能である。溝1の規模・形状や機能・埋没年代は、本調査地の南350 mに位置する第26・45次調査で検出された環濠の状況と符合するものであり、同一の遺構群である可能性が高い。このことから、第26・45次調査検出の環濠が本調査検出のものに延長し、連続するものであるとは即断できない。しかし溝1は第26・45次調査と同じく北西から南東方向に主軸をもち、その位置関係はほぼ対局にあたることから、前期環濠集落の形状は北西から南東に長辺を、北東から南西に短辺をもつものであったと推定することができる。また、集落が営まれた微高地の形状も同様の主軸をもつ帯状のひろがりをもつものであることが指摘できる。遺跡の北西部については調査事例が少なく不明であるが、第26・45次調査検出の環濠の方向性と、弥生時代前期の竪穴住居が検出された第16次調査を含め、推定できる集落の規模は短辺が約250 m、長辺も約440 m程度の規模を有していたと考えることができよう。今回の調査成果により、環濠の方向性と位置関係から弥生時代前期段階の集落の範囲を検討する資料が得られた点は大きな成果と考えられるが、いまだ集落自体の構造解明は進んでおらず、今後引き続き調査を行い、検討していくことが必要である。

弥生時代以外の遺構としては、古墳時代の竪穴住居を検出した点も重要な成果である。古墳時代の竪穴住居は、太田・黒田遺跡の既往の調査でも第50次調査など事例が極めて少なく、貴重な事例になると考える。また、奈良時代の遺構も太田・黒田遺跡では検出例が少なく、第21次調査など微高地北側において奈良時代前期の井戸が検出されている。そこでは、古代銭貨や齋串の出土から官衙の様相をもつ遺跡であったことが窺え、今回検出した土坑もその関連が注目できる。

以上、今回の調査では弥生時代から中世にかけての遺構・遺物を検出し、本調査地における各時代の様相を把握することができた。特に弥生時代では、前期の環濠を検出したことにより、前期段階の集落の規模・形状を明確化することができた。また古墳時代以降、集落域として引き続き土地利用が行われている点は、遺跡の変遷を検討する上で貴重な事例になると言えよう。（川口修実）

17. 太田・黒田遺跡 第52次調査

調査地 和歌山市太田485-1番地

調査面積 120 m²

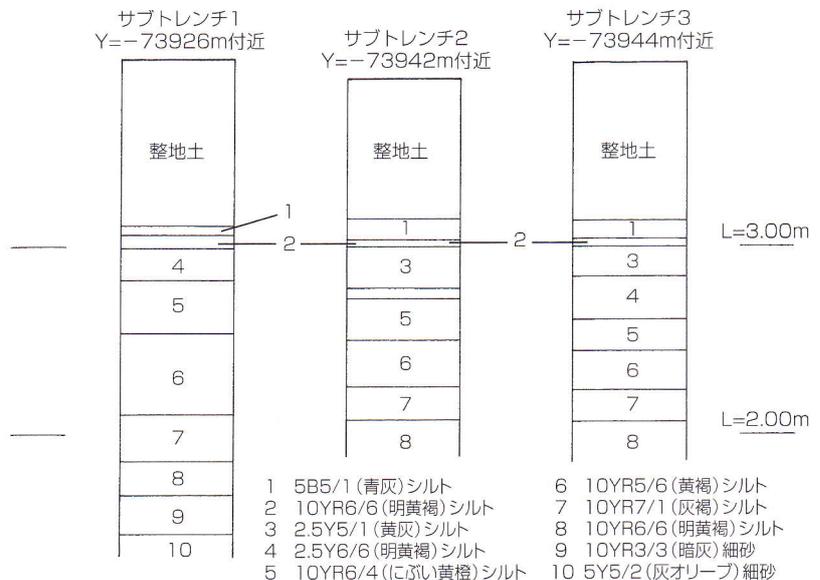
位置と環境

太田・黒田遺跡は、紀ノ川下流南岸の和歌山平野のほぼ中央部に位置し、平野部でも微高地にあたる地点であり、数多くの遺跡が分布する地域に所在する。この遺跡は、これまでに51次にわたる発掘調査が行われ、弥生時代前期の環濠や竪穴住居、中期の竪穴住居や井戸など多数の遺構を検出し、直柄広鋏や鋤などの木製農耕具、さらに銅鐸・銅鏃などの金属器や絵画土器（鹿）を含む多量の弥生土器などが出土しており、弥生時代前期から中期にかけての県内最大規模をほこる集落跡であることが知られている。また弥生時代以降では古墳時代から江戸時代にかけての遺構、遺物が多数検出され、特に室町時代には羽柴秀吉に水攻めされた太田城跡の推定地が重複するなど複合遺跡としても周知されている。

今回の調査地は、太田・黒田遺跡のほぼ中央部、太田城跡の中央やや北側に位置する。（5. 太田・黒田遺跡 第46次調査 調査位置図P.14 参照）。調査地の周辺における調査には、北東約20mの距離に位置する第22次調査において、弥生時代中期の竪穴住居3棟、16世紀代の溝状遺構などが検出されている。また南へ約60mの距離に位置する第45次調査では、弥生時代前期の環濠を2条検出し、西に約90mの距離に位置する第26次調査検出の大溝の延長部分と考えられることから、太田・黒田遺跡の弥生時代前期集落南西部の範囲が明らかにされている。さらに第51次調査では、主軸を北西から南東方向にもつ弥生時代前期の大溝が検出されている。この溝は、第26・45次調査で検出された弥生時代前期環濠と形状・埋没年代などが近似することから、それらと対になる環濠と考えられ、太田・黒田遺跡の弥生時代前期集落の規模や範囲を推定する上で重要な資料になると考えられる。

調査内容

調査は、東西17m、南北7mの東西に長い調査区を設定し行った。調査地の基本層序については、近現代の耕作土とそれに伴う床土を第1・2層とした。第3層は、室町時代の遺物包含層で、調査区の東部ではみられず西部ほど厚く堆積する。第3層下には明黄褐色のシルト（第4層）が堆積する。この第4層は、クシ描直線文やクシ描波状文



調査地土層柱状模式図

を施す弥生土器を含むことから弥生時代中期の遺物包含層と判断した。また第5層は、にぶい黄橙色のシルトである。第5層以下の状況についてはサブトレンチ1～3の調査結果から、調査区の全面に厚さ20～40cmを測る第6層がみられる。また第6層以下には、灰褐色のシルトで厚さ20～25cmを測る第7層、厚さ約10cmを測る第8層が堆積する。第7層上面の標高は2.1～2.3mを測り、第8層は1.9～2.1mを測る。また、第9層は厚さ20cmを測る暗灰色の細砂、第10層は灰オリーブ色の細砂である。これら第7層以下の各層からは遺物が出土しなかった。

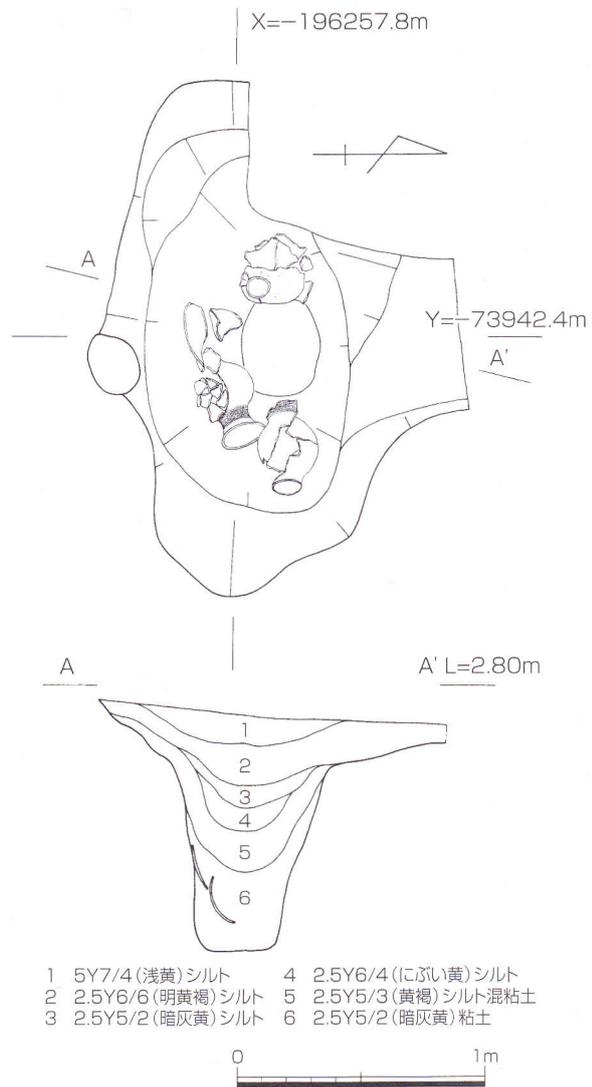
遺構検出面は、江戸時代の土坑、溝などを検出した第3層上面、弥生時代中期から鎌倉時代にかけての遺構を検出した第4層上面、弥生時代前期から中期初頭にかけての遺構を検出した第5層上面、さらに調査区東部の遺構底面の状況や攪乱の壁面観察から遺構の掘り込みを確認した第6層上面の合計4面を検出した。

まず、第5層上面（第3遺構面）では、東西1.2m、南北3.2m、深さ50cmを測る南北に長い楕円形状を呈し、底面に黒色の炭が厚く堆積する土坑や、東西約80cm、南北約1.4m、深さ約12cmを測り、底面に堆積した炭・焼土から骨角製の銚先が出土した土坑などの他、多数のピットがみられる。これらの時期は、出土遺物から弥生時代前期末と考えられる。

そのなかで、土坑27は調査区の北西隅において検出したもので、規模は東西約2.1m、南北約1.5m、深さ約1.2mを測る。ほぼ東西に主軸をもつ楕円形状を呈するもので、覆土は6単位に分けられる。底面近くからは、頸部にヘラ描直線文とクシ描直線文を併用する広口壺やヘラ描直線文のみを施す広口壺及び、紀伊型甕2個体が投げ込まれたと考えられる状態で出土した。これらの土器は復元すると一部を欠くがほぼ完全な形になることから、この土坑が埋められる際の祭祀に使用されたものとみられ、遺構の性格としては井戸になるものと考えられる。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代中期初頭のも



第3遺構面全景（東から）



土坑27 遺構平面図及び断面図

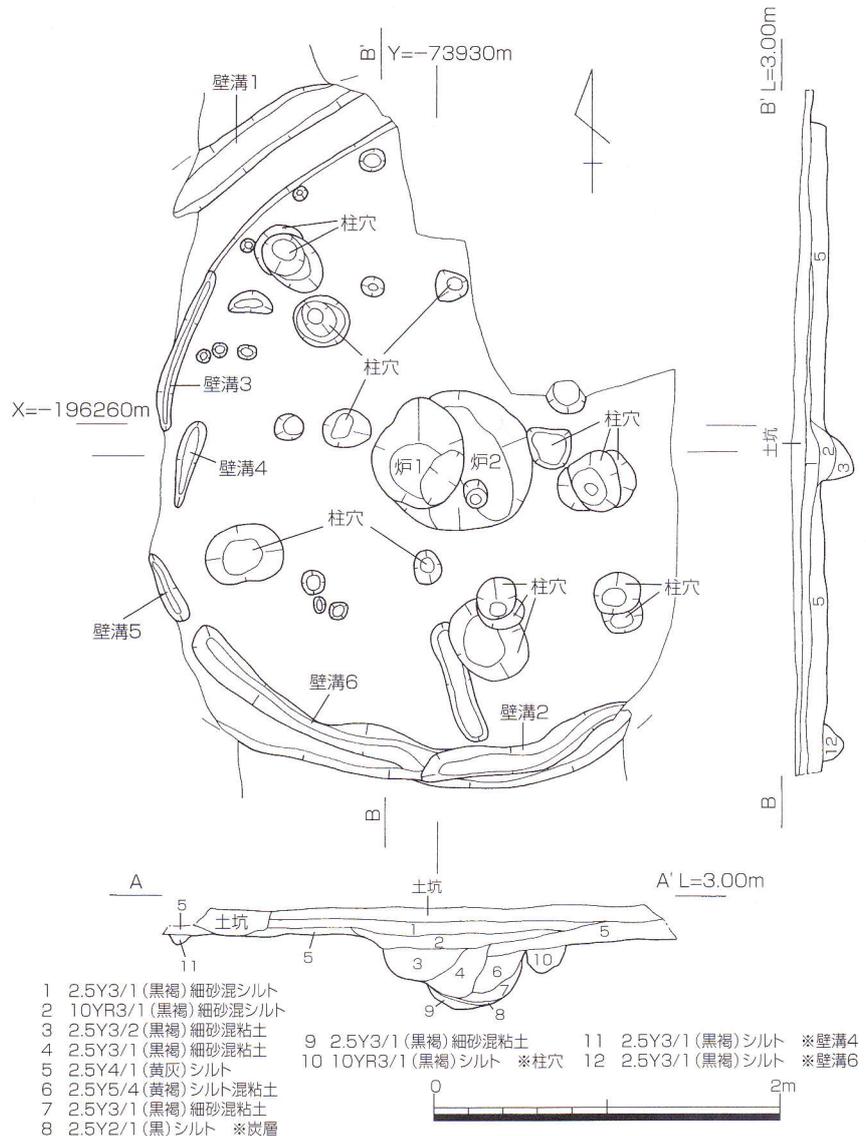
のと考えられる。

第4層上面（第2遺構面）で検出した遺構には、弥生時代中期のものとして後述する竪穴住居がある。また弥生時代から古墳時代にかけてのものとしては、直径約1.3m、深さ約1.2mを測る円形状を呈し、広口壺、細頸壺、タタキ甕、鉢など多量の土師器が出土した土坑がある。この土坑の性格としては、平面プランや遺物出土状況から井戸と考えられる。また鎌倉時代の遺構としては、直径約1.4m、深さ約1.1mを測る円形の土坑や直径約1.1m、深さ約1.3mを測る井戸がある。これらの遺構からは、大小の土師器皿や瓦器碗・皿が多量に出土した。以下、竪穴住居について記述する。



第2遺構面全景（東から）

竪穴住居2は、床面が2面確認でき、それぞれに対応する壁溝がみられるものである。新段階のものは、直径約4.0mを測る円形のプランをもつもので、壁溝は北側（壁溝1）と南側（壁溝2）にみられ、中央には東西約55cm、南北約65cm、深さ約20cmを測る炉（炉1）がある。土層断面観察の結果、この炉跡は同一の床面で少なくとも2回の掘削がみられ古い段階のものは深さ約30cmを測る。炉跡の周辺には多数の柱穴がみられ、復元すると5本柱であった可能性がある。古段階のものは、直径約3.8mを測る円形のプランを



竪穴住居2 遺構平面図及び断面図

もつもので、前述した新段階の住居はこの住居の炉及び支柱穴を踏襲して建てられたものとみられる。壁溝については、住居の西側から南側において壁溝3～6を検出した。北側の壁溝については確認できなかったが、新段階の住居の床面から約10cmほどの落ちこみを確認した。また炉跡（炉2）は新段階の炉跡のやや東側にみられ、東西60cm以上、南北約80cm、深さ約30cmを測るものである。時期については、新段階の炉内からクシ描波



第1遺構面全景（東から）

状文をもつ広口壺が出土したことからも弥生時代中期のものとみられる。以上のことから、新段階の住居は、古段階の住居を拡張して建てられたものと考えられる。

第3層上面（第1遺構面）では、江戸時代の畑作に伴う鋤溝13条及び、幅約1.5m、深さ20～40cmを測る溝2条、また土坑などを検出した。

出土遺物には、弥生時代前期から中期の土器をはじめ、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての土師器や、鎌倉時代の土師器皿、瓦器椀・皿が多量に一括出土した。

まとめ

今回の調査地は第26・45・51次調査の調査成果から、弥生時代前期には南西約60mに存在する環濠に囲まれた微高地上にあたる。まず弥生時代前期末から中期初頭の段階では、調査区の南西部及び東部においてピットが集中してみられ、北壁際から南東部にかけては土坑が検出されるなど居住域として機能していたものと考えられる。また第26・45次調査で検出された環濠とのかかわりについては、環濠の最終堆積に含まれる土器が紀伊第Ⅱ様式の古段階と考えられ、今回の調査でも土坑からヘラ描沈線を多条に施す壺や甕が出土し、土坑27からはヘラ描直線文とクシ描直線文を併用する広口壺など環濠の最終堆積とほぼ同時期と考えられる一括資料が出土した。よって、これらの遺構は環濠と併存したものと考えられる。次に弥生時代中期では、竪穴住居2棟や土坑などがみられるなど、調査地周辺が居住域の一部として機能していたと考えられ、前期末段階と比較して遺構の多様性が指摘できる。弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺構としては、土師器の一括遺物を出土した井戸があり、古墳時代初頭の集落域を示す資料として注目される。さらに鎌倉時代では、調査区の全面において土坑・井戸などが分布するようになり、土師器皿や瓦器椀・皿など平野部における良好な一括資料を得ることができた。また当調査地周辺は、室町時代には太田城の存在した地域であるとされているが、今回の調査ではそれにかかわる遺構を検出することはできなかった。

今回の調査では、弥生時代後期、奈良・平安時代及び古墳時代の遺構・遺物があまりみられなかった。これについては、今後周辺地域の調査成果も合わせ検討が必要である。（藤藪勝則）

【参考文献】

『太田・黒田遺跡 第52次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団 2002年

18. ^{あきづき} 秋月遺跡 第9次調査

調査地 和歌山市秋月 346 番地

調査面積 810 m²

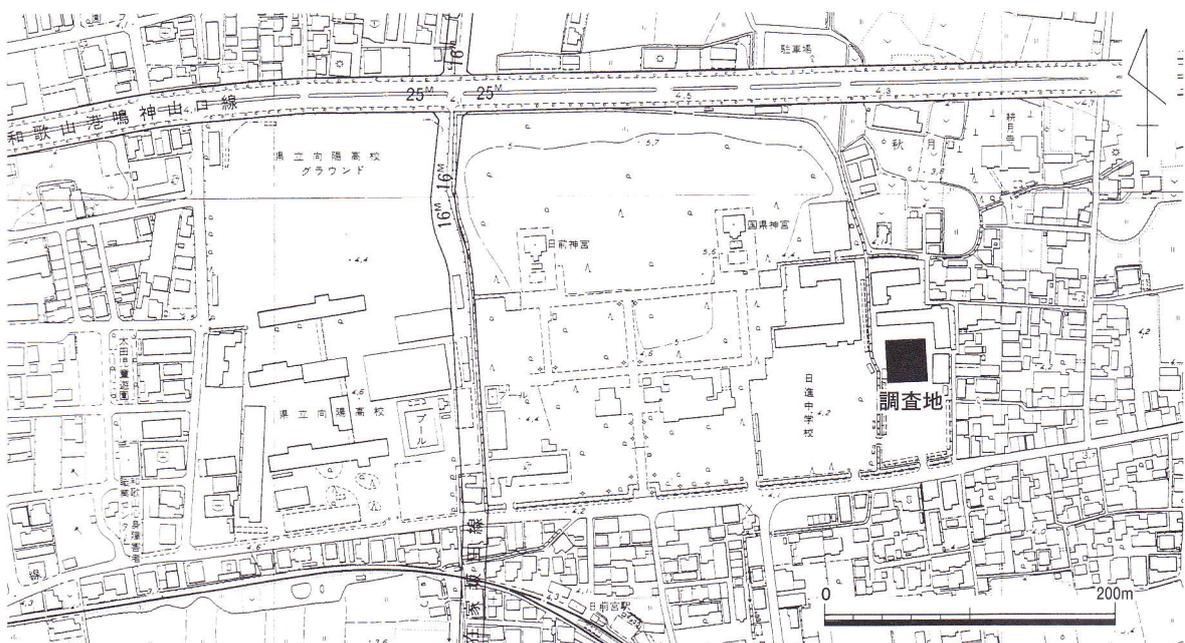
位置と環境

秋月遺跡は秋月の地に鎮座する日前・国懸神宮の周辺に広がる弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。調査対象地は、平成 11 年に調査を行った第 8 次調査地の北側隣接地にあたる。この調査では、弥生時代前期の石器製作に関わるとみられる土坑や自然流路、古墳時代前期の土器廃棄土坑や後期の竪穴住居のほか、奈良時代の井戸、鎌倉時代の溝や土坑など多くの遺構を検出し、また平安時代後期に存在したとされる「神宮寺」に関係するとみられる瓦をはじめとした多量の遺物が出土した。

調査内容

調査区は、基本的に工事計画範囲の南側にあたる微高地部推定地を中心に設定した。調査は、排土置き場の制約から東西を 2 分するラインを設定し、第 1 期にあたる東側を第 1 区、第 2 期にあたる西側を第 2 区と定めた。調査地の現況が運動場であるため、表土は厚さ 10～20 cm を測る整地土である。整地土下の状況は、調査区中央部を東西に貫く鎌倉時代の溝（溝 12）の南肩部を境として大きく異なる。まず北側の微低地部では、近代以降の整地層（第 1 a～2 層）が約 70 cm と厚く堆積し、その下層に明治時代の水田耕土である標高 3.7 m 前後を上面とした第 3 層を検出した。第 4 層は北側の微低地部と南側の微高地部では若干土色等に違いがあるが、ともに 10～20 cm の厚みをもつ江戸時代の遺物包含層である。この第 4 層の下面がすべての遺構を検出した遺構面である。この遺構面を形成する第 5 a 層は、20～60 cm の厚みをもつ黄褐色系の細砂混シルト質層で微量の弥生時代前期の遺物を含む遺物包含層である。

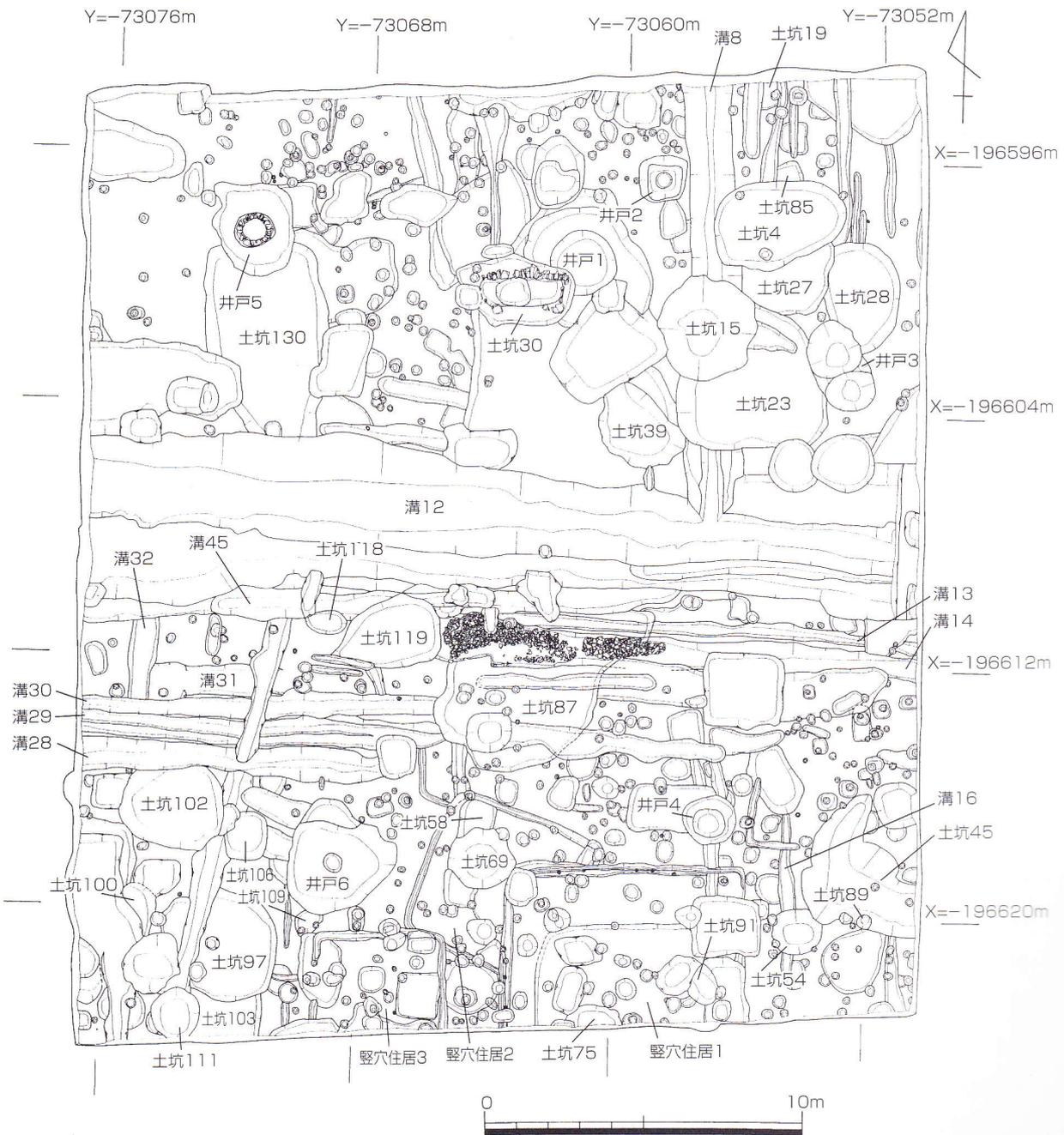
まず弥生時代の遺構は、第 1 区の北端部で検出した土坑 19 や第 2 区の南端部で検出した土坑



調査位置図

109 などがある。土坑 19 からは紀伊第 I 様式に併行する時期の広口壺などが完形で出土した。

弥生時代末から古墳時代前期にかけての遺構は、調査区南半部を中心として庄内式併行期に比定できる竪穴住居 3 棟（竪穴住居 1～3）や井戸 1 基（井戸 4）、布留式併行期に比定できる井戸 1 基（井戸 6）、土坑 1 基（土坑 89）などがある。また古墳時代中期のものでは溝 1 条（溝 16）、土坑 1 基（土坑 91）があり、また後期では土坑 1 基（土坑 69）などを検出した。なかでも竪穴住居 1 は第 1 区の南端部で検出したもので、東西 7.8 m、南北 5.2 m 以上を測る方形プランの大型住居で、床面周囲に高さ 5 cm 程度のいわゆるベッド状の高まりが設けられている。主柱穴は北壁に平行して掘削された 2 基からみて、4 本柱の住居であったものと考えられる。床面の北西隅には貯蔵穴が、中央部には炉が配され、炉の南側床面が熱によって赤変していたことから焚き口が南側であっ



遺構全体平面図

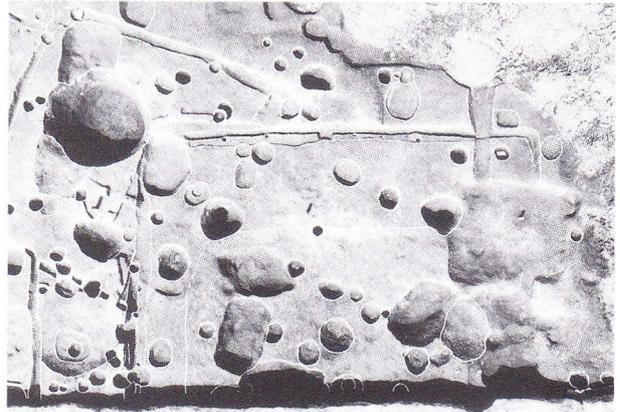
たものと考えられる。周囲の壁溝には板状の部材を杭によって固定していたとみられる直径5 cm前後のピットが壁溝内に8基検出できた。また土坑69は、調査区南半部の中央部で検出したもので、東西南北とも1.9 mのやや隅円方形のプランであり、深さは最深部で95 cmを測る。遺物には、須恵器杯身が圧倒的に多く、覆土上位において正位置に保たれた状態で14個体分が出土したほか、須恵器の高杯・甕や土師器の杯・壺・甕などが多量に出土した。そしてこれらを取り除いた下面において馬の頭骨が出土し、状況からみて廃絶時に馬の頭骨や土器を用いた祭祀が行われたものと考えられた。

奈良時代の遺構は調査区南半部において検出した溝1条（溝32）と土坑3基（土坑54・75・100）がある。

平安時代の遺構は第1区北半部で検出した井戸1基（井戸2）や第2区南半部において検出した土坑2基（土坑102・106）などがある。また後出する溝14や土坑58・118などから多量に出土した瓦類が平安時代後期に比定できるものが多く、後期に存在したとされる「神宮寺」との関係が注目できる。

鎌倉時代の遺構は他の時期に比べ圧倒的に多く、調査区全体において数多く検出した。遺構には、調査区中央部を東西に貫く幅4～5 mの大溝（溝12）やこの溝に直交して取り付く溝（溝8）、溝12に平行して掘削された溝7条（溝13・14・28～31・45）、井戸2基（井戸1・3）、土坑27・28・39・130などがある。溝12からは、多量の瓦器碗や土師器皿類がほぼ完形の状態で出土し、その状況からみて南側の微高地部から投棄されたものと考えられた。井戸1は、第1区の北半部で検出した石組井戸で、2度の造り替えがみられ、3基とも重なりのある。3基のうち最も新しい井戸の底面には底板を取り外した直径30 cmの木桶を設置しているのに対し、古い時期の2基には井戸底にくり貫きの木杵を用いている。また第2段階の井戸木杵内部からは曲物を用いた釣瓶が出土した。

室町時代の遺構は、第1区の北半部において検出した土坑2基（土坑4・23）やタメマス状の



第1区 竪穴住居1周辺（上が北）



第1区 土坑69（北東から）



第1区 溝8・12（南から）

土坑（土坑30）、第2区北半部で検出した石組井戸（井戸5）などがある。井戸5の構築方法は、底面に底板を取り外した木桶を設置し、その上端部を結晶片岩の割石で固定した後、結晶片岩でほぼ垂直に小口積みしたもので、石組内には砂岩を用いた一石五輪塔が石材として転用されていた。この井戸の埋没時期は、江戸時代中期に比定できる。

江戸時代の遺構は調査区全体において土坑を中心として多数検出した。

第2区の北西部及び南西部において噴砂を検出した。これらの噴砂はともに第8層のオリーブ褐色系の礫混粗砂が第5a層を貫いて噴き上げたもので、その方向性はN-30°-45°-WのものとN-90°-Wのものがああり、遺構との切り合いからみてこの噴砂を引き起こした地震は弥生時代前期以降、平安時代後期までの間に起こったものと考えられる。

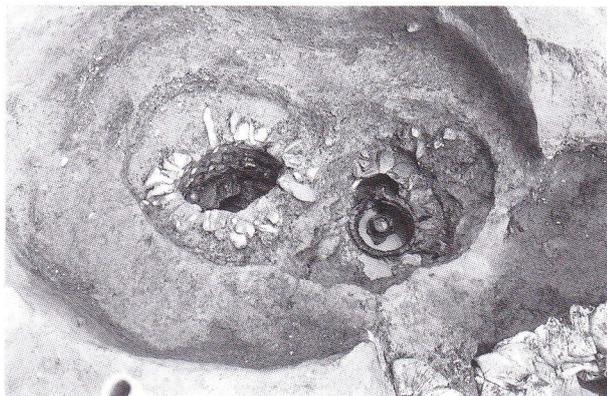
遺物は遺物収納コンテナ約400箱を数える。土器類には弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、中世土師器、瓦器、焼締陶器や瓦質土器、輸入陶磁器である中国製の白磁や青磁のほか、近世の陶磁器類がある。土器以外では、溝12から出土した瓦製硯や多量の瓦、石器（叩石・砥石）、石造物（一石五輪塔・宝篋印塔）などがある。

まとめ

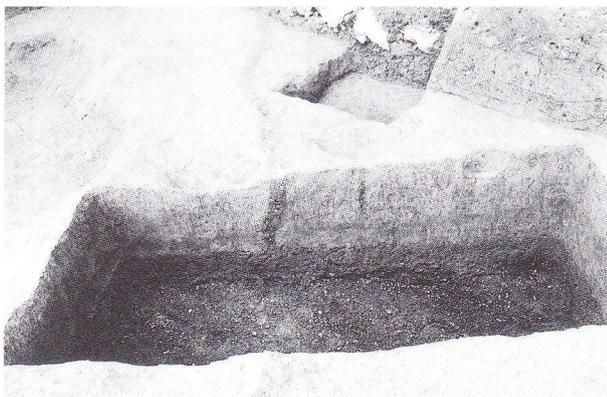
今回の調査では、調査区中央部において鎌倉時代の大溝が検出され、この溝を境として南半部が微高地部であることを確認した。北側隣接地にあたる第8次調査では調査区の中央部から北半部が約80cmの比高差で微高地部であったことから、微高地部の南北幅が約40mであることが判明した。

遺構では、まず弥生時代において前期に比定できる土坑などを検出し、集落の一角であったものといえる。その後、弥生時代末から古墳時代前期にかけて集落が形成され、堅穴住居2や井戸4が先行し、次いで堅穴住居1・3などが造られ、祭祀土坑（土坑69）などのように古墳時代を通して、連綿と集落が形成されていたものとみられ、奈良時代に至っても同じ様相であったものと考えられる。平安時代では、後期頃に日前宮の東に存在したとされる「神宮寺」が考えられる。出土した多量の瓦から、当該期に瓦葺きの建物が存在した可能性が高く、鎌倉時代に比定できる瓦も共伴することからみて、少なくとも建物が鎌倉時代まで存在していたものと考えられる。鎌倉時代になると遺構の数が極めて多くなり、特に溝12などの遺物量などから後期にその盛期がみられることが明らかである。また室町時代から江戸時代にかけては、第8次調査時を含めて溝や土坑などを検出し、引き続き集落として利用されていたものとみられる。

（井馬好英）



第1区 井戸1（南西から）



第2区 北西隅噴砂断割状況（南東から）

19. 史跡和歌山城 第25・26次調査

調査地 和歌山市一番丁3

調査面積 470 m²

位置と環境

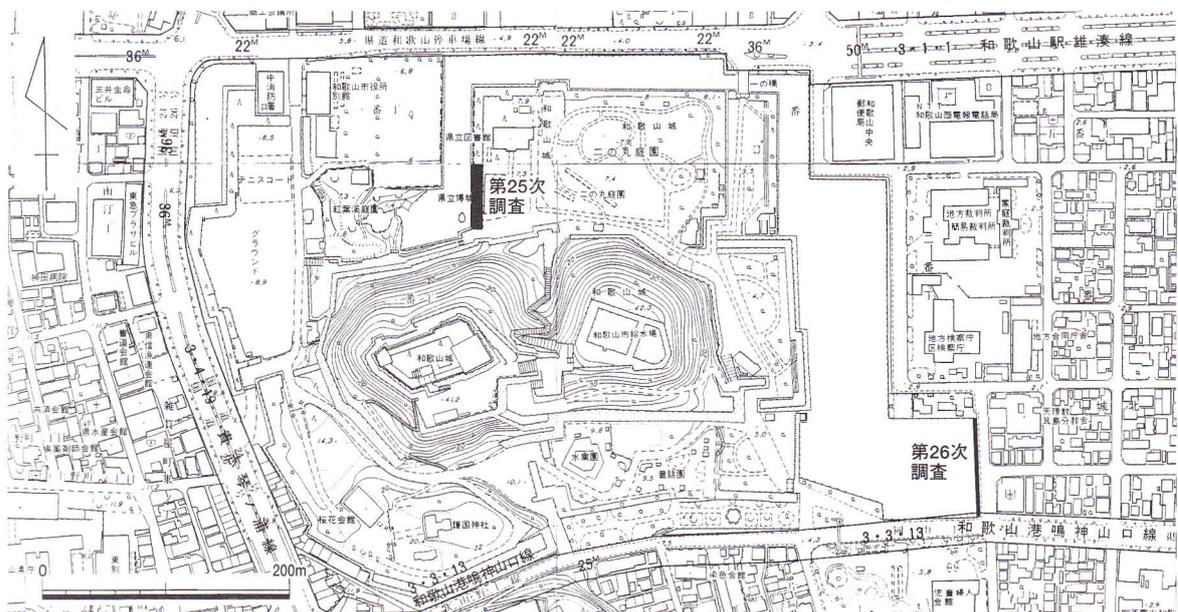
国指定史跡である和歌山城は、紀ノ川下流域南岸の平野部に存在する独立丘陵、岡上に築かれた平山城である。今回は二の丸西部御橋廊下取り付き部分（第25次調査）と東堀南東部西面石垣（第26次調査）の2ヶ所について調査を行った。第25次調査は、和歌山市が史跡和歌山城地方拠点史跡等総合整備事業で実施する御橋廊下の復元整備に伴うもの、また第26次調査は一部崩落がみられる石垣の積み直しに伴うもので、周辺の遺構確認及び石垣の構造解明を目的としたものである。

調査内容

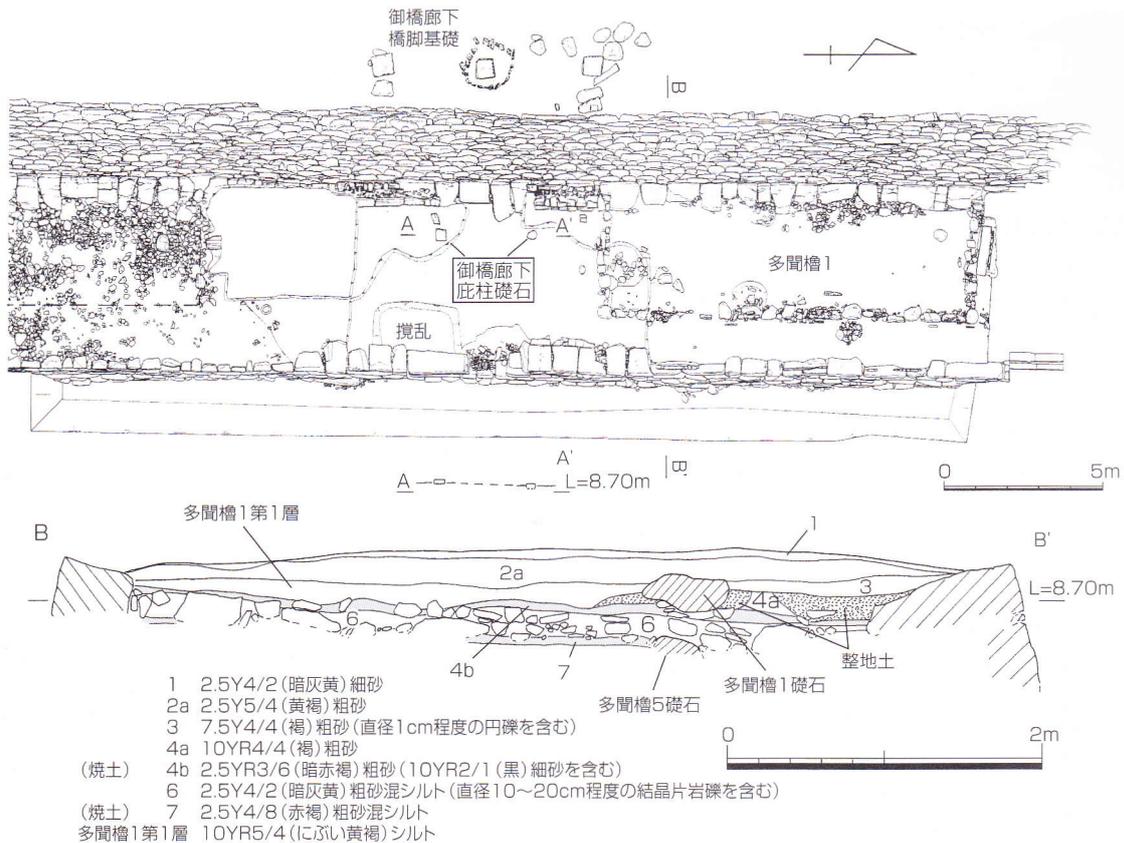
調査の結果、第2・4・7層下面においてそれぞれ遺構を検出した（第1～3遺構面）。各遺構面の間には焼土層（第4b・7層）がみられ、層序の対応から第3遺構面は第7層火災時に焼失、第2遺構面は第7層の火災以降第4b層の火災以前に存在、第1遺構面は第4b層の火災後に再建されたと推定できる。これらの焼土層を火災の記録に当てはめて考えるならば、第7層は明暦元（1655）年の火災と想定することができ、第4b層は幕末～明治の第1遺構面の下層にみられることから文化10（1813）年の火災の可能性が考えられる。

第1遺構面検出遺構

第1遺構面の検出遺構としては御橋廊下庇柱礎石の他、多聞櫓1～3、土堀基礎、漆喰列等がある。そのうち御橋廊下庇柱礎石は、第22次調査で検出した花崗岩礎石（礎石1）に対応するものである。北側礎石との中心部間の距離は約2.9 mを測る。また多聞櫓1は、調査区北側において検出した礎石列で、南北長約12 m、幅4 mを測る6間×2間の建物である。砂岩礎石が約2 m間隔にみられ、礎石間には結晶片岩の割石を配置している。内部床面は黄褐色シルトが全面にみられ、



調査位置図



第1遺構面平面図（御橋廊下周辺）と土層断面図

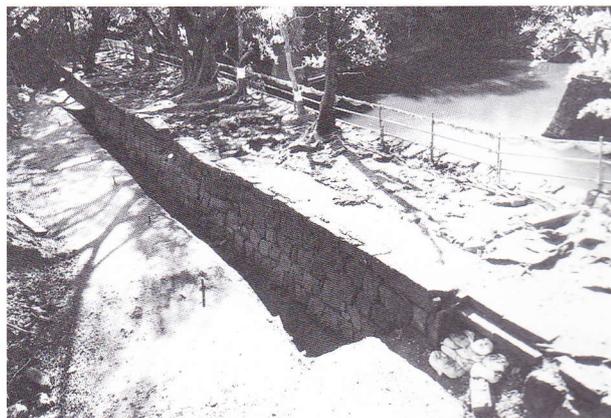
土間であったと考えられるが、このシルト下面で第4b層を切り込む形で礎石の抜き取り痕を確認したことから、以前は束柱を用いる板張りの床面であったとみられ、後になって土間に変更したものと考えられる。

第2遺構面検出遺構

第2遺構面では御橋廊下関連礎石の他、塼敷遺構、多間櫓4等を検出している。御橋廊下関連礎石の石材は砂岩で、礎石中央部間の距離は約2mを測る。礎石上部には一辺約18cmを測る角柱の痕跡が確認できる。多間櫓4は第22次調査時に確認した礎石5・6を含む多間櫓の礎石列で合計8基検出した。その他、第22次調査時に確認されている塼敷遺構、石垣上面溝状加工もこの遺構面に対応するとみられる。

第3遺構面検出遺構

第3遺構面では御橋廊下関連礎石の他、多間櫓5、石室（いしむろ）を検出した。御橋廊下関連礎石は第2遺構面の礎石より約1m西側で検出したもので、石材は北側が結晶片岩、南側が砂岩であるが、検出位置や石材間の距離が約2mを測る点を勘案して、御橋廊下に関わる礎石と判断した。多間櫓5は多間櫓4の下層において検出した礎石列で合計6



第1遺構面全景（北東から）

基確認したものである。礎石間の距離は約2mを測る。

さらに特筆すべき遺構として、石室を検出した。二の丸櫓台石垣に組み込まれた形で構築された施設で、石垣東面開口部隅角部は算木積みで二の丸側石垣と一連のものである。検出時には入口は閉塞されており、側壁中央上部は失われ石材の一部は石室内に転落していた。入口部分には敷居石、その内側両端には扉に関係するものとみられる礎石がある。この礎石と敷居石との位置関係から、扉は内開きであったものと考えられる。床面では入口側約2/3の範囲で埴敷（四半敷）を検出した。また四半敷の西端部、土壇裾にはピットがみられたことから、棚などの簡易なものを支える柱が存在した可能性が考えられる。さらに石垣解体時に石室の断割調査を行ったところ、石室の裏込石に砂岩円礫と結晶片岩割石の2種類が存在することが明らかになった。

その他、石室の上屋構造等に関係すると考えられるものとして、石室入口部分隅角部の前面下部に対になるとみられる柄穴を1ヶ所ずつ確認している。

石垣解体調査

石垣解体時に断面調査を行った結果、石垣中位で石組みの暗渠排水溝を検出した。溝の底部は礫敷でこのままでは溝としての機能を果たさないが、大型の鉄釘及び炭が出土したことや石垣内部の石材まで赤変していることなどから、石組の内部には木樋が存在した可能性が考えられ、火災時にこれが焼失したと推定できる。また石垣裏込石は石室裏込と同様、結晶片岩割石と砂岩円礫の2種類を確認した。堀側石垣石尻から約2.5mの範囲には主として砂岩円礫を、それよりも東側には結晶片岩割石を主に使用するもので、石材を使い分ける理由の一つには結晶片岩を土留めとして用いた可能性が考えられる。



第1・2遺構面 御橋廊下関連礎石（東から）



石室（北東から）

第26次調査

調査対象石垣は結晶片岩の割石を用いたものである。石垣の南北長は約80m、基底部からの高さは約2.6mを測る。石垣上部から約80cmは全体的に積み直しが行われており、同じ結晶片岩でも石材が小型になっている。基底部の勾配は55～60度を測るが、この積み直し部分は70～80度となる。同様の積み



石垣北側断面（南から）

直しは昨年度行った東堀南側の石垣（第23次調査）でも確認されている。また石垣の南側では部分的に砂岩によって積み直しされている箇所もみられた。

石垣上面の調査では裏込石を検出したのみで、他の遺構は確認できなかった。断面調査では、裏込石は石垣積み直し部分と対応して、その単位を大きく2つに分けられた。裏込石の石材は全て結晶片岩であり、その東西の厚さは下部が約80cm、



第26次調査地全景（北西から）

上部の積み直し部分が1m以上である。本石垣の構造としては石垣の背面には淡灰色粘土（第6層）・暗灰色粘土（第7層）が堆積しており、この粘土層をL字に切り込んで石垣が構築されていた。基底石は切り込んだ粘土の上に据えられている。粘土と基底石の間には石材を安定させるための結晶片岩の小片が1、2石程度みられたが、桐木や捨石等は確認できなかった。

また、石垣を全て撤去した段階の調査地北端部で、北側にみえる南面石垣の延長部分を検出した。南面石垣は砂岩の打ち込みハギで構築されている石垣であるが、西面石垣内部から検出した延長部分は結晶片岩の野面積みである。このことから南面石垣は現存する西面石垣に先行して構築されたもので、後に石材を変更して積み直しが行われていることが明らかになった。

まとめ

第25次調査では、3時期の遺構面を検出し、それぞれについて御橋廊下関連の礎石と多聞櫓の礎石等を検出した。御橋廊下関連礎石については、第2・3遺構面ではその間隔は約2mであったが、第1遺構面の段階では間尺を約2.9mに変更し、南側に拡張していたことが明らかになった。第22次調査の際に堀底で検出した御橋廊下橋脚基礎との関係については、礎石の配置や位置関係から第1遺構面の礎石に対応するとみられる。

次に多聞櫓について、少なくとも調査区北側の多聞櫓1・4・5についてはほぼ同一場所に繰り返し構築されており、「和歌山御城内惣御絵図」に描かれる多聞櫓とほぼ同様の位置関係であることが明らかになった。絵図の年代は18世紀末とみられるが、多聞櫓等の施設は江戸時代の前半から場所を踏襲されて繰り返し構築されていたことが伺える。また第3遺構面検出の石室については、類例がほとんどなく、その上屋構造についても今後の検討を要するものである。

第26次調査では、石垣裏込内の遺物は瓦片が2点出土したのみで、年代を推定できる資料を得ることができなかった。そのため、本石垣の構築時期について遺物から推定することが困難であるが、基底部分に関しては石垣石材に結晶片岩割石を用いている点、石垣の角度が60度を下回っており、これまで調査が行われた創建期とみられる結晶片岩石垣と類似する特徴を有している点、城内に占める位置などから、南面石垣よりは後出するが和歌山城の創建期に成立した可能性が考えられる。

（高橋方紀）

【参考文献】

『史跡和歌山城第25・26次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団 2002年

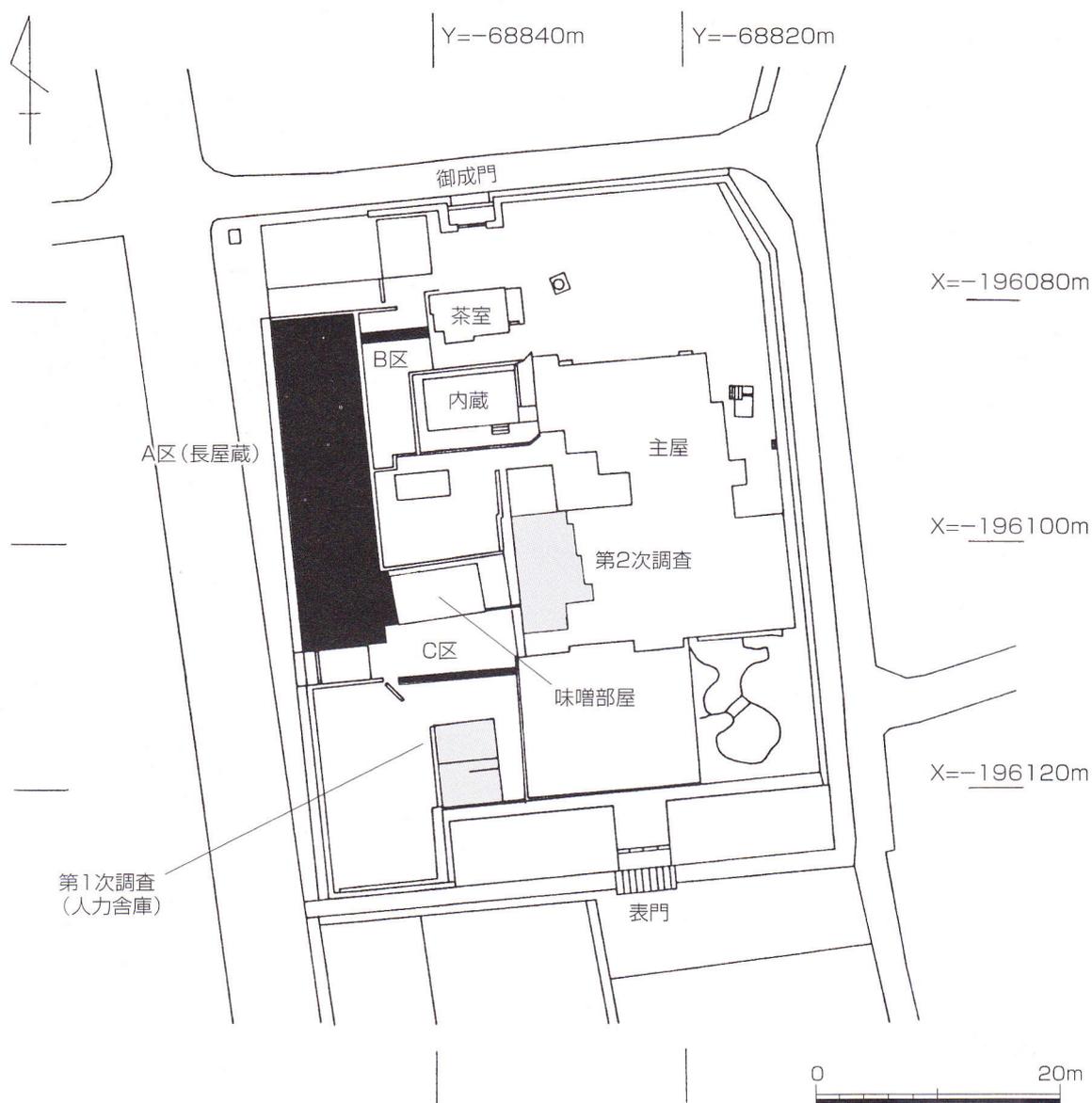
20. 旧中筋家住宅 第3次調査

調査地 和歌山市禰宜 148 番地

調査面積 255 m²

位置と環境

旧中筋家住宅は、国の重要文化財に指定されている建造物で、紀ノ川の南岸、岩橋山塊から北方に延びる丘陵裾部に立地する。中筋家は江戸時代には和佐組の大庄屋で、その建物群は大庄屋の屋敷構えをよく残している。現主屋の創建年代については、近年の解体修理によって主屋に葺かれていた鬼瓦に紀年銘が確認され、嘉永5年（1852年）頃と推定される。既往の調査としては、2000年に人力車庫を対象に第1次調査が行われ、家畜小屋として使用されていたことが明らかとなっている。また、2001年5月には主屋土間部分を対象に第2次調査を行い、東側に焚口をもつ竈の燃焼部や、石組の仕切り構造を有する貯蔵遺構が確認された。



調査位置図

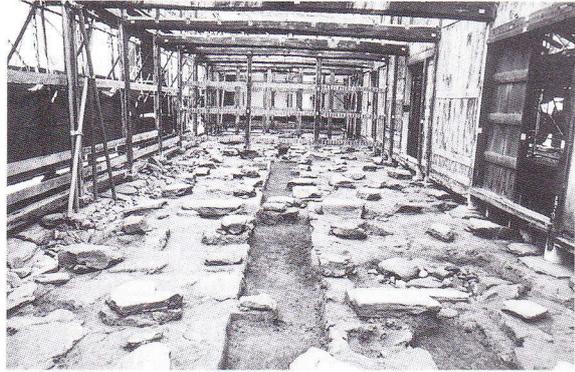
調査内容

今回の調査は解体修理に伴い、長屋蔵とその周辺部を調査対象とし、長屋蔵の地下構造とその変遷の確認を主目的として実施したものである。

調査前の状況は、建物の解体修理が終了し、礎石及び基礎石列などの施設が確認できる状態であった。そこで、現況面において、写真撮影を実施し、東西南北方向に各1箇所のトレンチを設定し調査にあたったが、現況面における遺構確認の必要から長屋蔵全体とその底部分に調査区を拡大し、A区とし継続調査を実施した。さらに、長屋蔵と周辺建物との関係を明らかにする目的で調査区を2ヶ所設定し、長屋蔵北側と茶室の間をB区、長屋蔵南側と主屋の間をC区として調査を行った。

まず、A区の基本層序は、近年の堆積層下に最終のタタキ面（第1層）があり、長屋蔵内部で2単位、土間部分では3単位確認することができた。このタタキ面の下層には、長屋蔵構築に伴う整地土（第2・3層）が30～50cmの厚さで堆積する。第2・3層については、長屋蔵南端部において第2層と第3層の間に整地土とは明らかに異なる暗褐色のシルト層が認められ、この層を境に第2層を整地土上層、第3層を整地土下層として区別することができる。第3層下には水の染みだす不安定なシルト層（第4層）が堆積し、北端の深掘部分において20cm以上の厚さを確認した。

遺構は、現況面である第1層を精査した段階で礎石・石列のホリカタを検出したが、長屋蔵南側においては礎石の多くがホリカタを有さず、第1層上に据えられており、最終のタタキ面を施す段階で、大規模な礎石・石列の据え直しが実施されたものと考えられた。さらに、第2・3上面で精査した結果、一部の礎石についてはほぼ同一の地点で礎石のホリカタを検出し、第1層上面でホリカタが確認できなかった長屋蔵北側の



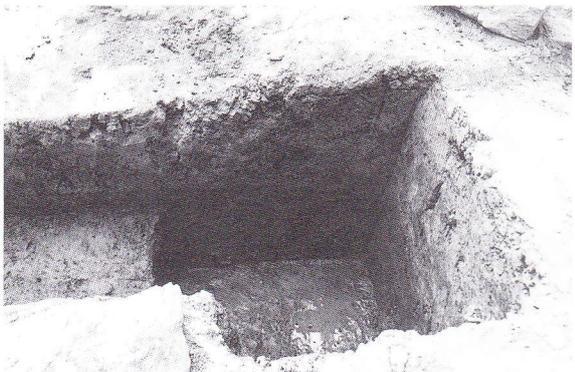
A区 長屋蔵内第2・3層上面全景（南から）



A区 礎石断割状況（南東から）



A区 石列1（東から）

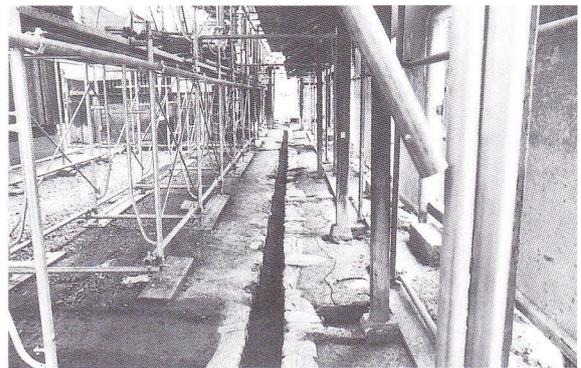


A区 長屋蔵内土層堆積状況（東から）

礎石についてもホリカタ及び、第3層上に据えられている状況を確認した。このことから、長屋蔵内においては少なくとも2度の礎石・石列の据え直しが行われたと考えられる。同じく第1層下面において、西側の基礎石列際で幅50cmにわたって捨て石を確認した。このことから、長屋蔵における構築順としては、整地土上層（第2層）→基礎石列・捨て石→タタキ（第1層）→礎石・石列の据えつけという順序が復元できる。この捨て石中には、煉瓦及びガラス片の出土があった。

その他、第2層下面において長屋蔵南方で石列を検出した（石列1）。この石列は整地土下層が南側へスロープ状に落ち込む先端で東西方向に約60cm確認し、10～30cm大の片岩・瓦が重なった状態で列状に並んで検出した。石列1の性格については明確ではないが、この石組を境として西側においては整地土とは異なる褐色系のシルト層が堆積することが注目でき、整地土下層が長屋蔵の床面として機能していた段階の関連遺構と考えられる。

庇部分については、第2層上面で雨落ち溝・礎石のホリカタを検出した。庇柱の礎石は断ち割り調査の結果、上下2石に積む構造のものがみられたが、庇柱1については第3層から切り込むホリカタが確認され、上の礎石に伴うホリカタが下部の礎石とは一致しないことから、礎石が2段のものについては下部のみが礎石として機能していた可能性が考えられる。また、一石のみで構築される庇柱は、長屋蔵内の層序との関係から整地土上層（第2層）に対応するものと考えられる。

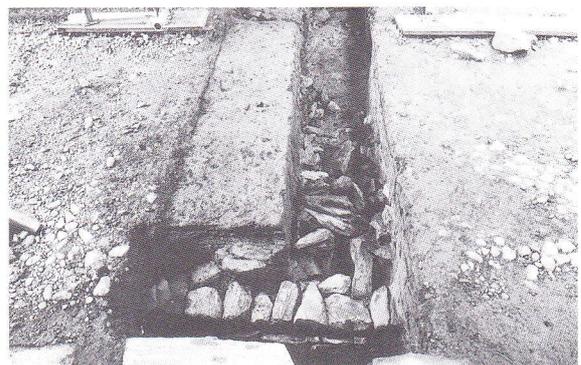


A区 庇部分第2層上面全景（北から）

B区については、表土（第1層）下に茶室西側の飛石・雨落ち溝の構築と併行する整地土（第2層）があり、その下層には長屋蔵から続く一連の整地土（第3層）が約30cm以上堆積する。遺構は飛石の西側、表土下約20cmにおいて石組溝と考えられる石組遺構を検出した。この遺構は南北方向に主軸をもち、約1m分を検出した。石組は4段、約52cm遺存しており、20～30cm大の片岩割石と一部に平瓦を小口積みする構造を呈するものであるが、最上部は10～20cm大の比較的小さな片岩割石を用いて構築されている。遺構の覆土は、長屋蔵の整地土と同一の土層であることから、長屋蔵周辺を整地する際に埋没したものと考えられる。石組遺構の年代については、石組の裏込め土が調査区西側の整地土（第3層）よりも先行する堆積であること、現飛石下面に構築されていることから、現在の建物群に先行する前身建物に伴う遺構と考えら



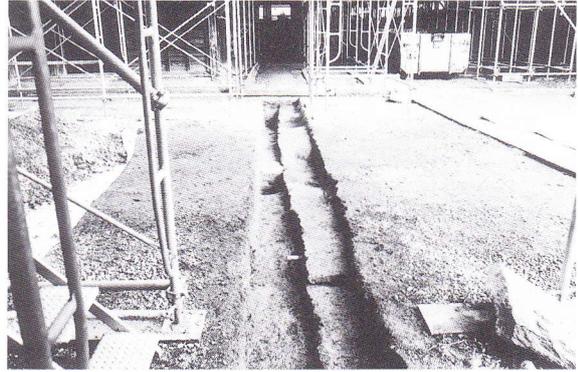
A区 庇柱1 礎石断割状況（東から）



B区 全景（東から）

れる。

C区の層序については表土として旧耕土、近代の整地土層（第1層）が堆積しており、上部は大きく攪乱されている。その下層には長屋蔵から続く整地土層（第2・3層）が堆積しており、深掘部では約40cm以上の堆積が確認できた。遺構は、調査区東側において瓦溜まりを検出した。瓦溜まりは、第2層上面において検出したものであり、多量の瓦類の他、針金、ガラスを含むことから、破損瓦の整理・廃棄に伴い近代以降に掘削されたものと考えられる。



C区 全景（西から）

遺物はA～C区の各調査区において、主に整地土層である第2・3層から出土した。出土遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、国産陶磁器などの土器類、瓦、土錘、土人形などの土製品、金属器や貝類などの自然遺物があるが、その大半は近代以降の瓦類である。また、A区基礎石列の捨て石中から「和佐中筋」と記されたガラス瓶片が出土したが、これは中筋牧場に関わる遺物として貴重である。

まとめ

長屋蔵とその周辺で実施した第3次調査では、まずB区で検出した石組遺構が現在の建物群に先行する施設と考えられ、前身建物の存在を裏付ける資料として新たな知見を得ることができた。石組遺構は約50cm遺存しており雨落ち溝としては規模が大きいこと、その主軸が現建物の主軸と異なり、その延長部が表門西側の石組溝に延長する可能性があること、またその検出位置から古絵図に描かれた敷地境にあたるものと考えられた。しかし、C区においては同様の遺構を確認できなかったため、単純に延長するものとは即断できない。また、現在の長屋蔵とその周辺は、石組遺構を埋め立て敷地西側を大規模に整地した上に構築したものと考えられる。

A区では、部材の痕跡や番付から長屋蔵に規模の拡張などの変化がある可能性が指摘され、その変遷を確認することが調査の主眼であった。調査の結果、その変遷を明確に示す資料を得ることはできなかったが、一部で礎石の据え直しを確認したこと、断ち割り調査による土層堆積の検討から、およそ3段階の過程を想定することができる（第1～3期）。

まず第1期は、長屋蔵及びその周辺を整地（整地土下層）した段階である。第2期は、長屋蔵南側において第1期の整地土上にさらに整地を行い（整地土上層）、現長屋蔵と同規模の建物へと拡張したと考えられる段階である。整地土上層は長屋蔵の南2/3のみで確認でき、それより北側には及んでいない。このことから、長屋蔵北側においては礎石の据え直しが行われなかった可能性も考えられる。遺構としては、長屋蔵中央部第2層上面で検出した礎石ホリカタがあり、庇柱、雨落ち溝もこの時期に整備されたと考えられる。第3期は、現況面である最上層のタタキ（第1層）を長屋蔵全体に施設した段階で、大規模に礎石・石列の据え直しが行われたと考えられる段階である。

以上のように、およそ3期の変遷過程を想定することができ、その変遷を建造物の見解と照らし合わせれば、第1期を規模拡大前、第2期を規模拡大時、第3期を修理前の現状として、それぞれ対応させることが可能であると考えられる。（川口修実）

21. 和歌山城跡 第8次調査

調査地 和歌山市十一番丁1番地内

調査面積 70 m²

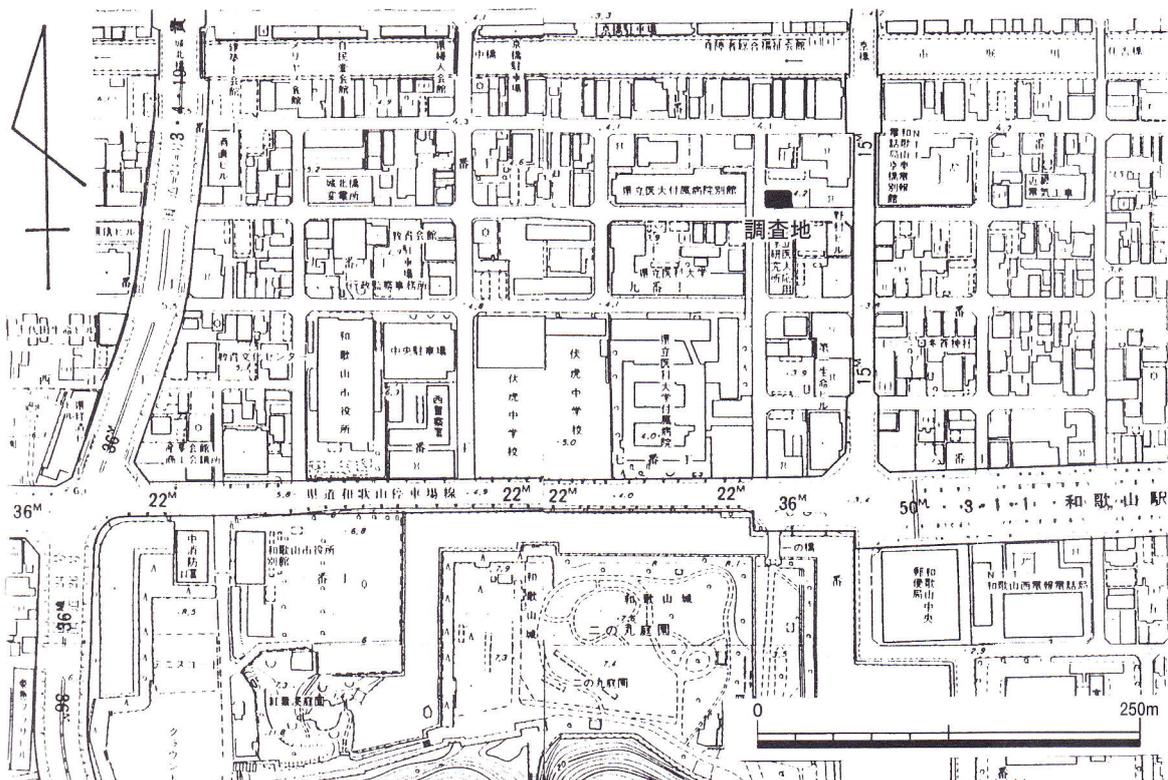
位置と環境

和歌山城跡は、紀ノ川河口南岸の和歌山平野のほぼ中心部に位置する。遺跡は和歌山城の三の丸（武家屋敷地跡）に相当し、これまでの調査において江戸時代の礎石建物や石組溝などの遺構が検出され、陶磁器・土器・瓦・土製品などの遺物が大量に出土している。調査地は、和歌山城北側に位置する紀州藩家老水野土佐守の屋敷地内にあたる。

調査内容

現地での調査は、南北方向に1ヶ所（第1区1～3）、東西方向に3カ所（第2～4区）の調査坑（トレンチ）を設けて行ったが、遺構の残存する場所は第1～2区、第1～3区、第3区に限られ、遺構を検出したが、攪乱を免れて残存していた上面の礎石4基を同じ検出面に残して調査を行った。上面検出の礎石4基は第1遺構面のものと認識し、第1～2区、第1～3区、第3区で遺構検出した面を第2遺構面とした。また、下層遺構の確認のため、遺構のみられなかった第3区の西端で深掘り調査を行い、第3遺構面を確認した。

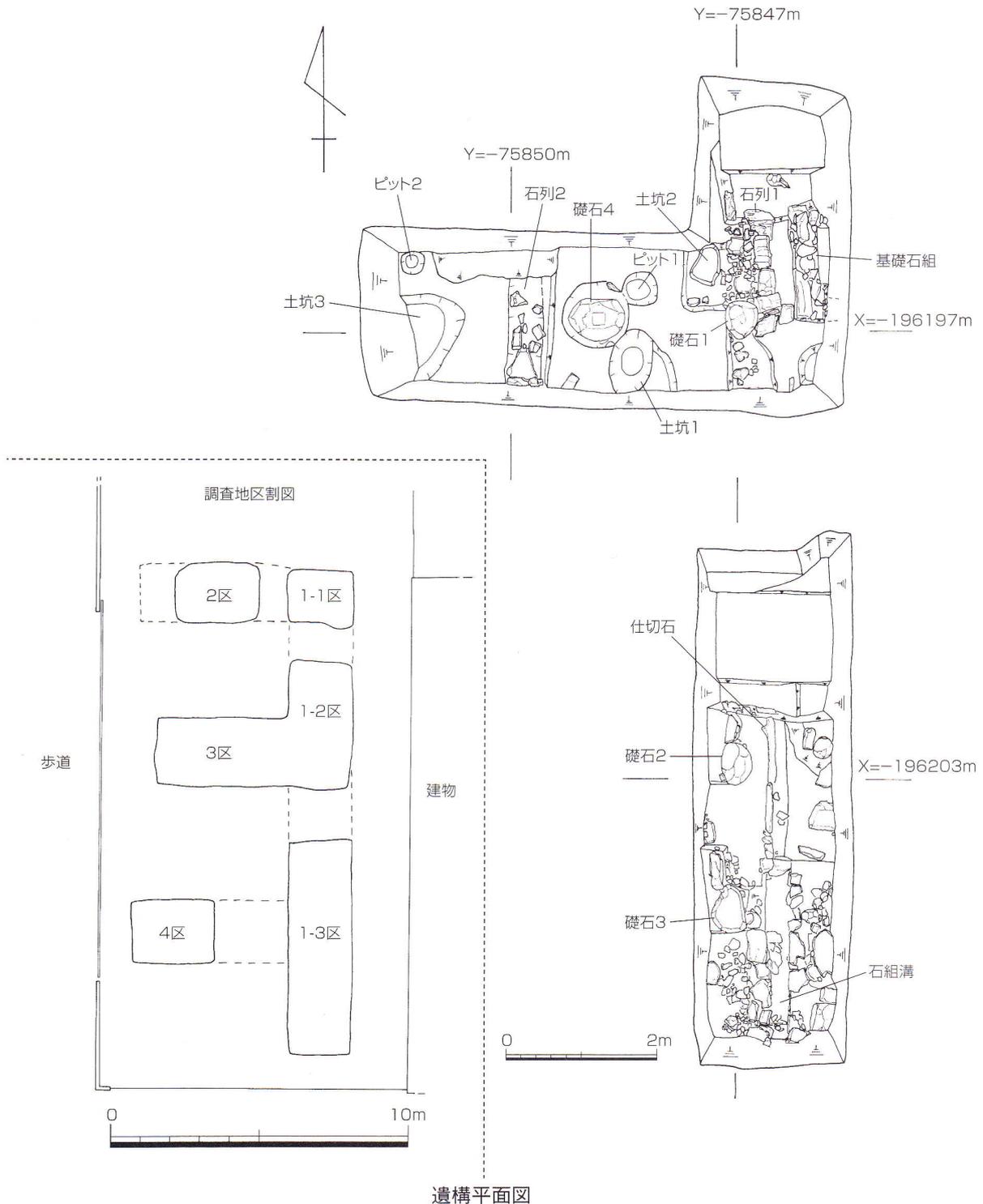
調査地の基本層序は、現地表であるコンクリートの舗装が約30 cm、その下面から第1層から第8層までの堆積土層を確認することができた。第1層は煉瓦などを含む近代以降の整地土で約20 cm、第2層は粗砂を多く含む約10 cmの堆積土である。次に、上面が第1遺構面（江戸時代後期以降）である粗砂を多く含む整地土（第3層）が約10 cm、その下は第4層が約5 cm、第5層も約5



調査位置図

cmの厚さで堆積する。第5層は粗砂を多く含む土で、貝などの植物残滓を多く含むが整地土と考えられ、上面に第2遺構面（江戸時代中期）がある。第6層は西側に緩く傾斜し、厚さ約5cmを測る。第7層は炭や瓦を多く含み、遺物は17世紀前半のものがみられる。第8層は遺物が出土せず、粗砂の堆積層で厚さ30cm以上の堆積であることを確認した。この第8層上面で第3遺構面（江戸時代前期）を検出した。なお、第2・3・5・6層は平面的には不連続な堆積層である。

遺構はそれぞれ3・5・8層上面を検出面とし、検出した遺構は、基礎石組・石列・石組溝・礎石・土坑・ピット（柱穴）などで、全て江戸時代のものである。遺構面の標高はそれぞれ、第1遺



構面が約 3.6 m、第 2 遺構面が約 3.5 m、第 3 遺構面が約 3.2 m を測る。遺構面の時期は第 1 遺構面が江戸時代後期、第 2 遺構面が江戸時代中期、第 3 遺構面が江戸時代前期と考えられる。

第 1 遺構面では礎石 4 基を検出した。これらの礎石は砂岩の自然石を利用したものとみられ、直径 50 ~ 70 cm、厚さ約 30 cm を測るものである。間尺は約 2 m を測り、真北方向に並ぶものとみられ、東西 2 間以上、南北 5 間以上の比較的規模の大きい礎石建物と考えられる。



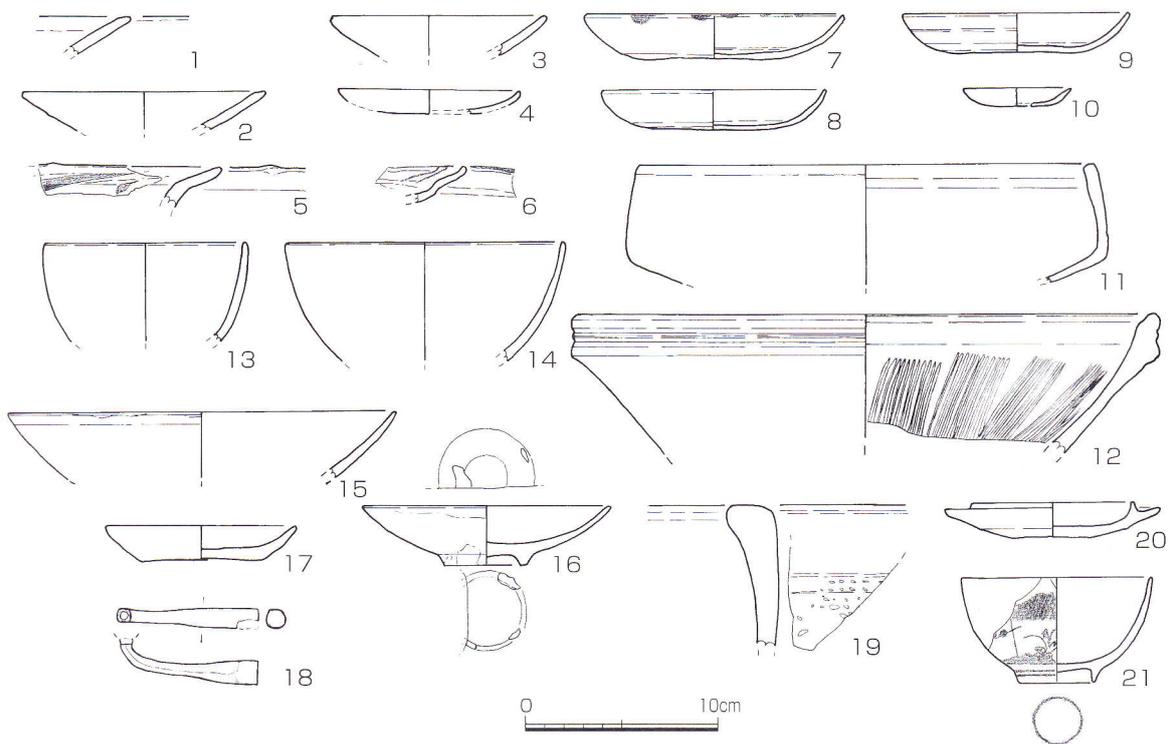
第 1-3 区全景 (北から)

第 2 遺構面では、基礎石組 1 条、石列 1 条、土坑 2 基、ピット (柱穴) 1 基、石組溝 1 条を第 5 層上面において検出した。なお、基礎石組、石列、石組溝、仕切石は真北の方向性をもつ点で共通する。

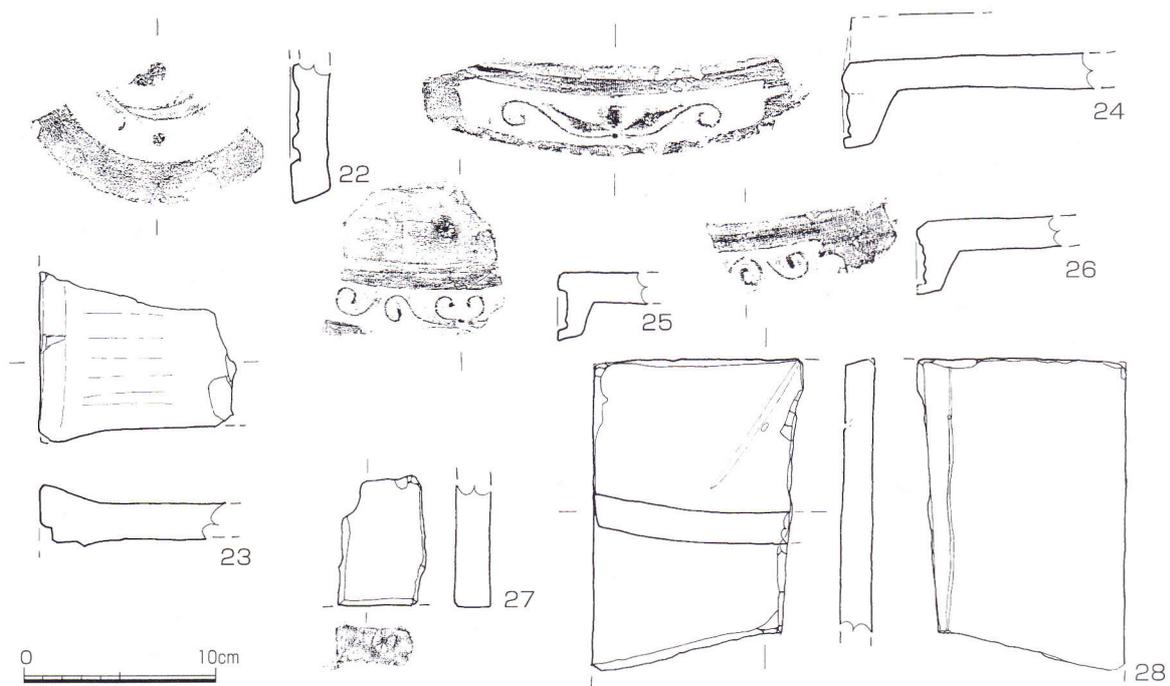
第 3 遺構面では、第 3 区の西端から 2.5 m の範囲で確認した遺構面で、第 8 層上面において検出したものである。遺構は石列 1 条、土坑 1 基、ピット (柱穴) 1 基を検出した。

遺物は、土師器皿・焙烙、土師質・瓦質土器火鉢、備前焼播鉢・灯明皿、丹波焼壺、堺焼播鉢、肥前系や瀬戸美濃系などの陶磁器、瓦、泥面子・土人形などの土製品、砥石・基石・火打石などの石製品、貝 (アサリ、ハマグリ、サザエ) ・骨 (スッポン) などの自然遺物が遺物収納箱 (コンテナ) に約 5 箱出土した。

以下、主なものについて、時期の古いものから順に説明を行う。



遺物実測図 1



遺物実測図2

1～6は第3遺構面に関する遺構から出土したものである。1～4は手づくね成形の土師器皿、5は瀬戸美濃系陶器の志野鉄絵皿、6は肥前系陶器の唐津皿である。

7～18は第3遺構廃絶後、第2遺構面までの整地土から出土したものである。

7～10・17は土師器皿で、底部処理について、7～9は回転ケズリ整形、10は手づくね整形、17は回転糸切りである。11は土師器焙烙、12は備前焼播鉢、13～16は肥前系陶磁器で、13は京焼系の椀である。14～16は内野山窯系のもので、14は白濁釉椀、15・16は銅緑釉皿である。18はキセルの雁首で、火皿は欠損している。

19～21は第2遺構面で検出した石組溝1の裏込めから出土したものである。19は瓦質火鉢で外面に密なミガキを施すものである。20は備前焼灯明皿、21は肥前系染付丸碗である。また、土坑2から土師器焙烙、石列1ウラゴメから堺焼播鉢なども出土した。

22～28は第3遺構面で検出した土坑3から出土したものである。22・23は軒丸瓦、24～26は軒平瓦、27・28は平瓦である。特に27の平瓦は側面に菊花文のスタンプがみられ、28の凹面には瓦を二分するへら描きの線がみられる。

なお、第1遺構面については、肥前系陶磁器、瀬戸美濃系陶磁器、瓦など多くの遺物が出土した。

まとめ

発掘調査の結果、基礎石組・石列・石組溝・礎石・土坑・ピット（柱穴）など屋敷地跡に関する遺構を検出し、江戸時代の遺構面を3面確認することができた。本調査で検出した遺構は水野氏の屋敷地内の構造を知るための貴重な資料であるといえる。（北野隆亮）

22. ^{かわなべ}川辺遺跡 発掘調査

調査地 和歌山市川辺 237 番地

調査面積 192 m²

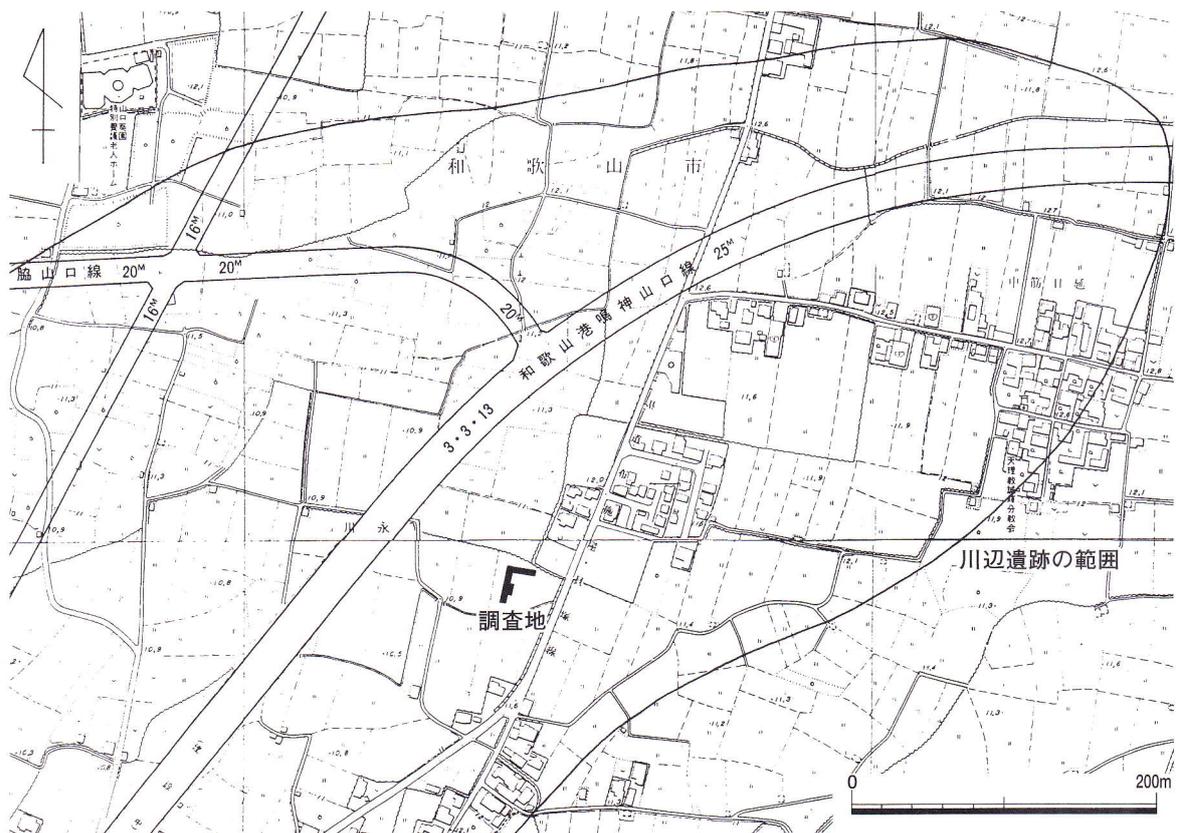
位置と環境

川辺遺跡は紀ノ川の河口から約 12 km 上流の北岸に位置し、和泉山脈の南麓、紀ノ川との間に形成された標高 11 ~ 12 m を測る沖積平野の微高地上に立地する遺跡である。本遺跡は、1987 年度から 1992 年度にかけて実施された一般国道 24 号和歌山バイパス工事に伴う調査によって、縄文時代から近世にわたる大規模な複合遺跡として周知されるようになった。またこの調査では、南海道の支線とみられる道路遺構の側溝が 2 地点において確認され、その内の一つは本調査地西側 140 m の地点で検出されていることから、今回の調査地点においてもその存在が予想された。

調査内容

調査対象地は、遺跡のほぼ中央部にあたる。今回の調査は、調査対象地全域の様相を確認するために調査区を L 字状に設定し、さらに下層遺構の有無及び土層堆積状況の確認を目的として部分的に下層調査を実施した。

調査区の基本層序については、現代の水田耕作土（第 1 層）下に床土（第 2 層）、その下層には江戸時代後期の遺物包含層（第 3 層）、縄文時代晩期から弥生時代前期の遺物包含層（第 4 層）がそれぞれ堆積する。第 5 層は上下 2 単位に分けられ、第 5 a 層は縄文土器が少量、第 5 b 層上面において比較的まとまって縄文土器の出土が確認できた。第 5 b 層については、調査の範囲では遺物を



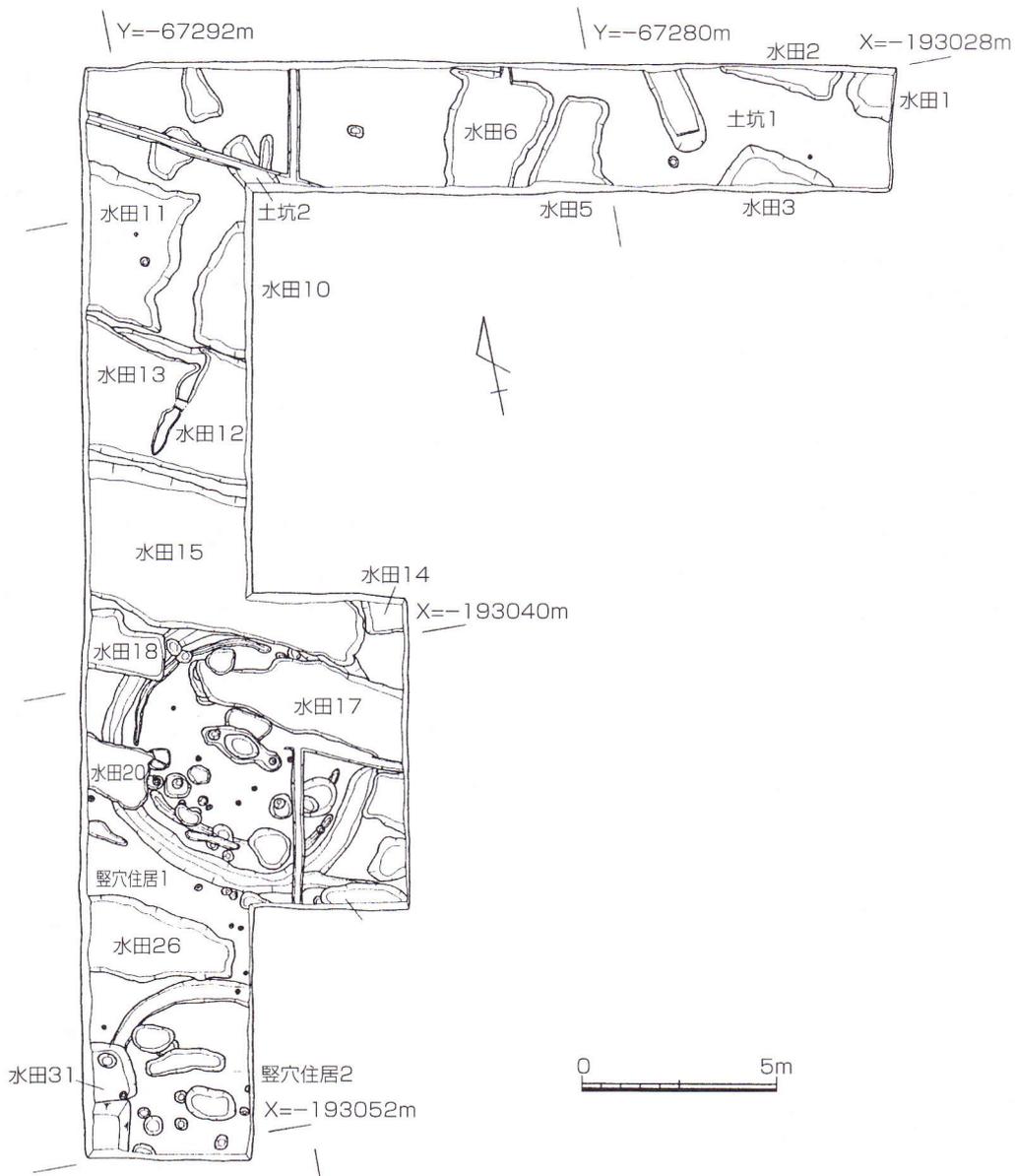
調査位置図

確認することはできなかったため、無遺物層の可能性がある。

遺構については、第4層上面において遺構面を確認し、弥生時代と江戸時代の遺構を検出した。また、第5b層上面において縄文土器が一定量出土したため、遺構面の存在する可能性があるが、明確な遺構を確認することはできなかった。

弥生時代の遺構としては、調査区南側において隣接する竪穴住居を2棟（竪穴住居1・2）、土坑2基（土坑1・2）、ピットを検出した。

竪穴住居1は床面上において壁溝を2条検出したことから、拡張による建て替えが行われたことが判明した。古段階は直径5.5mの規模を有し、幅15～20cmの壁溝と、炉とみられる中央土坑の周囲に4本の支柱穴をもつ構造である。新段階は直径7.1mを測り、幅40～50cmの壁溝と、炉とみられる中央土坑の周囲に5本の支柱穴をもつ。中央土坑の両側には直径20cm、検出面からの深さ10cmを測る柱穴を各1基検出した。出土遺物は、支柱穴の一つから弥生時代中期中頃の直口壺の口縁部が遺存状態の良好な形で出土した他、石鏃・石錐・太型蛤刃石斧・磨石・台石などの石器



遺構全体平面図

やサヌカイトの剥片が78点と多量に出土した点が注目できる。

竪穴住居2は竪穴住居1に隣接して検出したもので、復原される遺構の規模は直径6.2mを測る。炉とみられる中央土坑は、竪穴住居1と同じくその東西に直径20cmを測る柱穴をもつものである。壁溝は幅36cmを測るものであり、支柱穴は2本確認したが、炉の位置関係から本来は4本柱をもつ構造と考えられる。出土遺物は、支柱穴の一つから弥生時代中期後半の直口壺の口縁部がほぼ完形の状態で出土した他、磨石などの石器が少量出土した。また覆土が失われているにもかかわらず、竪穴住居1と同じくサヌカイトの剥片が15点と一定量出土した点が注目できる。

土坑1は調査区北東部において検出した遺構で東西0.8～0.9m、南北2.2m以上、検出面からの深さは0.6mを測る。木棺痕跡と考えられる直線的な落ち込みを検出し、炭を多量に含む下層の覆土が上部に立ち上がっていることから、木棺墓の可能性が考えられる。出土遺物は、覆土内から弥生時代中期の土器片、石庖丁・台石などの石器、サヌカイトの剥片が出土した。

次に江戸時代の遺構としては、調査区のほぼ全域において、畦畔の伴う水田区画を19単位以上（水田1～3、5・6・10～15、17～21、23・26・31）確認した。遺構の主軸は全て同一の方向性をもつ。遺構全体の規模・形状は明らかではないが、短辺3.0～3.5mのものと、1.5～2.0mのものに分けられ、長辺はもっとも検出長の長い水田15から7m以上の規模を測るものと考えられる。遺構の形状は不整な長方形を呈するものと考えられ、遺構の隅部には水口の痕跡とみられる乱れた部分が認められる。水田間には幅10～70cmの小畦畔と幅2mを測る大畦畔がある。水田11と13、12と13の境には幅30cmを測る盛土畦畔が形成されていることから、遺構の時期は単一の所産ではなく、2時期以上にわたるものと考えられる。また、農耕に関連する痕跡として、水田11からウシと思われる偶蹄類の足跡を1箇所検出した。遺構の年代は、出土した遺物の年代観から、江戸時代初頭頃と考えられる。



竪穴住居1（東から）



竪穴住居2（北から）



水田10～13（南東から）

今回の調査で出土した遺物は比較的少量であるが、縄文時代から近世に至る時期の遺物があり、中でも遺構を確認した弥生時代と近世の遺物が多く出土した。また、下層調査においては縄文時代後期から晩期の土器が一定量出土したが、その中には磨消し縄文と沈線文を施すもので、堀之内2式併行の関東系土器と考えられるものがある。

まとめ

今回の調査地点は、一般国道24号和歌山バイパス工事に伴う調査成果と合わせ、遺跡中央部の様相をさらに明確化する資料が得られた。

まず、本調査地の北側で行われた1987～1992年度調査区西側の成果と比較した場合、その多くが上下2面の遺構面が存在するのに対し、本調査では弥生時代中期から近世にかけての遺構を同一遺構面で確認した。また、その検出面も本調査地の方が50～80cm程度高く、本調査地周辺が周囲に比べ、より安定した微高地に位置している状況を指摘することができる。

検出した遺構・遺物では、弥生時代中期の竪穴住居2棟、木棺墓と考えられる土坑1基、近世初頭の畦畦を伴う水田区画19単位以上を検出した。また、遺構は未確認ながら、縄文時代後期から晩期の遺物包含層を確認したことから、下面に縄文時代の単一遺構面が存在する可能性がある。

調査地全域で確認した水田区画は、川辺遺跡では未検出のものである。その方向性は条里地割の方向性とは大きく異なり、現行の土地区画に近い方向性をもつ。川辺遺跡では既往の調査成果から、本調査地周辺は中世後期以降に耕地化していくものと考えられる。

本調査地の西側で検出された道路遺構の側溝は、今回の調査においてその延長部の検出が予想されたが、それに関連する遺構は確認できなかった。また、包含層出土の遺物においても、当該期の明らかな遺物は黒色土器が1点のみであったことから、その推定路線についても再考していく必要があると考えられる。

弥生時代では中期の竪穴住居2棟を検出したが、それは炉とみられる中央土坑の形状が楕円形を呈し、長軸方向の端部に柱穴をもつもので、いわゆる松菊里型住居と呼称される形態を呈する。和歌山県内では、本事例を含め8遺跡16例を数えるに至ったが、時期的には前期から後期前半まで継続し、その中でも中期中頃から後半の事例が多い。形態的には堅田遺跡の2例を除き、他の事例は中央土坑両端以外に床面上にも主柱穴が巡るいわゆる発展松菊里型住居と呼ばれるものに該当する。県内の松菊里型住居は、出土遺物の様相から石器製作や他の工房的な性格を有している可能性が考えられ、本調査竪穴住居1からもサヌカイトの剥片が多量に出土した点はそれを追認する資料と言える。しかし、石器製作は必ずしも松菊里型住居に限って行われたとは言えず、中央土坑についても本調査事例のように被熱の痕跡が少なく石器製作など炉以外の用途の可能性のある一方で、炉堤を有することから炉として機能していた蓋然性も高いと考えられる例が多いなど、一定の性格を想定できない。このことから、松菊里型住居と通例の住居の構造差が工房的な性格を有するという点のみに起因するとは言えず、今後検討していく課題が多く残されている。その上でも、今回の調査で確認した2棟の松菊里型住居は重要な調査事例と言えよう。(川口修実)

【参考文献】

『和歌山市内遺跡発掘調査概報—平成13年度—』和歌山市教育委員会 2003年

23. ^{しせきわ かやまじょう}史跡和歌山城 第24次調査

調査地 和歌山市一番丁3番地

調査面積 10 m²

位置と環境

史跡和歌山城は、紀ノ川下流域南岸の平野部に存在する標高48mの独立丘陵、岡山に築かれた平山城である。岡山は、東西2つの頂部を持つその景観から虎伏山とも称されており、中央の谷状地形を挟んだ西側には天守閣、東側には本丸御殿跡が配置され、丘陵北側平地部に二の丸、さらにその北側から東側にかけて三の丸、北西側に西の丸、丘陵西側から南側にかけて砂の丸・南の丸がそれぞれ取り囲む形で配置されている。

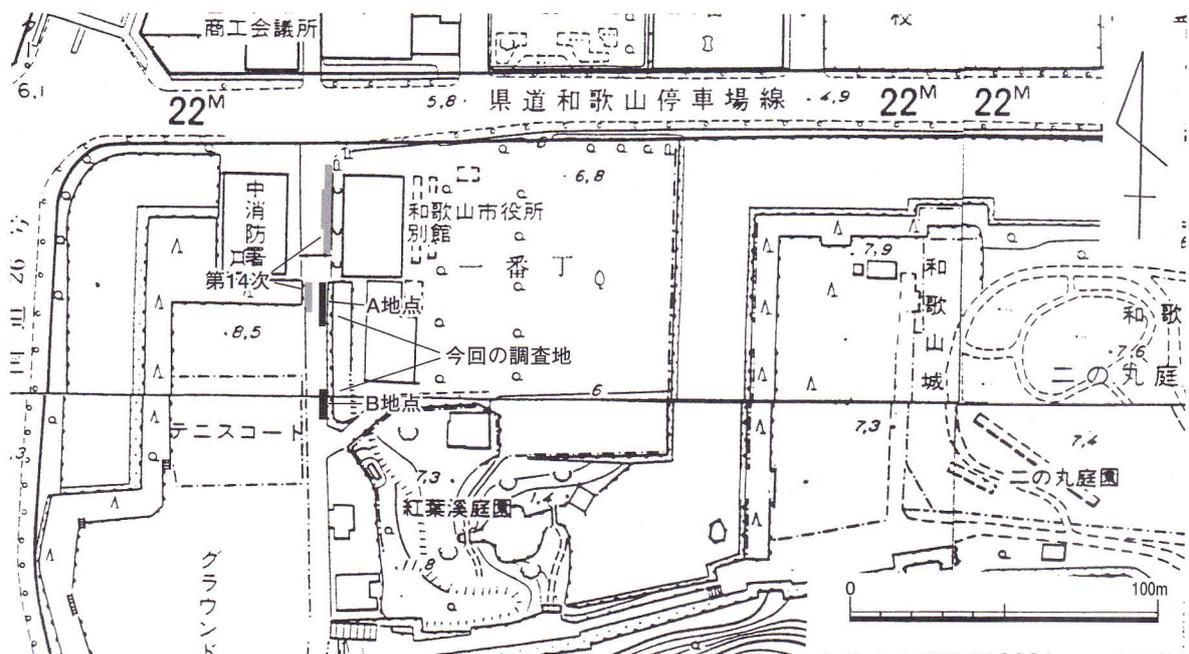
和歌山城北西隅入口に設けられていた御勘定門跡周辺において、配管設置工事に伴う立会調査時に礎石や板石敷などの遺構を検出したことから、検出遺構の写真撮影及び平板測量図作成等の調査を行ったものである。周辺の調査では、御勘定門跡周辺で平成7年に行われた第14次調査がある。

調査内容

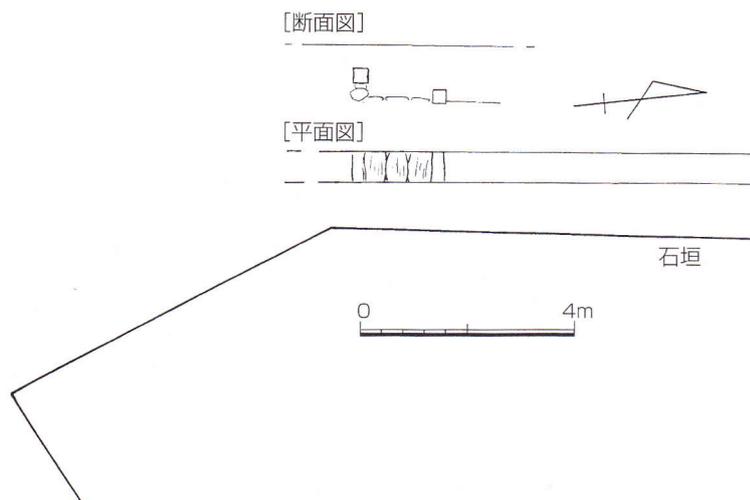
調査は御勘定門跡周辺から幅1mで南に約55m掘削した部分のうち、約45m地点で2m分（A地点）と御勘定門跡周辺で8m分（B地点）の計10m²の範囲で遺構を検出した。

A地点では東西方向の石組溝を確認した。溝は幅1.25mを測るもので、底石に結晶片岩の板石を敷き、側石には砂岩の切石を用いたものであった。この石組溝は御勘定門跡から南に延びる道路を横断するものであり、石組溝を境に南側の路面が約40cm高くなっていた。本来的にはこの溝には橋が架けられていたものと考えられる。

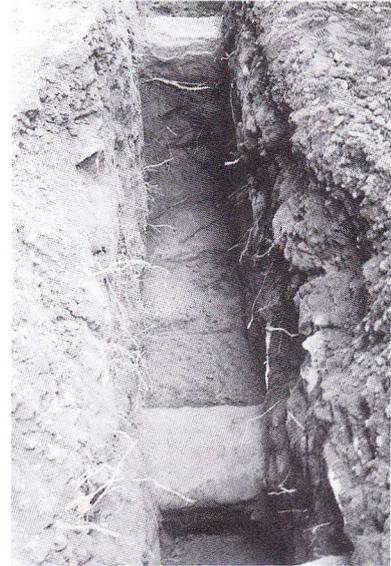
B地点では南側から、結晶片岩板石敷、砂岩礎石、砂岩切石列、結晶片岩礫敷などの遺構を確認した。特に、検出した砂岩礎石と砂岩切石列は平成7年度に行われた第14次調査で検出された御



調査位置図



A地点遺構略測図 (1/150)

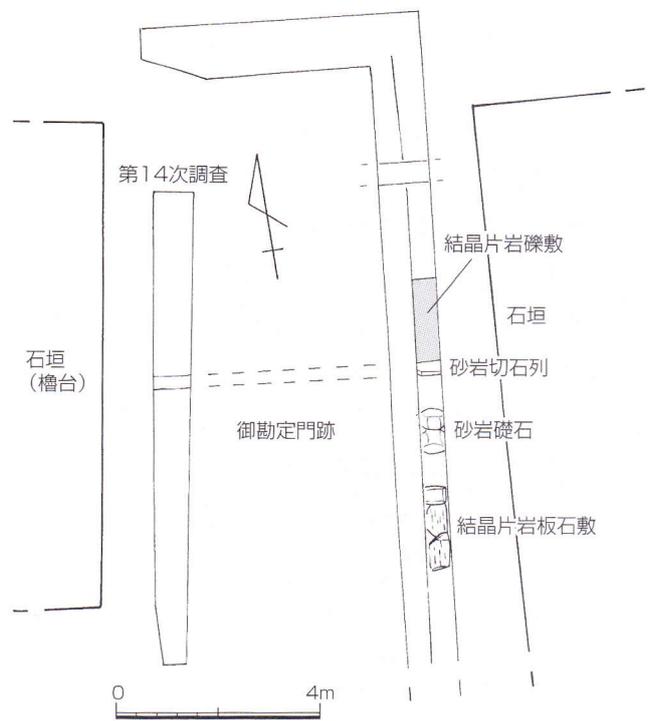


A地点石組遺構 (北から)

勘定門のものとみられる砂岩礎石・砂岩切石と対をなすものであり、御勘定門の遺構の一部と考えられる。また、砂岩切石列の北側で検出した結晶片岩礫敷や砂岩礎石の南側で検出した結晶片岩板石敷などは御勘定門に付属する雨落ち等の施設であるとみられ、砂岩切石列は北側に接する礫敷雨落ちの縁石であると考えられる。

まとめ

今回の調査で御勘定門跡に関すると思われる砂岩礎石・砂岩切石列（縁石）などの遺構を検出した。これらの遺構は、第14次調査で検出された御勘定門のものとみられる砂岩礎石・砂岩切石縁石と対をなすものと考えられ、今回検出した遺構群は和歌山城の御勘定門跡周辺の構造を知る上で具体的な資料を得たものであったといえる。



B地点遺構略測図 (1/150)

【参考文献】

『史跡和歌山城 第12次発掘調査概要報告書』(財)和歌山市文化体育振興事業団 1994年

『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』5 (財)和歌山市文化体育振興事業団 1998年

Ⅲ. 普及啓発活動

1. 書籍刊行

埋蔵文化財の発掘調査報告書を刊行し、関係機関等へ配布した。

第26集	『鳴神Ⅵ遺跡 第5次発掘調査概報』	(平成13年3月)
第27集	『太田・黒田遺跡 第45次発掘調査概報』	(　　　〃　　　)
第28集	『太田・黒田遺跡 第47次発掘調査概報』	(　　　〃　　　)
第29集	『史跡和歌山城 第23次発掘調査概報』	(　　　〃　　　)
第30集	『太田・黒田遺跡 第48次発掘調査概報』	(平成14年3月)
第31集	『太田・黒田遺跡 第49次発掘調査概報』	(　　　〃　　　)
第32集	『有功遺跡 第3次発掘調査概報』	(　　　〃　　　)
第33集	『太田・黒田遺跡 第52次発掘調査概報』	(　　　〃　　　)
第34集	『秋月遺跡 第9次発掘調査概報』	(　　　〃　　　)
第35集	『史跡和歌山城 第25・26次発掘調査概報』	(　　　〃　　　)

『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報7』－平成10(1998)・平成11(1999)年度－
(平成14年3月)

発掘調査報告書の編集を行った。

『和歌山市内遺跡発掘調査概報』－平成11年度－(平成13年3月)和歌山市教育委員会発行

『和歌山市内遺跡発掘調査概報』－平成12年度－(平成14年3月)和歌山市教育委員会発行

2. 報告会等の開催

和歌山市教育委員会と共催で報告会等を実施した。

太田・黒田遺跡 第45次調査現地説明会

平成12年12月23日 参加者約350名

有功小学校児童対象の有功遺跡 第3次調査現地説明会

平成13年7月12日 有功小学校構内調査現場 参加者6年生児童約70名

3. 速報展等の開催

和歌山市立博物館と共催で速報展を実施した。

『第4回和歌山市埋蔵文化財速報展「発掘物語2001」』

平成13年4月21日～6月17日 和歌山市立博物館 特別展示室

速報展に伴い調査報告会を行った。

『ミュージアム・トーク「スライドで見る最新発掘情報in wakayama city」』

平成13年5月12日 和歌山市立博物館 講義室

文化財班

平成16年3月31日

和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報8

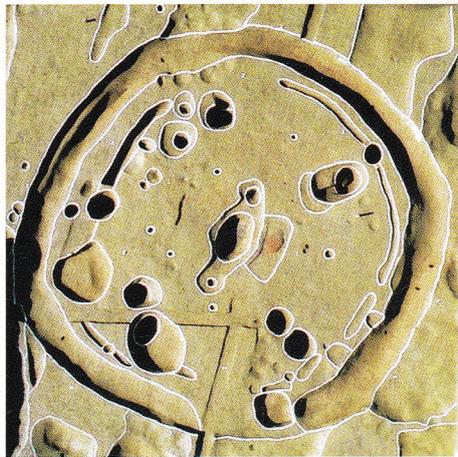
—平成12年度（2000年度）・13年度（2001年度）—

編集・発行（財）和歌山市文化体育振興事業団

和歌山市西汀丁29番地

印刷 中和印刷紙器株式会社

©（財）和歌山市文化体育振興事業団 2004



川辺遺跡 竪穴住居